

國姓爺忠義傳全

090661-000-1

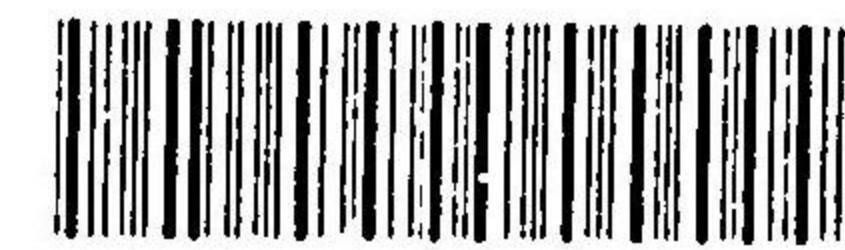
特10-877

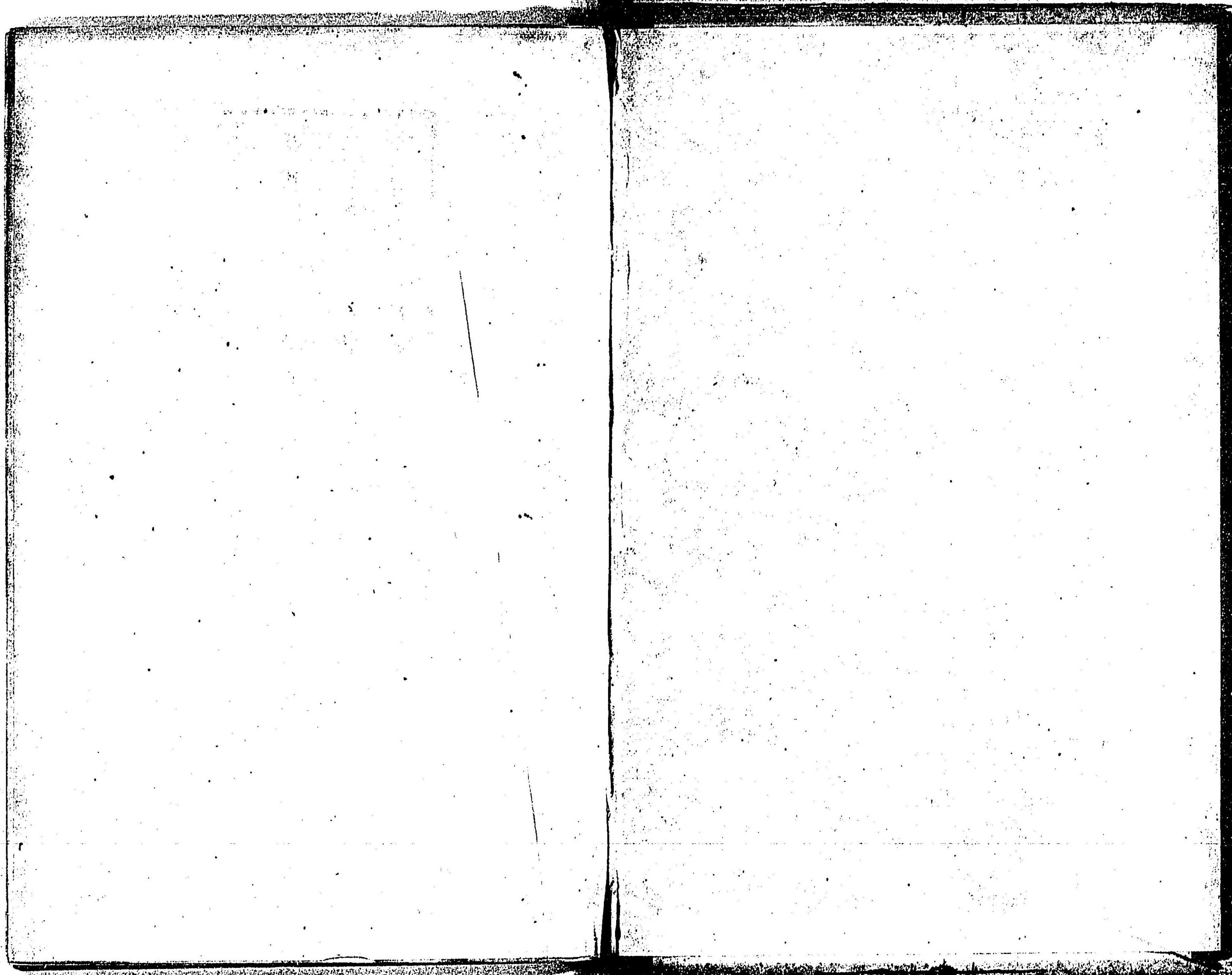
国姓爺忠義傳

西村 富次郎 / 刊

M19

DBN-1250





國姓爺忠義傳序

明治十九年十二月十五日內務省交付 1979

甚矣哉明季之亂也。其忠臣義士者。或殉難。或遭害。其他億

萬。臣民。悉降于虜庭。而無復一人竭力於王事者。唯有一

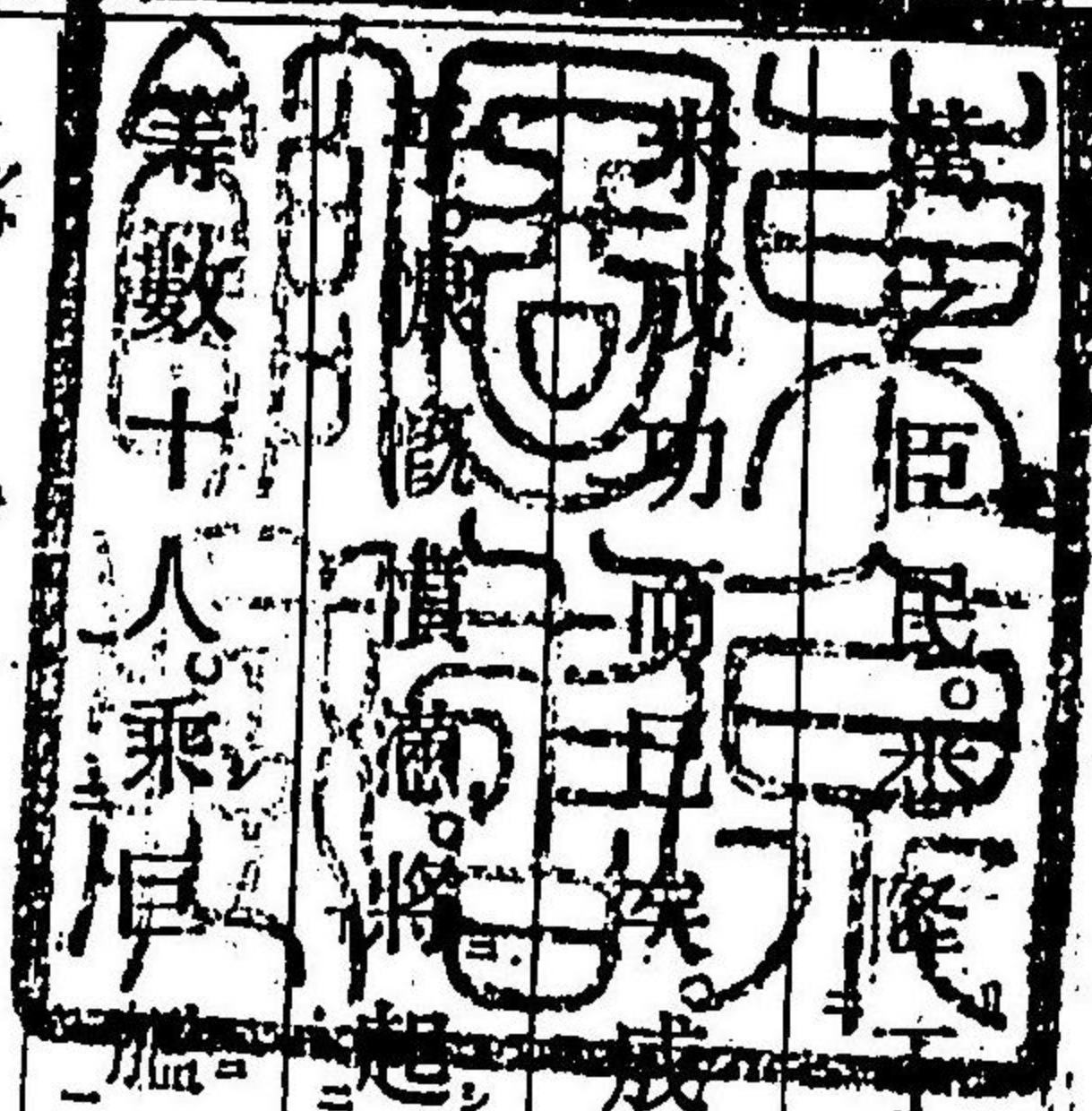
成功之爲人也。風儀整秀。傲儻有大志於。是

義兵。以圖恢復。乃焚儒巾。襴衫。而與陳輝

去收兵於南澳。得數千人。而後及將大舉

取南京。甲士十七萬。號八十萬。南征北伐。屢奏捷矣。遂進入

金陵。州縣皆望風納款。威震于遠近。既而爲清兵所襲。而戰



不利退而還島。成功念帝蒙塵于外。存亡不可知。第做故事。孤持正朔。乃取臺灣。改爲安平鎮。遷居焉。與民休息。興學校。養老幼。人民大集。居無幾而沒矣。終不能遂其志。雖然。以下之重爲己任。奉明正朔。殆二十年矣。其設心也。雖蜀漢武侯。何以遠過。實可謂明末一大豪傑也。頃日自由閣主人。因故玉山子所著國姓爺忠義傳。旁參考諸書。以編此書。固雖野乘。有補于世治。豈鮮少哉。迄書成。請余一言。因辦于卷端。

明治十九年十月

秋雨仙史識







知李總李勇

日科



明朝清臣杜君英

明帝皇商朱貴

義徒江國論





國姓爺忠義傳

總目次

- 萬曆皇帝驕奢恣逸樂
- 朝鮮乞兵禦倭軍
- 揚應龍叛西蜀
- 僧達歎死獄中
- 魏鞏建國号清擊大明
- 貝勒王定計討劉綎
- 鄭芝龍為遼經略
- 客氏得寵作亂
- 貝勒王定計陷瀋陽
- 黃龍瑞之妻死義
- 鄭芝龍盛清軍於仙杉谷
- 王化禎敗績黃寧

- 鄭芝龍坐事下獄
- 鄭芝龍航海之日本
- 吳縣人民死義
- 李嚴得開封府民心
- 宋孩兒見閩王
- 湯同蔣專因等喪官軍
- 周隅吉射李自成眼
- 崇禎帝封臣擊賊
- 崇禎帝開秘室
- 圖賊陷北京城
- 賊軍亂妨帝都
- 應劉伯溫圖識
- 忠臣殉死烈女死節
- 兩婦殺兩賊

- 李自成登位
- 吳三桂將請兵於鞏鞏討賊
- 吳三桂斬唐通
- 李自成遷金銀貨於西蜀
- 吳三桂大破李自成
- 吳三桂製猛虎扒山甲一破賊軍
- 李自成死羅公山
- 張獻忠死漢中
- 大清定鼎於燕京
- 弘光帝徵鄭芝龍
- 得天妃感鴻遠擒反間
- 鄭鴻遠盛北軍

- 西北兩軍討南京
- 左良玉戰白鷺灘
- 鄭芝龍說左良玉
- 史可法奪兵糧
- 鎮江落城
- 清豫王陷南京
- 唐王即位福州
- 隆武帝親征
- 隆武帝崩汀州
- 貝勒王定計捕鄭芝龍
- 北軍陷安平城
- 國姓爺破廣東
- 國姓爺奔南洋島
- 璦燕恣色傾城

- 璦燕之國姓爺陣
- 國姓爺拔安海城
- 韓固山中謀計戰死思明
- 設計策國姓爺破福建兵
- 國姓爺深智請和兵
- 永曆帝奔南寧
- 永曆帝漂沒
- 戴徒遺計破北兵
- 函輝定計殺阿古商
- 函輝使大宛島
- 國姓爺定大宛島
- 鄭芝豹反而降魏將
- 函輝勇戰水死
- 國姓爺擊殺猛虎

- 國姓爺謀討李成泰
- 國姓爺發兵攻宗明
- 國姓爺火計陷宗明
- 國姓爺橫槊賦詩
- 國姓爺拒諫向南京
- 國姓爺神力破城門
- 國姓爺夜走鎮江
- 南北大戰金陵
- 國姓爺再復思明
- 清帝送鄭芝龍講和
- 國姓爺得仙書於天柱嶺
- 國姓爺尸解并清帝治世
- 李勇斬怪獸於汛塘
- 神通道人出大宛

- 朱一貴見李勇於柱嶺
- 杜君英怒捉贈元
- 朱一貴結義於崗山
- 朱一貴定計取各塘
- 中勇直取南路營
- 一貴智取塗擊堤
- 許雲大戰安平鎮
- 許雲遺許燒兵糧
- 陳策計保淡水營
- 覺羅滿奏臺征計
- 諸國官軍出厦門
- 施世驥集兵於澎湖
- 吳龍偽應募往澎湖
- 錦囊計破鹿耳門

國姓爺忠義傳

○ 萬曆皇帝驕奢恣逸樂
漢士明の季亦當て國姓爺鄭森字の成功といふ者あり父の唐士閩の都督鄭子龍母の日本肥前國長崎丸山の遊女なり明の滅るを悲み義兵を東海より起し數度鞏人を追靡け清朝の威も屈せず終に臺灣に入て義各を全ふせし其始終を委く尋るる大元の衰る期も及んで朱元章字の國瑞といふ人一怒て義兵を擧前後十一年の戦ひも大元を滅し四海悉く一統し國を大明と号し年号を洪武と改む元年戊申の年金陵の南京も都し太祖高皇帝と申奉るの是也第二主を建文皇帝と申第三主を成祖永樂皇帝と申奉る此時四夷八蠻悉く入貢し明朝の盛なる事此帝の御時も過たるのなし是より後仁宗宣宗英宗世宗憲宗孝宗武宗穆宗代々明朝も帝王として國家繁花言ん方おし十三世萬曆皇帝の御時より國運漸傾き連年旱魃して五穀登らぬ地震洪水更起り万民殊も安ん心なし然るも萬曆十二年鞏國の大王阿魯台といふ者謀叛を起し暹加奴仰加奴といふ兩人の勇將も三十余方の軍兵を督せしめ西海も亂をさせば明の朝廷李成梁と云大將を遊擊將軍も拜し其勢五十余方を領せしめ鞏國の兵を防しむ李成梁命を受け給り大軍を引卒し遠く西海も趣き鞏國の兵を向へいどみ戦ふ事數月終に鞏人十五方を討取其猛勢彌盛ん也ければ鞏敢て敵する事

目次四

- 世驥定計復安平鎮
- 朱一貴埋地雷於柳原
- 藍廷珍破一崑身
- 世驥之壘陣破明兵
- 世驥逐敵浮海
- 廷珍大戰蘇錯申
- 世驥計折明水軍
- 朱一貴計劫敵營
- 廷珍入臺府安民
- 大宛地震疫癘流行
- 通計一百四款

總目次終

能ハ老和を請て戦をまゝめ本國へ歸りける是よつて李盛梁も軍を循め都をさして凱陣しけれ
 萬曆皇帝限りなく御感まし〜李盛梁を始めとし軍卒等を厚く恩賞し給へば皆方歳を唱へて
 さゞめさける是より後ハ邊塞の烽火も斷て明の朝廷文華専ら盛んとして武事ハ日々廢れける
 かく昇平久敷故もや萬曆皇帝宴樂のみを事とし給ひ北京の東も大なる苑を開かせ玉樓金殿
 を連て奇樹怪石數もえらむ植ちらへ水晶を砂とし琅玕を籬となし池を穿て河水を引き瑠璃の檻
 わざやか〜制立三千の宮女粧ひをこらし朝暮雲雨の交歡を希ぞ實も太平の天子なりけらし春ハ
 海棠の御宴とて數多の美人花を打てかざしよさし箏絡を擁して寵を求む帝自黃金の籃の中よ
 り一ツの蝶を放ち給ふよ三千の美女我劣トどかざしの花よてさし招くよさらでだよ色香深き傾
 國の風姿も名香を焦る、斗焚しめたれば色よめで香よ引れて彼方此方よ飛めぐり蝶の止りしか
 さしの花を嚇めて其美女の閨も御幸成り一夜の寵を添ふす是を蝶幸と號く又夏の夜の暑きよ
 ハ青雀の樓船を池水も廻らし描金せし竿を美人も取らせ薰風も納涼し天子青羅の襪より螢を放
 ち給ふよ宮女等皆薰微露梅花澗などの露を簪の花よそ、さ小扇を取りて手もたゆき迄止んとす
 たま〜かんざしせし花の上も螢の光り止れば其を其夜の愛姫と定む是を號て螢幸といふ秋ハ
 紅葉詩の句を題し是を御幸のかけものとし號けて紅幸と稱しいと寒き冬の夕ハ香湯を室も湛
 へ美女と俱も浴して戯れ給ふを鴛鴦會と號け給ふ帝かく色を重んと給ふよより御情の雨露内家
 衆を露し一百人の皇子誕生まし〜けるハ例あらざる御事されば百官是を壽て万歳を唱る聲洋
 々として耳も盈り

○朝鮮を兵禦三倭軍

萬曆二十年の春日本豊臣關白秀吉公兵船數百艘を遣し朝鮮國へ押寄せ釜山浦を討圍みさんく
 よこそ攻られけり國王李貽叶ハすして義州をさして落行よぞ日本勢破竹の勢ひよて終も王城を
 責落し鴨綠江を打渡り大明の地も攻入よし罵る程も明朝の群民大さ驚き老たるを扶け幼きを
 抱き遠國へ走り山林も逃まどひ都都ともも其騒動大方ならる然るも朝鮮王李鈴明の朝廷へ檄を
 飛し援兵を乞事櫛の齒を引が如し是よつて萬曆皇帝懼をみし急も總兵祖承訓も二十万の兵
 を督せしめ江を涉て防かしむ日本の諸大將猛勇よして明の官兵大さ潰れさん〜成て敗北
 それハ誠も勇々敷大事かゝとて再百万の大軍を起し李如松といふ勇將を大將軍よ拜し平壤道よ
 屯して日本勢を防しむ依て日本の將士先づ退て軍を王城もあつむ明の大將軍李如松勝も乘て碧
 蹄館といふ所迄追かけしが日本先鋒の六將加藤主計頭清正小西攝津守行長等が刀法勇猛彼關羽
 張飛をも欺く勢ひあれバ李如松も味方の兵を失ハん事を懼れ敢て遠くハ追討す其翌年明朝の説

客沈惟敬といふ者日本の陳よ來つて和睦を計小西某なる者を誘ひ明朝より日本の封を請ふ
 萬曆帝群臣と計議して關白秀吉を日本王と對すべしとて李宗誠といふ者を正使として楊方亨と
 いふ者を副使とし沈惟敬と同く日本の地對馬の島よを渡りけり此所の太守宗義智が館を暫く滯
 留したりけるよいかある謀計の者の所爲ありけん日本の兵一人來り李宗誠が從者よ逢て申ける
 の太守義智悪心を生じ汝が主人李宗誠と楊方亨の兩人を殺害せんと計る間御用心候へかしと誠
 しやかよ訛かしければ彼從者よと也と大きよ驚主人李宗誠よ此由を告たりけり李宗誠甚恐
 れ忽ち面色土のごとく取物も取敢ず明帝より日本へ遣はさるゝ聖書も其儘よ打捨て夜よまざれ
 小船よ取乗り跡をも見ずして逃歸れり萬曆帝大きよ怒つて李宗誠を獄よ下し楊方亨と沈惟敬兩
 人渡海すべし旨命じ給へば兩人承り頓て日本へ渡り秀吉公よ謁し和平を執行よ是よよつて朝
 鮮在陣の日本勢軍をまよめ歸朝しける然る萬曆二十五年再び日本人大軍を起し朝鮮を責破れ
 萬曆帝甚愕り給ひ楊方亨沈惟敬等を召出糺明有しよ私怨を構へ和睦の始終偽りのみよて前
 後首尾せざるを以て關白秀吉甚怒り再兵を起して朝鮮を責るよし白狀よ及ければ帝大よ
 憤り玉ひ沈惟敬を引出して首を刎楊方亨が官を削り庶人と成し再大軍百万人を集め楊鶴と劉
 綏の兩人を將軍と成し朝鮮を援せ給ふ兩將忠清道貫海道の二手より進み日本の陣營よ逼り日

○楊應龍叛西蜀

夜台戰止時なし時よ日本關白秀吉公伏見の城よ獲御有ければ朝鮮出陣の諸大將先を争ふて歸國
 し前後七年の戦よ苦しみ果し朝鮮の國王上下の官人民百姓よいたる迄喜びの眉をひらちける
 此時大明の都よ日本の寇朝鮮を退さぬと聞て人民心よ安トけるが兩京の間度々地震し山崩れ
 川潰へ死傷の者夥しければ民庶又心を苦しめいかなる事か出來らんと思ひ煩ふ折節時ハ萬曆
 二十七年楊應龍楊朝棟といふ父子の者謀叛を起し西蜀の地よ楯籠り人民をおびやかし財寶を奪
 ひ婦女を奸淫し亂妨狼藉限りなしと蜀の令より訴へしかば將軍劉綏よ數十方の軍勢を相添西蜀
 を征せしむ劉綏命を領し不日よして彼地よ到り賊營よ押よせ天地も崩るゝ斗戰大きよ討勝首を
 取事數をしらす楊應龍父子山關よ引退さ嶮岨よ支へて防ぎ戰ふ抑蜀山の嶮岨といふハ万嶺岨
 々と嶺中よ一線の細道通せり一騎打の坂路よして七盤九折のさかしきハ鳥さへもかよひがた
 し此切所よ火箭石砲を備へ置官軍の上り來る其中へ一同よ動を打放せば或ハ中天よ打上られ或
 ハ手足を打放され人馬彌が上よ倒れ死し進んやうのなかりけり劉綏是を見て士卒よ下知して云
 く嶮關敵の頼とる固え搦手ハ必空虚成らん左右の間道より進み責よとて數方の兵四路よ分
 れ猿を放ち其尾を慕ひ女蘿よ手をかけ巖角よ足をつまだてかづきつれて推登る案のごとく搦手

よハ賊兵僅ハ五千餘人何の用心せる体も亦く應龍夫婦酒宴を成し悠々として居たりける時左
 右の間道より一同ハ動と闘を作り數万の鳥銃をつるべハなら先を争ひ切て入れハ思ひ設けぬ賊
 兵どもこのいかにと周章ふためき防ぎ戦んといふ者なく我先よと逃出せハ大手の嶮關を支へた
 りし軍兵ども是を聞て大ハ驚き持口少しゆるみけるハ前後の官軍得たりかしこと一同ハ攻登
 り柵を破り逆茂木を引崩し當るを幸ハ切立れば楊朝棟も亂軍の内ハ討死し楊應龍も今ハ是迄と
 思ひければ室ハ火をかけ自縊れ死したりける官軍透間なく切入て應龍が妻田氏をも一刀に切
 殺し賊徒數百人を生捕し討取首ハ其所ハ梟並べ凱歌を唱へ軍をまとめ都をさして歸陣しける

○僧達觀死二獄中一

去程ハ萬曆皇帝ハ明暮酒色よのみ溺給ひ御政事正しからせまします友よや打續き天災地妖 屢
 なれば万民安き心更よなくいかなる事が出来ぬらんと歎き悲まざる者もなし帝の近臣錢夢阜沈
 一貫などいへる姦臣百一帝ハ酒色のみ勸め奉り寵を蒙り恩賜を貪り政道を亂しぬれば官軍ハ積
 たる金銀ハ日々夜々ハ減じ専ら國々の年貢をまし 税を虛て民の財寶を歛めさせられければ
 百姓みも恨み怒り忠義の臣ハ亡國の基なりと上疏して諫め奉れと佞臣等は隔て帝ハ夢も知
 らせ給ハ昨日々ハ奢侈のみ募ける或時内裏の御殿毎ハ匿名書を成したりけるを群臣怪み披き見

るハ帝御寵愛の多妃鄭貴妃とヤ涉方皇太子を惡みて帝ハ様々讒言し自ら産給へる第二の皇子を
 太子ハ傳き奉らんと密に謀り給ふ由を書載たり帝此事を聞し召れ鄭貴妃元來賢よし未だ皇太
 子を讒奏なしたる事はたし 必逆惡の亂臣有て朕父子が間を離し 妨んどの工みあるべし急ぎ
 匿是書せし姦人を捕へ刑罰すべきよし嚴に詔り有ければ此詮義區々よて朝廷いと騒しかりき
 爰ハ達觀紫柏大師といふ大高德の禪師あり康丕揚といふ者常ハ此大師ハ參禪して師弟の約あり
 又趙士禎と云姦曲の内臣あり此者大師と丕揚とを怨る事有て此度の匿名書ハ丕揚が所業よて達
 觀が作る女書と種々ハ似つかしき妖言を構へて讒言しければ哀れむべし達觀丕揚の兩人無實
 の罪ハ落て 鐵の枷を入れて獄ハ下り火水の責を受ぬるこそ是非もなかりし動靜ハ達觀大師道
 心堅固の知識なれば更ハ歎き苦しむ面色も筆視を乞て獄舎の壁ハ一偈を寫し其辭ハ曰く
 柵聲 不 斷 鈴 聲 續 誰 是 聲 分 誰 是 聞 因 憶 法 堂 鍾 鼓 後 古 來 魂 夢 更 紛 紜
 斯の如くしるし獄中ハある事十余日靜然と座して遷化し給ふ其外鐘磬といへる琴師沈合琴とい
 ふ醫師などもつみさくて獄中ハ繋れ日々ハ苦しき枋問ハ懸るといへとも犯せる罪も非れば白狀
 そべき謂もなく其罪未定まらず亦來此匿名書をなしたるハ内官の姦人趙士禎沈沈等が巧みこ
 しらへたる事なるを其罪を人ハぬらんとて斯谷なき者を捕へ獄ハさいかめとも終ハ事落着す

へる体もみへされば傲生光といふ假金したる罪人を彼匿名書したる者こと号け引渡し磔よか
 けて諸人の口を塞ぎける實は傲生光の贖金の大事われ命助かるべき者は非すといへども犯さ
 らぬ罪まで課せられ怨みて死たりけり其夜彼姦人趙士祖卒は大熱を發しおられぬ事を口走り匿名
 書をなしたるに我所爲なるぞおらゝ恐しや傲生光が怨をなさんとて來るぞやと狂ひ死し
 たりける不思議や死したる其屍磔よかけたる罪人の如く肉ささくは砕るを見る人舌をふる
 りしける沈祐も同じ夜生光が死體よ犯され是も同時死したりけり誠は積惡の余殃なりと身の
 毛もよだちておろし、斯宮中よ内亂の起りぬる事も鄭貴妃が産給ふ第三の皇子都よまします
 故ことて遠く河南の地を賜ひ号けて福王と申奉る

○ 鞞鞞建國号清擊大明

鞞鞞國といふの中國の北に隣り地方廣大にして東に蝦夷ままじり西に天竺の龍沙よ並び寒國
 なるがゆへ氷雪を厭ひ人強きを以て戦ひ恐れを國中千里の駝馬多く幼きより騎馬を事とし
 縦横自在に御する事他邦の人よく及ぶ事なし常は禽獸を喰ひ獵を業とす文字の縦は十二員左よ
 り右へ讀む其人の頭を剃頂髪を殘して了結よし衣服の多く獸の革を用ひ必襟を右よ其
 むかし元の世祖鞞鞞より出て中國を伐從へしより以來堯舜の道廣まり仁義の教へ國中よ普くし



て頗る蕃夷の風俗をあらためぬ然るも明の季萬歴の朝廷政道苛くして百姓怨み苦しみ國中の人
民鞞鞞へのがる、者少からむ此時鞞鞞の大王奴兒哈といふ者天の縦せる聖智よして徳を以て人
を懐け常々中國を窺ふて是を征せんと圖る明の萬歴四十六年鞞鞞國号を大清と号し年號を天命
と建其元年貝勒王といふ者を軍師として三百余方の大軍を起し明朝を責傾んと九月のはじめ
鞞鞞國を出陣し萬里の長城を容易踏遼陽の北鎮なる撫順城を取圍む此城は明の大將李永芳と
いふもの僅一万人の兵を領して守りけるが清の大軍三百余方人は敵對をべりやうを有されば
兜を脱いで降参る貝勒王大軍を引て城を昇り百姓を安んじ年税を免し味方の軍士を令を出して亂
暴狼籍堅く禁め百姓の妻なき者も鞞鞞人の娘を娶せ夫なき者も鞞鞞國を送り嫁せしめ全國の
男女婚姻をなさしめ専ら仁慈の政事を施し万民を撫育しければ人民大に悦び久しく明の苛政も
苦しみ居ける町八百姓皆髮を剃了結し頭を改め清朝の天子万々歳とを祝しける明の朝廷も此事
聞へければ万歴帝大に驚き給ひ急ぐ二十万の軍兵を集め李維翰長承胤を兩將軍と成し清河關と
いふ所を屯して清兵を防し清の軍師貝勒王降將李永芳も二十万人の軍勢を與へ清河の東よみ
し來り合戦を催しければ明の將軍長承胤白兔馬も黄金の鞍置せ陣前よ進み出て大音も罵りける
爾李賊人而獸心類代明朝の臣として恩を忘れ利を貪り國を賣る逆賊何の面ばく有て爰も來る

めといひも敢て一丈の縁沈鎗をひねつて一文字を突来る李永芳羽扇を以て一度まねげば清の陣
 中より安大人といふ大将一丈三尺の大戟を揮て班馬を躍せ承胤を討てかゝる兩将人又越たる強
 勇され一往一來火を散して戦ふ事三十余合いまだ勝負も見へざる前清軍より射出毒箭雨
 よりも猶繁く承胤が乗たる馬四足を射られて倒れぬれば主の大地へがたと落るを安大人得たり
 かしてしと戟を取のべ一刀は切殺し清兵同時は鬨を作り明の大将張承胤を討取たりと聲々呼
 へり霧地暗く衝立れば明の大将軍李維翰大に怒り軍兵を魚鱗立一聲は動と喚いて利進め安
 大人を始めとし清の大軍此勢ひは辟易し李永芳も諸ともは隊へをみだしさんくは敗走を明兵
 大に勇み余をまじと追討事二十里斗鐵嶺の麓に到れば日光西に沈み夏に遠寺の鐘聲軍人の肝を
 寒からしむ時は相圖とあはへて鐵砲一聲響く程こそあれ玄武朱雀の旗二流れ月影よりめり出
 て清の左先鋒吾金王右先鋒海利王各十万の選兵を引率し間道より横ざりは鬨を作つて斬て
 かへれば初め敗走せし安大人馬を返して躍り來り三方を揉合せ喚き叫んで戦ふは明兵粉のと
 どく亂れ麻の如く斬倒され七頭八倒討る、者數十万人血の流れて河をなし屍の積で山に似たり
 哀むべし明の大将軍李維翰清の裨將李袁といふ者も生捕れ三十余方の軍兵忽ち潰へぬれば貝
 勒王大に悦こび則清の大將軍接政王を清河城に請に官庫を開ひて百姓を賑かし悉く年貢を

免し頗る恩恵をもつて民を安んじぬれば百姓頌を撫て喜びいさみ長く清國の民たるべしと頭を
 刺て腹従しけり

○貝勒王定計討劉綎

天衆民を生ず之が爲に君を置て之を養ひ治めしむ人主不徳にして政を布事均からざる時ハ天
 之を示す災を以て不治を戒むといへり此時夜毎は白氣東の方またあひさ立て其長さ事百丈バ
 かり明の朝廷天文博士を召て其吉凶を考へしめ給ふは是蚩尤旗をいへる星にして軍の發さん象
 之と奏すしかのみならず都近き國々の山家田園を論せず土より毛を生じ其色或は白く又は黒く
 長さ事一尺は余れり占者淮南子を引て曰地毛を生ずるは兵起り民安からずと奏聞す帝是を聞し
 召れは心を苦しめ給ふは韃靼の軍強して李維翰張承胤の兩將討死し二十余方の官兵悉く潰け
 るよし追々奏聞しけるほどは帝をいじめ參らせ百官色を失ひ震ひおそれ再び李如柏と杜松とを
 兩都督と成し柴誠柱と劉綎とを遊擊將軍と拜し三十万の大軍を發し遼の地の左右より進發せし
 む清河城より清の軍帥貝勒王のやく是を聞かかねて數方の軍兵を伏置て官軍を討んとす明の都
 督杜松は十五万の兵を引率し五嶺關を越て渾河といふ所まで押行けるは忽ち清の附馬鐵丁知彪
 馬德光等の大将十八万の選兵を以て遮り支へ兩軍互に喊を作り矢炮を飛し喚き叫んで戦ふたり

明の大將杜松自ら鎧を捨てて群がる敵軍へ會釋もなく突入して前へ進む軍卒二十余人また、く中
 へ突殺し血跡を開き中軍へ切入たり清の大將丁知彪大さな怒り丈八の戟を取て杜松を目がけ討
 てかゝり双方間ゆる強勇なれバ未の時より酉の時まで火水も成て戦ひけるが丁知彪は北胡の勇
 将年いまだ三十も盈老杜松の齡既に五十も余りぬれば終に敵する事能はる力尽き氣勞れ血を吐
 て馬より落り丁知彪がため討れける大將かくの如くなれば明の一軍大に破れ討る、者數を知
 らず清兵の勝に乗じ逃るを追て進む程は柴國柱が軍兵十五万をもさんさんへ衝崩し其鋒先の尖
 き事利刀の竹と破がごとく敵し難くぞみへよける明の大將軍劉綎の老練の名將なれば問道より
 大將を進め勝誇たる清兵の正中へ思ひもよらぬ斬へて突立く必死も成て戦へば清の物軍大に
 みだれ陣脚を立かね右往左往も崩れ行を大將附馬鐵馬を陣頭も乗出し青龍刀を打ふつて當るを
 幸も切て落し勇を振ふて血戦すれば清兵これより力を得追つかへしつ生死をしらす戦ひし烈
 しかりける次第之明の先鋒劉招孫と清の裨將即故山兩人の等しく假月刀を打ふり馬をまじへて
 相戦ふ集草駄天の威を逞ふすれば此方の毘沙門天の勇を驚ひ馬烟を擧げて六十余合戦ひしが劉
 招孫目明か手バやき事電の如き猛將なれば少しの透向へ馬を乗入刀を上げ終に故山を兩斷
 ち斬て落し勢ひも乗つて殺突すれば清軍終に川の陰谷の洞門に軍を引入切所も支へ鳥銃を放

ち矢を飛し爰を全所と戦ふほどは明軍もたやすく進んで討事能はるも只陰谷を打圍み螺を鳴し鼓
 を打水も洩さじと責たりけるかゝる所へ撫順清河兩縣の軍民二万斗劉綎が陣も來りて中けるの
 我々の韃靼の賊軍も苦しめられ婦女を奪ひ財寶を失ひ困勞する事年久し今明の官軍賊兵を討
 て我輩を救ひ給ふよし承り余りの喜しさ國恩を報じ奉らん爲勢を揃へて参りいあわれ勢
 も加へられ賊卒の首を取て久しき怨みをいらさせ給へと聲々もやければ劉綎大さよよろこび國
 恩を忘れを加勢せるよし神妙なりと是を稱し其勢を二手も別ち一手の陰谷の攻口も向しめ一
 手の本陣も留め休足せしむ時其翌日曉の頃清の軍師貝勒王二十万の大軍を引率し附馬鐵を
 援んと此所へ押寄たり劉綎の兼で期したる事なれば少しも騒がむ劉招孫も七方餘人を與へ陰谷
 を責討しめ自ら八方餘人の官軍を率し賈庭柯といふ將を先鋒と成し西山の半腹も陣を取て清軍
 を支へたり貝勒王の此形勢を見て兵を山上も登らしめ官軍を眼下も見おろし味方の勢を顧て軍
 もいはや勝たると進めくと下知そればさらでだも勇もはやる胡國の兵卒何か暫しも猶豫へさ
 忽彈丸の坂を下るが如く數方の逞騎一同も動と喚て明の軍中へ切てかゝる其勢は洪水の卒も
 漲り細き堤を潰そが如し明勢防ぎ戦へんとするも便を失ひ四角八方へ散亂し討る、者數をしら
 せ劉の大も憤りきたさ者ありさまかな國の爲も忠を盡し死して君恩を報せよと高聲も呼ん

つて青龍の偃月刀を真向よさしかざし湖の如く押寄来る清軍の中へ面もふらず討て入縦横無盡
 斬廻れと清軍より放つ毒箭雨のごとく飛來つて更進み戦ふ事能はず心ならずも引かへし劉
 招孫と一手となり陣を固めて戦へんとその時先明の陣中へ入込し撫順清河の軍民二万余人
 卒然と喊を造り明兵を斬て殺倒す是則貝勒王が計略よて彼婚姻を以て懐け貢税を免して恵み
 置たる軍民清の爲よ忠を盡さんと貝勒王が計略を受て劉継才欺き兼てよ陣中へ入込しものこ
 此者とも斬立られ明の軍中上を下へと騒動し戦ふべき術を失ひ殺さる、者數をしらせ陰谷よ
 籠たる附馬鐵が軍兵貝勒王が援兵來り明軍散亂せると見てければその討て出て功名を露せよと
 數萬の軍兵喊を揚げ無二無三討てか、れば正面より貝勒王大軍を驅て余さじと攻立る中よ
 撫順清河の勢二万余八發り立て斬崩まほとよ明の官兵敢て戦へんとするものなく道を求めて敗
 走せるの霜風の落葉を舞よ似たりか、りければ大將劉綎も我討死の時と思ひ崩る、味方を
 余所よ見おし貝勒王を討て死んもの勇をふるふて敵を斬事數をまらせといへとも目よ余る三
 方の大軍其身金鐵よ非されば數ヶ所の疵を蒙り終に撫順の民よ討れば軍中よ命を落しけるの痛
 んしかりし次第の劉松孫賈庭柯の兩將も討死せりされば明の三十万と聞へし軍兵或の討れ或の
 落失今の六千余騎よ成りければ李如拍等敵對べき力なく手を空く引とりける

○鄭芝龍爲遼經略

去程よ萬曆皇帝の韃靼勢ひ強ふして兩度の軍官軍潰けるを患ひ給ひ李如拍が官を削り庶人と
 なし重て經略を撰み賊を討しめ給へんとて群臣を集め商議し給ふ御史楊漣進み出て奏しける
 の臣竊よ天下の材官を算へ見るよ當時閩の總都督鄭芝龍こそ武略文韜誠よ万人よ敵をべき英雄
 あり渠が家系を委しく尋るよ父の世々泉州安南縣の庫吏なるが太守蔡善繼が館と其家相並り鄭
 芝龍十歳の時戯れよ石を投て太守の額よ中公怒て芝龍を擒へて刑せんとす然るよ芝龍が妾の秀
 麗とうるわしきを見て笑ふて曰く是貴人の相あり殺すべからずと謂て則免す芝龍長人て其弟
 鄭芝虎とともよ海島よ入て顔振泉と云へる海賊よ風し盜をなす後南蠻よ行て火術を學び日本よ
 渡り劍術を鍛練よ盜魁顔振泉死するの後一人を擇んで魁とせんとす元來義理よ暗き群盜謙讓の
 心なく吾魁たらんとて争て止す是よよつて衆盜天よ祈米一斛を積て上よ一ツの劍を挿入めいめ
 い是よ向つて禮拜す劍の躍り動きて地よ落たもを天の授くる魁頭なる可と定衆盜皆是を拜する
 よ獨り鄭芝龍が再拜する時よ至て其劍忽躍り飛で地よ落此を以て鄭芝龍を尊んで夫が首徒と
 す已後閩の海上を縦横すれとも官兵り敢て捕る事能はず遂に巡撫使是を懷けて芝龍を閩の總兵遊
 擊とす芝龍よく海の情をしり閩浙の海賊等みお故き門下の輩なれば芝龍が旗を得ざれば往來

する事能はず賊船一艘は必ず三千金を納む連年の會計其幾万金と云事を知らず是を以て豪富國
 又敵し自ら泉州安平鎮は城を築き海を引て城内に入大船數百艘かわるく爰は泊る城中の兵卒
 は芝龍自ら餉を與へ官より曾て取らず其旗幟鮮明とあざやか又戈甲堅利とし強し海賊等芝龍
 が命を恐るゝ事鬼神の如し故は八明鄭氏一の族を以て長城とす芝龍原強勇にして義を重んず海
 陸の軍事は悉しく人呼んで飛紅將軍と云渠をめされ遼陽を鎮めしめ給ひ恐く其職を誤らじ萬
 曆皇帝大は喜び頗て鄭芝龍を召れける芝龍詔は應じ三千の兵を引て一万余里の行程を兩
 月ならせして都に到る帝則ち鄭芝龍を都御史と成し兵部侍郎を兼遼の經略となさしめ給ふ芝
 龍謹で奏して曰く抑征伐の其國を安くし其民を賑ふすを要とそ古へより匈奴寇をなまそ百
 戰の勝利を和を爲すの外は計略なし是歴代史臣の記を所よして臣が辭を待せして既は明白あり
 今鞏固のしめて國号を清と稱じ元を建る期はあつて明の官軍濟河撫順の地を急ぎ恢復せんと
 計とも得べからず是飢たる虎は狗を驅て戰ひしむるがとし人馬を潰そのみよして更は其功有べ
 からず唯遼の地を嚴に固め成り賊の倦るを俟て一戰に討崩せし帝是を善と聞せ給ひ尙方の
 劍を給て遼陽は向しめ給ふ芝龍重て奏ける内庫は貯へる銀四十万兩を臣は下し賜ふべし心折
 けたる貧民を賑さんと帝是をもゆるし給ふべしとて四十万兩の銀を芝龍に賜ふ芝龍爰はひて

數十万の官軍を引卒し不日は遼陽の鎮に至り賞罰をあらため正し野は壇を設けて死亡の靈を祭
 り軍民は四十万兩の銀を分ち與へ大水を引て濠を深くなし石を壘で垣を高くし嚴重は城を守れ
 ば遼の民はしめて生たる心地を成しぬ

○客氏得寵作亂

萬曆四十八年秋七月十四日帝俄は崩御し給ふ百官百司歎き悲しみ諡して顯皇帝とや廟を神宗と
 稱し奉る八月朔日皇太子位は即給ひ詔を下し民の貢税を免し仁惠を普く布き年號を泰昌と改
 元ある然るは今月中旬泰昌皇帝御初の御腦はつかせ給ひ日々聖容減へさせ給ひ同九月朔日乾
 清宮は崩じ給へり位は在事僅は三十日諡して貞皇帝とまふし廟を光宗と號し奉る同月六日皇太
 子即位し給ひ翌年正月年號を天啓と改元有天啓帝の御乳婦は客氏といへる婦あり帝の慈愛深く
 して登極の後奉聖夫人は封せられ寵威權勢の高き事皇后貴妃も及ぶべからず其齡四十余歳はし
 て姪欲甚しく密は太監王安が下司魏朝といへる者は姦通し其情頗精なり又爰は帝の御酒造
 り魏忠賢といふ者あり此者目は一丁の文字を識され其性黠慧大膽にして武藝を嗜み馬をよ
 く馳左右の手は弓を射る彼王安が下司魏朝と交り深く相互は背事なし此故は魏朝客氏は進めて
 魏忠賢を大膳房の官とせし帝朝夕の供御膳部を司しむ元來帝客氏が試み進むる御膳は有され

べきこしめされき是によつて魏忠賢日々刻々客氏が戚安宮へ出入して親しく馴睦びいつしか客氏が姪欲を誘ふて姦通し其寵愛魏朝も倍せり魏朝も忠賢が客氏も通下たるを知りて快からざといへとも其身王安も仕へて公事も間なかりければ拒み支ゆる時なし或夜乾清宮にて魏朝忠賢等しく出合相争ふて客氏を抱く其聲喧く外殿も達す是より客氏魏朝を厭ひ帝も譏奏して鳳陽の地へ流罪す忠賢密に毒を與へ是を殺せり此後忠賢専客氏が愛を蒙り忌み避る所なし客氏忠賢を寵する余り渠が武藝を帝の上覽も備へ終り内官の員も連り而諛を以寵を貪り威勢自ら剛くきりて國柄を執り至れりされば客氏が亂行いよく募り毎日忠賢ととも御殿へ出て帝の宴も列り夜更て宮人の屏風の陰にて密會も亦若干の美女を戚安宮へ召かへ王朝輔劉應坤李永貞石元雅除文輔さんといへる無頼の若者を集め酒宴をなして戯れ遊女も彼若者等醉り乗下りて美女を姪それと客氏忠賢更も答る事なく却て是を與とせりは何の爲といふ事をしらす其姦姦を行ふに至りて漢の呂后唐の則天も勝る裕妃といへる官女あり帝の寵を得て懷孕せり客氏はを惡み宮牆に押籠飲食を斷成妃といふ宮女是を哀み磚石の縫も食物を藏し置て裕妃が命を保しむ斯して數日を経る程も咽濁り苦しみの餘り匍匐して簾の雷を飲み終り餓死も客氏又成妃が食をかくして裕妃も與へたるを怒り是を裕妃と同一く餓死せしむ其外帝の御胤を懷妊したる宮女あれば或の毒を飲しめて胎を墮し或の老婆も按摩させてこれを潰し客氏が爲も命を失ひ辱めを蒙る者枚擧するも不遑かゝる惡逆日々甚だしけれと帝のかやらの事をほ心ともなし給らず唯常も番匠の工みを好給ひ自ら斧鋸鑿などを以て工作をなし給ふ其精も事番般も及ぶ事かたし營造心もかあふ時ハ飲食を忘れ又久しからずして棄て新造り替更も倦給ふ事なし朝廷かくの如く亂れぬれば賢臣も退き佞臣も諛り仕へ兎も角も國運の傾く所なるらんとて、る有もののみな眉をひそめける

○貝勒王定計 陷瀋陽

御史顧慥奏してやけるハ鄭芝龍關を出て遼も趣きすで一年も及べども堅く守て敢て戦を催も事なし斯の如くありてハ何の日か賊軍を追退け遼の地を復し得んやそみやかハ鄭芝龍をめしかへし別も人を擧んで經略を成し給へとやす天啓帝是も惑され給ひ袁應泰といふ者を遼の經略と定め兵科朱童蒙を副て遼も行なめ芝龍が功罪を改めしめ給ふ是もよつて鄭芝龍ハ帝都も歸り舊官も着て二月斗り北京の地も止りける然も遼も行たる朱童蒙歸京して朝廷へ奏しけるハ鄭芝龍ハ賊もいよしへの霍去病も勝りたる英才もて任も趣き纔も一年遼東の地も甚富り崩れたる城壘を悉く修復し柔弱の民を變下りて手快き精兵と化もまかのみならず開原瀋陽の空城今ハ兵

糧足り軍器を籠此後の大將是よりて進退せし難を防ぐ事安かるべし皆是芝龍が大功なり遼の
 官民みづから野哭を市に啼て芝龍が恩を慕ふ民樂み土地富て敵を破る者いよいよしへよりい
 まだわらむ朝廷の文官事を詳よせし狼り奏して國家の大事を誤れり再び鄭芝龍を捲川ひ其
 功を全からし給へどを奏しける帝是を聞し召れ急ぎ鄭芝龍をめてして重て遼の經略たるべきよし
 詔ありけれ鄭芝龍再拜して命を領しぬ去程よ袁應泰の遼の經略として彼地より到りてより鄭芝
 龍が軍令の嚴しきを改め民を安んじ懐けんとして狼りは法度を寛めけるよ忽ち士卒相争ひ遼民の
 粟を刈とり婦女を掠めて奸淫し遼東大に亂れける然るは鞏州國の軍民三千斗降參の旗を立て
 遼陽城より來り謹んで中けるは近年鞏州の太子の幼少にして叔父攝政王國柄を肆よなし頻に中
 國を討て數年の軍川よ人民の困窮既よ迫り今の朝夕の烟も絶々よ成りては遼の地新に經略來り
 給ひ民を惠み仁政を行ふ給ふよしを承りては子の慈母を慕ふ思ひをなし降參して俘と成れり
 伏て願ひくは將軍哀憐を垂降をゆるし給ふよおびては死を盡して忠を致さんと誠しやかよ中
 けれは袁應泰智慮淺き大將なれば大よよるこびその勢を瀋陽城より送り加世賢よ從かひしむ是元
 來貝勒王が謀計よて鄭芝龍が退きたる隙よ乘じ遼陽を奪ひ取ん計略ありされは降參の鞏州人
 より貝勒王が方へ屢々内通して袁應泰が軍令嚴密ならず士卒皆怠り荒み瀋陽を守る兵僅よ五六

万よの過へからず且又科將黃龍瑞といふ者を密に語ひ返斬致さべき約を定め置けいへば早々大
 軍を以て瀋陽城を攻給へかしと告けれは貝勒王雀躍し、大よ喜び猶も黃龍瑞が志しを固く
 せんとして其女を太子の台妃よ備へ黃龍瑞を外戚と仰ぐよしの内書と遣へし去らば軍を出せし
 として烏金王を大將軍とし薩勒王安六人を兩先鋒となし其勢軍十五万余騎清河城を進發し瀋陽の
 北西河といふ所迄押よせたり瀋陽の守將加世賢大に驚き科將黃龍瑞をして北門を守しめ北固山
 よ勢を分ち晝夜を論せし狼煙を揚げ其煙霧々よ高く環繞直よ銀漢に到りぬらんと夥し遼陽の袁
 應泰遙よ是を臨み見てすは賊兵瀋陽よ襲來るを救ずんば叶ふまじと馬達牛維隆兩人を先手よ
 進せし自中軍を守つて其勢十餘万人瀋陽として揉よもんで急ぎける去程よ清の大將軍烏金王大
 軍を驅て大よみす、み攻鼓を鳴し閫を發し瀋陽城を鏃々よ取圍めば城中より明の大將軍周敦吉と
 名乗數千の選兵を引率し門を開ひて一もんと切て出たり寄手の軍中より金虎山といふ猛將鎗
 を捻つて向へ戦ひ周敦吉と二十餘合浴り合しが敦吉を馬より下よ突落し堀際近く攻寄たり秦邦
 屏といふ明將是をみて大に怒り蛇矛を打ふり金虎山よ討てかゝる金虎山暫もためらふ氣色なく
 赤兎馬よ鎧を合せ電光のひらめく如く秦邦屏が甲の透間を聲をかけて唯一突よ衝通せば馬より
 落て死たりける清の大將軍烏金王遙よ此形勢を見てけれは味方を下知して動と喚て斬立れば城

兵さんぐは討ちされ城中へ引入城戸を固めて矢石を飛し愛を詮とぞ防ぎける此時袁應泰が十
 万余騎の援兵雲霞の如く押來り清軍の後よりまつしぐらふ討てか、れは城兵加世賢大よ力を得
 同時に城門押ひらき討て出て清軍を前後より挟み勇をふるつて戦ふたり清の大將安大人大軍を
 二手より引合 自袁應泰が先手の勢も面もふらむ切てか、り喚き叫で惡戦すれと前後の敵は陣法
 亂れ既も敗形を顯しける此時瀋陽の城中俄も火燃出北門を固めたる黃龍 瑞龍 瑞龍 瑞龍の降兵三千余
 騎を引率し加世賢が後より兩の如く矢を射かけ無二無三も突立れば思ひよらざる事なれば明兵
 肝を冷し魂を失ひ四角八方も散亂せるを清の軍兵得たりかしてしと勢ひも乘て踏潰すも明兵討
 る、者其數を知らず安大人の雪より白き馬をおとらせ八十斤の大戟を真向よかざし援兵の先手
 の將馬達牛維繼兩人を忽斬て落しよ、進んで確立れば袁應泰さんぐは討ちけ遼陽さして
 敗走すれば明の軍瓦の如く崩れ加世賢も亂軍の中も討死し其餘の諸將或は討れ又は落行さしも
 鄭芝龍か心を川ひし瀋陽の堅城も忽一片の烟りと成り清軍の手も陥ける口惜かりし次第なり
 ○黃龍 瑞龍 妻死レ義
 清の大將軍烏金王の一戰も瀋陽城を陥し城も入て民を安んじ軍士の功を賞しける且明の裨將黃
 龍瑞が返忠より一時も勝利を得たりとて攝政王よまふして紅蟒衣を賜りける黃龍瑞大よよる

こび今度の軍功も傲る事 甚しく常よかの蟒衣を着し瀋陽 城外を徘徊して世の人を奴僕のご
 く輕ん卜ければ人みな惡みて黃衣將軍と呼で嘲りぬ黃龍 瑞の北京より其妻と娘を招きよ々誇
 語りてやけるの先も清の軍帥貝勒王我も千金を送り反忠せん事を計る且我むすめを以て太子の
 后妃たらしめん事を約す是よよつて 志を定め既も清朝も歸伏せり順て清帝明朝を亡し天下一
 統し給へん時の我正も外戚たり豈悦ばしからむやといひけるよ其妻林氏大さ怒り御身の利の
 爲も國を賣の寇賊あり我何を賊臣の妻と成べきや女も又明朝の粟を喰つて人と成れり履き鞋鞭
 の妻と成をべけんやと涙流る、と雨の如く娘を取て引よせ一刀も刺殺し其身も臥て死たり
 けるのいさぎよき最期にけり遼の民此事を聞て大さ怒り此黃衣の賊殺させんば快からむと忽
 二百人計群 來り黃龍 瑞をぞだ、斬て捨たりし眼前國恩を忘れ後失射たる報なるらん
 と淺猿かりしありさまなり是時明の朝廷よ客氏魏忠賢専ら國柄を掌り據り詔と矯り功有
 とも罰し罪有とも擧用ひ 恣に暴虐を行ふ忠賢を助る佞人數多ありて其輩三部の牒書を編り其
 一は朝廷上下の官人の姓名を悉く記し己は從ふ者も朱圈を加へて以て官を奪め、め祿を増し己
 よ忤者よ墨の圈を加へて以て官を剝奪を削る此牒を号て點將錄といふ其從者斗を録を牒
 あり其中も親しき朱を以て圈し疎き墨を以て圈を是を号て同志錄と云又己は從者も朱を以て

撰み載て急よ罰をべきに朱圍し緩く罰すべきに墨圍す是を天監錄と號て此三部の牒面を復姦人等集り評定して賞罰を行ふ程は上下の官々恐れおのゝき我先よ詔り諷ひ忠賢か心よ入ん事を願ひけるされば天啓帝の有てもなきが如く朝廷の政事悉く客氏魏忠賢よ決して其權柄月々増り日々盛ん也天啓四年の春魏忠賢己が領知せる涿州の天壽山よ先祖の祭りをなさんどて客氏を伴ひ出立たる期は先だつ事十余日より道路を淨め廐を立て村邑の百姓戸々は花を秋み柳をかざり男女老少香を焚て道よ跪き謹で迎へ拜を冠蓋のひらめく電の如く車馬の轟の雷も似たり客氏忠賢駟馬の車よ乗り數百の官々悉く四人輪よ乗じ左右前後を押圍道路の庶民よ銀錢を與へ所々の縣令よの金帛を與ふ賢よ富貴榮耀天子よ等しく古の豪華董卓石崇といへども是よいなどか及ぶべきと見る人間人眉をひそめ愕きけりかくの如き暴虐國政よ災ひをれども帝の知し召さむ有けん更に制し給ふ事なく朝夕酒色よ荒み忠良の臣を喪ひ國の當滅ん事を悟り給ひざるこそ淺ましかりし世の季あり

○鄭芝龍 盛三 清軍於仙杉谷

天啓五年の春濟陽の城陷 袁應泰七万余の軍兵を失ひけるよし北京の都よ聞へければ天啓帝大に驚き給ひ群臣と評議有て再び鄭芝龍を選の經略よなし十余万人の官兵を賜ふ鄭芝龍謹で命



奇童免難
終揚英名

を領し急ぎ軍兵を引率し遼陽鎮に到りみるは瀋陽の地悉く鞏兵の巢穴と成り百姓胡の衣服と
變じ頭を刺て了は結り先見たりしありさま異なるを見て涙を流し吾中國へ太古より聖賢
更に出給ひ代々禮義の國ありしをかく卒は胡士と成りぬるは天命の然らしむる所ならんと歎息
して止ざりしが味方の將士を顧みてやける我を再經略として此地に來り一度鞏鞭を討て軍威を
示すんは軍中の令行はれまは敵の軍帥且勤王へ孫吳が兵法は達し能衆の心を得たり是を討んよ
の奇謀は非んは川まで南蠻國の火攻地雷の術を以て戰んはいかよといふ諸將皆然るべしと同じ
ければ鄭芝龍懸て六千斗の火器を制し鎮江の大河を渡り仙杉谷の南芒草錯亂たる坂の間は地
を穿ちて地雷を埋み火薬を伏ると十五六里既は時十月の半嶺雲四方は興り落葉錦を剪折ふし鄭
芝龍十五万の大軍を驅て張明鶴と劉松を左右の先鋒となし鎮江の鞏營を十重廿重は取圍み火箭
を射かけ火炮を放ち喚き叫で責たりける此營を守りたる清の大將善金王といふ者虎皮の鎧豹皮
の兜長柄斧を打ふり門を開き大軍を引て討て出張明鶴と馬を交へ相戦ふ事二十余合張明鶴激す
る事能はる馬を返して北走れば清軍大は関を作り數十万の軍兵隊を亂し金鼓を鳴し息をも繼
ぎ追たりければ鄭芝龍が軍勢敢てかへし合を兵一人もなく戦を捨て楯を倒しさんぐもなつて
北たりける善金王は彌勇み味方を下知し頻は追討仙杉谷の中道に至る此時日光西は沈み月陰

驟騰たり 忽一聲の鳥銃谷間響く程こそあれ彼方の嶺上は五方形の大旗さつと風靡せ鄭芝
 龍數万の軍兵を引て向ひ來る吾金王此体を見て南無三寶の軍略は陥たるを引よくと下知
 るる所は忽天地も震動する斗鳴響き飛天噴筒の大火炮を放ち火珠亂れ飛で雨の澆々如く木の
 葉枯草は火燃付このいかよと清軍色を失ふ程は俄にして大地裂破れ千百の地雷火一同に迸り出
 けるの山鳴谷應へ天地も是滅しぬるかと思ふに方こそなかりけり去れば清の大軍
 或は中天に打上られ或は五體裂々砕け飛二十万の兵卒悉く命を落し大將吾金王も數十丈高
 き松が枝に屍を留め深き谷廣く流れ死人の爲に埋れけるに無慙なりし有さまに鄭芝龍の十分の
 勝利を得鎮江城は張鳴鶴を止て是を守らせ勝軍をおさめて遼陽鎮へ歸陣しける

○王化 貞敗三級黃寧

清の攝政王此時瀋陽の城に有て先將吾金王敵の計略は陥り二十余万の軍兵と共に仙杉谷に亡び
 けるよし聞大に驚き軍師貝勤王をめて軍の評議せられけるに貝勤王謹んでやけるに鄭芝龍の
 孫吳が兵術は達し能十民の心を得たり等閑の敵はあらむ情敵の防禦を窺ひ見るに廣寧の城のみ
 其守兵多からず僅に二万人に過べからず此所いまだ新兵を添ざる先は軍を以て貴破らば鄭
 芝陽が一臂を損せべし攝政王是に従ひ李永芳安大人を兩先鋒とし貝勤王自ら二十余万の大軍を

引率し廣寧府へ押寄鐵桶の如く城を圍み息をも繼せま攻たりける此廣寧城は先は劉保といふ
 大將守居けるが叛逆を起し謀露顯して順撫使王化貞が爲に殺され張鳴鶴が鎮江に有しをめし
 て此所を守らせける然も清の大軍俄に押寄せ四方より攻立ければ張鳴鶴遼陽の鄭芝龍に援兵
 を需る事甚急是よつて鄭芝龍自ら十萬騎を引て右屯口より進み王化貞も同く十萬余人を
 率し間道より黃寧に急ぎける扱も黃寧城の寄手清の大軍雲霞の如く八面より取圍み喚き叫
 んで責上れば城兵も必死と覺悟し石を飛し矢を放ち命をかぎり戦へとも十倍の大敵防ぎかねて
 見へたりけり此時王化貞援兵十萬余人黃寧の河端に着て河を渡さんとそれとも清の大將安大人
 十萬余騎を引分ち矢を射る事雨の如し王化貞が軍勢敢て河を越事能はず矢軍は時刻を移しぬ黃
 寧城は寄手の大將李永芳味方を下知し敵の援兵後を追れり唯一揉み乗入やと自ら眞先馬を
 出せば物軍我劣しと渾際に進みより楯を衝鎗を傾けろひく聲して登る程は関の聲天よふるひ
 矢叫びの音山に響き今や此城粉も成らんと見る程は城中の百姓俄に心を變じ忽ち矢倉く火
 をかけ降参くと呼びつて城戸を開ひて逃出れば城の大將張鳴鶴今に是迄と思ひければ鐵
 龍の盔は虎皮の戰袍を着し青馬を躍せ西門を斬て出近寄よせ手二十騎斗算を亂して切捨たり
 張鳴鶴が旗下の將は羅一貫といふ強勇の者あり此形勢を見て何かの誓も猶豫べき白銀の花兜蓋

又緋の戰袍を被掛栗毛の馬に打乗り方天戟を打ふり鳴鶴を討せしと群る寄手の其中へまつし
 くらゝ斬入て敵を討事敷を知らず三度大軍を斬靡け生死を思戦せしが其身金石にあらざ
 れば毒箭數多身射させ今ハ精力盡たれば渾の中ハ身を投じ終ハ命を落しける此間ハ寄手の軍
 兵斧を以て石垣を倒し雲梯を以て登入程ハ終ハ清軍城中ハ充滿しハ本城も火をかけて焚立
 れハ張鳴鶴も馬上ながら自ら首を刎て死たりける明の援兵王化貞ハ黃寧城の火を見るより南
 無三寶ハ城ハ落たるとおぼゆるぞ只斬入て討死せよと大音ハ呼りて河中へ馬を打入れハ清
 の軍師貝勤王黄金の鳳盔をいたゞき綵金絲の鎧を着大宛の驪駒ハ騰白羽扇を以て一度招げハ
 河の上下より數十万の大軍群がり出功人早く降参せよと聲々ハ呼り招降旗とて降参を入る、
 大旗數百流れ川風ハ飄し王化貞が軍勢を川中へ取り込め鉄炮を放ち矢を飛ばし面も向べきやうぞ
 なさ此形勢を見て明の軍中恐れおのゝき王化貞が先鋒の大將孫得功といふ者心變し一番ハ降参
 し頭を刺て清ハ屬も是ハ依て我もと髪を切降参を乞ふ者六万余人適怒憤して戰ハんとする者
 も清の大將安大人丈八の蛇矛をふり恰も秋風の草を倒すが如く散花微塵ハ斬殺せば王化貞心ハ
 猛しといへども戰ふべき便を失ひ纒ハ兵を引て遼陽さして敗走も然るハ鄭芝龍ハ右屯口より揉
 まるんで押來るハ早黃寧の地陥り順撫王化貞さんさん成て北來るハ行台今ハ軍をそめ戰ふ

とも益有まじ遼陽ハ退と計略を定めて此恨をのらすべきとて王化貞ハ伴ハ軍をかへして遼陽城
 へ歸りけるかゝる敗軍の有ん事を鄭芝龍かねて計り知りければ先ハ遼東ハ着陣せし時王化貞ハ
 談トて黃寧登萊三津等の要害ハ守の兵少してハ防ぐべからずと議すれども王化貞さらハ是ハ同
 心せず唯兵を進めて戰ハんとのみハやりけるハ鄭芝龍もすべきやうなく終ハ今日の敗績を引出
 しぬるハ則王化貞が罪にぞありける

○鄭芝龍坐レ事下レ獄

去程ハ北京の朝廷ハハ廣寧府城敵の爲ハ陥り王化貞十萬の勢を失ひ鄭芝龍ハ是を救ふ事能ハ
 迹の諸將或ハ戰死し或ハ清ハ降り遼東の地大ハ潰へたりと風聞しければ天啓帝群臣を集め評
 議なし給ふハ例の魏忠賢が徒進み出で鄭芝龍王化貞兩人どハ其罪死ハ當れり早く都メめしか
 へし刑を加へて後の見をらしとなし給へと奏聞す時ハ御史楊漣奏して曰夫合戰ハ一旦の勝敗を
 以て始終の贏輸をハかるべからず古ハ漢楚ハ戰ハハ項羽五十余度の戰ハハ勝利ありといへども
 烏江の一戰ハ打負天下終ハ漢ハ歸ル鄭芝龍ハ當世の英雄王化貞とハ輩と日を同ハし論すべ
 らな時ハ魏忠賢席を打て中けるハ御史の詞大ハ違へハ鄭芝龍百方の軍を率計略有て黃寧の敗
 績を余所ハ見なし王化貞が十萬の軍兵を捨殺したるハ何事ぞや若鄭芝龍も同ハ兵を進め先ハ鎮

江よて清軍を破りしとく粉骨して防ぎ戦へ、今日の敗軍何を是有んや然れば其罪王化貞よりも
 猶重し、やく獄を下して軍令を糺し給へと奏す帝是を然りとして終に勅を下して兩人を都召
 かへされ厳しく禁獄せられける、いせひもなきありさまに鄭芝龍、王化貞と俱に獄舎に入長歎し
 てやける、明の寶祚將傾き我功いまだあらざるに獄に繋る是則天命也、古人周の文王殷の紂
 王は羔里に拘れ周易を演聖旨を万世に傳へ給ふ吾文王の聖もあらずといへとも自一二の兵法を
 知り西洋西蠻の火攻を熟す今吾誅も着べ此法長く絶果なん末世將略の爲一書を著し弟鄭鴻達
 鄭芝豹を傳へ護國の要と成すべしとて自ら指を嚙筆を滴て十卷一帙の編をなし題して經國雄略
 と号く獄吏周欣といふ者一度是を讀で慨然として涙を墮し是古今の平法胡虜を防ぐの要精密な
 る事霍去病再び生るとも是より過べからずいかよもして芝龍が刑を免しなべ則ち國家の幸な
 りと竊み心の内は籠て其弟周吉といふ者は議る周吉暫く首を俛思惟しけるが忽手を拍てや
 ける、天啓帝曾て白鶴山の張冠道人を徵れ房中の術を需め給ふ道人海狗腎丸を製して是を奉る
 帝此薬を用ひ給ひて後椒房雲雨陽痿の患あく一雪も數十婦を御し給ふ然るは道士白鶴山を去其
 行所を知らず今正に其仙藥盡さんとも典藥醫官海狗腎丸の号よよつて本草を考へ見るは海狗と
 其臘肭獸なる事を知りていまだ其狀をしらず帝専ら此薬を索め給ふ鄭芝龍は海南泉州の人

よして海中魚物の事よ悉しと聞り若其臘肭獸の狀を知る者ならは吾よく醫官よ寄て罪を購ひ命
 を救ふべし周欣大さよ喜び急ぎ獄舎に至り鄭芝龍よ斯と告ぐ鄭芝龍聞て莞爾と笑ひ吾よく海狗
 の性を知れり然れども我又何を命を惜み死を恐れんや只望らくは此書を泉州に贈り家弟に傳へ
 給へらば芝龍永く死せざるが如しといひて活命の心なし周欣彌心よ感じ大醫興卿よ逢てしか
 くと物語りを興卿是を聞て大に悦こび自ら獄舎に至り鄭芝龍よ對面して其委細を尊問芝龍の
 曰く海狗と臘肭獸の別名よして醫家の論ざる所と其狀異なり其臍をつらねて外臂を收む以て
 脾胃虚勞の良薬とす名けて臘肭臍といふ某し少かりし時作業を事とせず東の方蝦夷の境に船を
 浮かめ或は日本よ泊りて松前の海上を遊行し彼國人と馴睦此時蝦夷彼臘肭獸を獵を見るは魚よ
 非ぞ獸よ非ぞ頭は狗のごとく身の長き事二尺余り鱗も蒼黒き毛生て鳥の翼の如く尾の長さ五寸
 計牡魚尤淫淫深く牝魚十五六頭を帯て海上よ浮む蝦夷半弓を引て是を射殺し外臂を截て陰乾よ
 し日本國へ賃とせ蝦夷常よ此物を食ふよよりて一夫二十妻を娶事今以じかり若海狗腎を獲んと
 欲せば日本國へ使を遣し需給はん事然るべしと答へける興卿聽て此旨を帝よ奏聞したりけれ
 ば帝大さよよろこび感有て鄭芝龍が罪を免し泉州の舊職よ復し給ひ猶日本よ渡海して臘肭臍
 を需め來るべしよし命し給へば鄭芝龍の思ひ設けざる命を助り剩舊官よ復し給ふと莫大の

君恩なりと頓首して恩を謝しその日の朝を去るぞさけり

○鄭芝龍航海之日本

天啓帝色も荒み姪も溺れ給ふの餘り鄭芝龍が海狗腎の産を知りたるよし聞し召れ殆ど龍顔うる
のしく重て詔を給ひ鄭芝龍を日本へ渡海せしめ彼服膺を求めしめ給ふ鄭芝龍謹んで勅答しけ
るの抑日本は海國なりといへども神王國を開きて三千余年王統連綿と續き更も繁遊の臣なし其
義を守り信を堅する事かくの如しされば恨を忘れざる事も又々深し前朝のはじめ日本霸王關白
豊臣秀吉朝鮮を犯す時中國より官使渡海せし誥命の文の誇たるを怒て關白秀吉終に封を受す
和親の事破れたり然るも今日本へ使せば國王疑ふて搦へて本國へ歸をまじ不如臣をして閩海
の買船を交へ乘しめ何となき有さまて日本は浪海せば久しからせして彼服膺を求め得て
歸朝致すべきと奏しければ帝鄭芝龍が中所需く腹慮も叶ひ則銀三万兩絹帛數多下し賜り買
船も便船して日本へこそ渡されける鄭芝龍の泉州安平縣の本城は歸り弟芝豹鴻遠も事の次第を
物語り頼て廈門といふ所より艦を解き順風も帆を揚て日本國へと漕出しぬ頃ハ秋七月廿日余
り冷風浪を起し時ならぬ雪かとぞわやしまれぬ蓮華洋といふ大海に至りけるが俄も雲の脚早く
なり嵐すさましく吹來り山の如き逆浪船を覆へさんとす水主楫取色を失ひ櫓を下さんと罵り

あふ時は今迄有しとも覺へざる一ツの島忽然と現れ出たり水主等大は悦び此島も船をよせて逆
風を避んとて鄭芝龍の樓櫓に登り先より此浮島を臨み居しが大音も呼びけるのあれ見ゆる島
こそ眞の島もあらぬ是則ち海の獸なり其形ち角として方十里も余れり背の上より有ゆる海藻
牡蠣を生し島と見て近寄船の此獸の餌となれり海賊の徒海魔と唱へて恐るゝ此者今其驗
を見すべしとして例の南蠻傳來の大石砲を一連三四挺彼島へ放ちけるも其聲霹靂と震あひやと
人々見る程と件の大島忽かたふき一搖ゆつて海中へ引入たり扱も海底まで吼る聲夥數千百
の鐘を並べ突も異あらす相船の衆人大きも恐れあな不怪の海獸やと身の毛を立て振ひけるか
かる危き海洋を過ぎて普陀山といへる孤島も船を寄たり爰まで順風を待べしとして岸より潮音
洞ていふ岸洞も登りぬ此所も僅に寺院を設け觀音菩薩を安置せり鄭芝龍是も詣拜をかし寺僧を
呼て開基を問ふも答て曰く昔日日本の僧慧夢ある人入宋して觀音の靈像を携へ日本も歸らんと
ま此洋中を過るも及んで其船盤石の如く居りて動かも慧夢即觀音の尊像を船より下し此洞も
移し奉れば不思議なる哉其船何の恙もなく風も順も廻轉せり是も依て慧夢此洞中も一字を創
草し觀世音菩薩を安せり其後國朝萬曆三十五年勅額を賜りて永樂寺と名づく則ち御製の序銘
是も有とて取出して拜見せしむ鄭芝龍謹んで拜覽し數日此寺院も滯留す然れども逆風猶止され

其徒然を忘れんとて寺僧を伴ひ鳥中を巡り遊ぶは怪巖高く聳へ異樹奇石更生繁り見も知ぬ鳥どもの嘯飛ぶ有さや眞は洋中の絶景言葉も盡しがたし此島の東北の際に梵音洞といへるあり菩薩爰に應現し給ふ所として紫竹松樹いよやかに生て更は一時の風色騷人の腸を斷鄭芝龍筆を採て一律を詠す其辭は曰

梵音深莫測

古洞佛憑依

寇拜衝崖立

龍朝拔浪飛

紫松園作宇

紫竹護成扉

紆經花迎日

香蒸上客衣

かくて又旬日を留りける風漸々定れ蓮華洋を出船し日本寛永二年乙丑九月五日肥前の長崎に着船し崇福寺の唐僧逸然に白銀を多く寄附し名を一貫と改め其地の醫師熊谷某と兄弟の義を結び此長崎に居を占て明季の亂を避たりしかしこき計ごととなり後丸山の遊君を購ひ出して妻となし一人の男子を儲く名を鄭森と呼べり國姓爺成功則是之此頃明の福州より賈船數多日本へ浪海し長崎の津に明人充々たれば兎角の問答もむつかしとて同國平戸に妻の縁あれは夫を便し平戸に移り南蠻流の外醫を業とし世を安んじて暮しける

○吳縣人民死義

天啓六年春二月廿八日北京の都に日は光りなく傍は又一ツの黒き日あり人民怪しみ望み見る事限りなし其夜空中は數萬の聲して鬨を作り軍馬の馳來る聲頻りしかる天災の屢起る事天子不徳は依臣政を亂り大亂の兆として萬民眉をひよめ安き心へ更はなし帝は是を顧み給はず官房の御遊に國政を忘れ果給ひ只何事も魏忠賢一人に任せられぬれば忠賢彌權を恣にし魏廣微霍呈秀なんぞいへる佞惡の小人と心を合せ忠臣を阻隔、邪正を言亂し朝廷の政事の手裏をかへを如くして是非黑白を定ま是は依て上疏して忠賢が佞惡を言者悉く獄に下し刑に及ぶ者其數を知るべからず爰は吳縣の周順昌といふ縣令あり意仁を以て民を撫士に交る節氣あり故に庶民徳を懷き骨肉の親甚切之此周順昌が正直なるを魏忠賢が徒大に惡み詔と偽り官軍數十人を吳縣に遣し周順昌を捕へしむ順昌が交士に陳文瑞といふ者あり早く此事を聞出し夜中順昌が館に來りしかくの甲物語りいまだ官軍の來らざる間は何國へも遁れ行罪なき死を免れいへと告る順昌寂然と色も變ず子が厚意黃泉に至る共忘れぬト然といへとも天子命して我を召さるゝよいかでか私に逃走べきたとへ遁れ去たり共やのか其儘に捨置れんや人各天命あり人力を以て生活を自在をべけんやと更は愕く形勢なし時よの縛騎の役人順昌が館を取圍み毛一鷲といふ者詔命と讀て順昌を催す順昌謹で命を承り坐を立て都に趣かんとせし

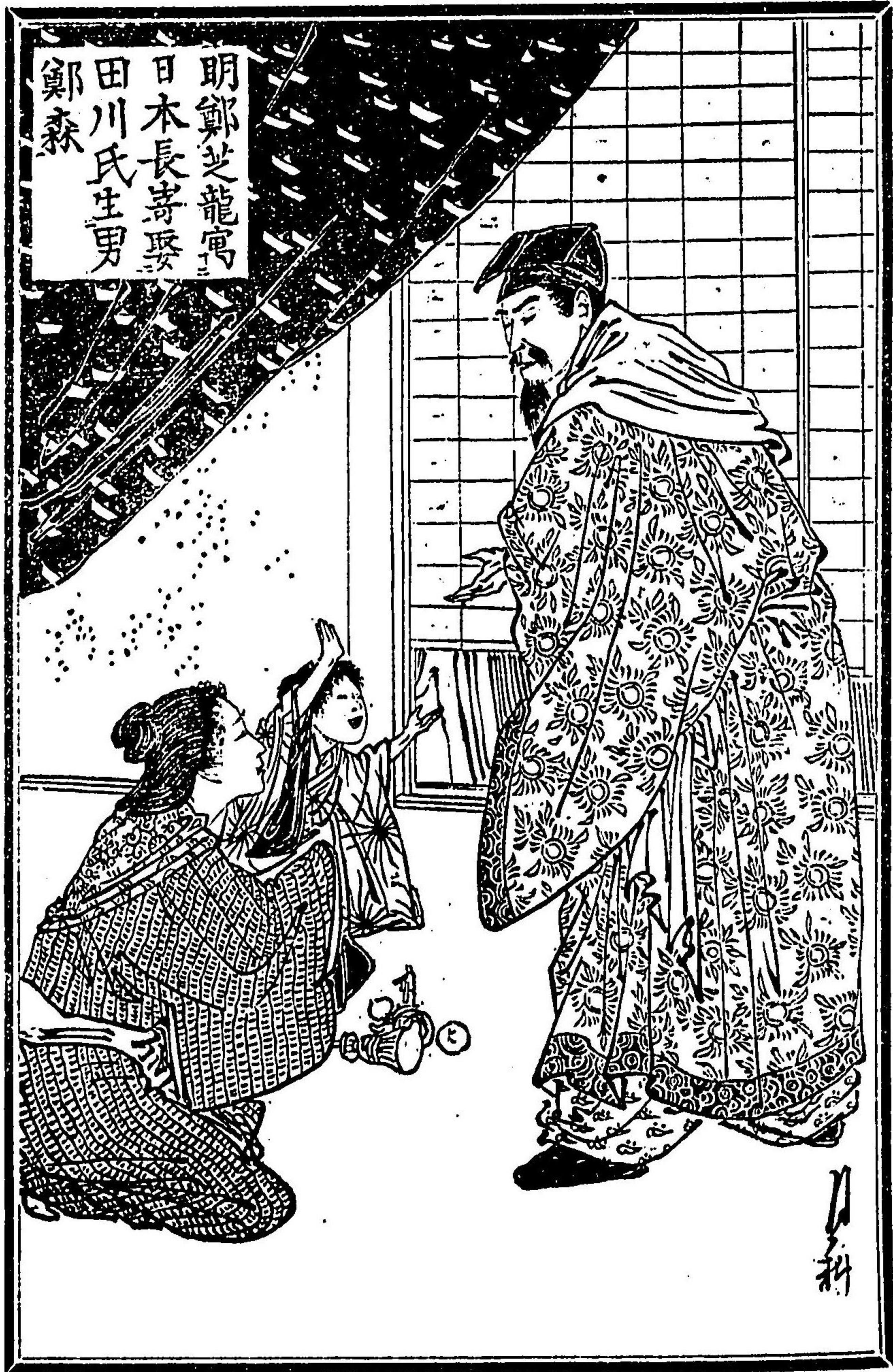
が案の上は白き榜あるを看てやけるの龍樹巷の僧此榜を待來て吾も書を乞ふ我既に許諾せり
 今篋は書置べしとて筆を取て大字を書す墨痕常よりも強健なり筆を抛門を出れば吳縣の百姓群
 來り別れを悲しみ罪なきの死を歎く官軍等は亦拂ひ除引て吏廟の内へ入る茲は吳縣の賈人の
 子も顔佩章といふ者あり力強く角力を好任俠を以て人を知る此度周順昌が罪無して獄下
 るを聞大は怒同志の朋友周文元といふ與夫楊念如と云醫衣家の少年を先とし牙僧する沈揚士民
 の馬傑さんとを集めてやけるの魏忠賢取事を亂し罪なき忠臣を害せる事數をもち今周順昌も
 不實も罪せられて獄下りれ我元來順昌と親からずといへとも斯る事も臨で知らず顔も有な
 んも男兒の氣像は有ざるべしとや身を捨て順昌を救ひ我々が俠氣を人としめよべし若叶の
 んば死を俱として志を露さんといかよといふ各皆尤也と是も同ト此五人の者柏子木を打て
 街を廻り村々の人民を廣野へ集め大なる香爐を大地に置き顔佩章諸人に向ひやや吳縣の令
 罪あくて獄下りれ我々五人志を同らして周順昌が一命を救へんとす爾等義もす、み信を守
 り我輩を助んと思ふ者の天も遂て義を結ぶべしとて自香を捨て盟を成す是を用て吳縣の人民
 年來順昌が徳に懷きぬれ皆悦んで同心し我劣しと香を焚薪々薪をなしたりける顔佩章大は悦
 び其人數を算へ見るよ一萬人に余りけるさらば使廟も參るべしとて五八の魁首兵先も進み都よ

りの臺使毛一驚と徐吉が前も跪き順昌無實の罪も陥り究て是死罰も所せられなん某等數人
 の命を以て順昌一人を免し給いらば何のよるこびかこれと如んとて涙を流し訴へければ首四人
 の者をいじめとし一萬余人の百姓啼哭して順昌が命を乞ふ其聲洋々と城隅に溢れける官軍等
 大ももてあつかひ首分の者を招きやけるの汝等が訴へ甚理も當らず我輩周順昌を捕へて
 都も引も私のも事わらも魏忠賢の命に給ふ所之然るを汝等が愁訴せるを以て赦し離たば我輩
 又重き罪科を蒙るべし詮なき事も勞せんより速に立去へしと云聞せけるも多くの百姓聲々も今
 迄の天子の詔して捕へさせ給ふらんと恐れたりしが扱の魏忠賢といふ佞人が我意も任せて捕
 へけるこそ奇怪なれ其儀なら官ハを打殺し順昌を奪ひ取れとて一同もつと鬨を上げ駕夫
 の周文元醫衣家の楊念如等兵先も大手をひらげ當るを幸投倒せば官軍大さく色を失ひ戦を並べ
 て防ぎ戦へば生死知らぬの百姓ばら喚り叫んで群り來り彼長戦刀を奪ひ取さんくも斬立れば
 臺使毛一驚徐吉の兩官大も驚き此牀もては終は順昌を奪取るべしとて自ら下知して順昌を馬
 も打乗せ問道より都の方へ息をもつがを駈たりけるさても顔佩章等の數多の百姓もるとも官
 軍を四角八方へ追散し塵の中を普く扱し求め共順昌の曾て見へを爰に至て衆人大きく力を落
 しいかゝのせんと議しけるも周文元進み出てやけるの我々順昌を奪ひ得むといへともかくのを

とく官軍を斬害せる上の日わらきてして都より討手の軍兵向ひ來るべしあわれ大軍を引うけ花々
 敷合戦を成し快く討死せん何の子細か有べきと躍上つて下けるを顔佩章押しづめ足下の詞も
 いさぎよしといへども今のいかは狂ふとも順昌が命の救ひがたし然を我々が死を快くせんと
 て多くの百姓を殺しなん不仁の甚しきふるまひ之川詮我一人都より今度の罪を身引うけ
 順昌と共に獄に死すべし爾等百姓心を安じ業を勤むべしといともまじしくやしけるは四人の
 首魁銘々義勇み死を輕んじ某等ひとしく此黨の大將として何ぞ足下一人を殺し安閑と詠め
 居ん魁五人件は死して百姓等を助くべしといふ是よりつて顔佩章も大に喜び百姓よとまごひ
 し皆々又家居り送りかへし都の討手今や來ると待居たり去程は毛一鷲徐吉の兩官の百姓
 は斬立られ漸周順昌を馬よかのさせ都をさして夜を日と繼て登りける頓て朝も出でまかじ
 かのよし言上すれば魏忠賢大に愕き是皆周順昌が所爲なるぞやいや引出して首を刎よと下知し
 ければ憐れむべし周順昌犯せる罪一點もあくて姦吏の爲に斬罪せられ首を刎よ梟られけるい
 無慚なりし事とも魏忠賢猶も令して吳縣の百姓を捕へしむ此時顔佩章等五人の思ひ設けし事
 なれば更は逃れ隠るゝ心なく銘々姓名を唱へ都より引れ順昌が死せし事を大に歎き晝夜惡聲を發
 て忠賢を罵辱しめ五人等しく市より引れ皆首を斬れける見る者涙を流し聞人哀れを催せざるの

あし吳郡の大夫某義人之と甚稱歎し首を乞ふて屍を合せ同所集め葬り其所業を碑し著し題
 して五人の墓といふ真とよ例希ある俠夫あり天啓七年八月廿二日帝卒は崩御し給ひ御弟君信
 王と中御方位に即位せ給ひ天啓帝を諡して哲宗皇帝と稱し廟を憲宗と號奉る扱も新帝聖智退く
 渡らせ給ひ前朝の政事悉く亡國の兆のみ也と是を改め給ひさしも權勢強かりし客氏魏忠賢が
 官を削て庶人となし忠賢を鳳陽の地へ謫れける忠賢の無念限りあしといへ共施をべき計略もあ
 く兼て己は徒せる内官一千余人を引つれ鳳陽さして出行ける帝此よしを聞し召れ赫然と大に怒
 り玉ひ兵部の官を召れ赦し玉ふの魏忠賢は國柄を窃み忠良を陷るゝ罪万死に當るといへ
 とも先朝の寵臣なるを以て暫く死をゆるし鳳陽へ謫しむる所を却て自つみ懲り逆黨千人を
 引卒し反逆を企んと計る條奇怪也早く禁軍三万余騎を率ひ追かけて捕へ來れと命じ玉へ兵
 部官かしてさまり軍勢を引て揉もんで追たりける此時魏忠賢の阜城といふ所より到けるが忽官兵
 來つて捕るよし傳へ聞ゆるは忠賢慨然として曰吾布衣の賤しきより出て自ら國柄を執事殆十
 年世を奪べき大志時至らば天命爰盡たりとて從來りし數十の兵士を悉く去しめ愛妾二人を
 刺殺し自ら縊れ死したりける帝は猶御怒甚だしく客氏を捕へて浣水局はこれを殺し忠賢一味の
 姦賊數十人を市に斬其余の刑罰の悉く是を免し天下に大赦を行はれければ上下の士民是ぞめで

たり君よこごと末頼母救喜びける實や此帝即位有て後漸三四ヶ月の其間、（註） 姦惡の輩を誅しまか
 も川る功臣壹人もなく皆帝の聖智より出たり翌年三月年号改元有て崇禎といふ爰も李自成とい
 ぶ者あり父へ延安府米脂縣の農家に馬を畜ふ李十千守忠といふ者也守忠年五十は過く子なし其
 妻石氏と共に華山の廟に祈ると數日神是は告て曰破軍星を以て爾が子と與と夢みて既は妊孕を
 萬曆二十五年丙午八月自成を産り父母神の告の怪しけれ、此子を聞兒と呼り六歳にして字を識
 七歳にて書を讀て義理に通じ長成て自成と名乗天性狼惡にして父を打母を罵る自成廿三歳の時
 父母相續で死す自成惡行彌盛にして財寶田宅半年計の間は悉く失ひ羅君彦といふ者に從ひ
 劍術兵法を學ぶ時、崇禎元年の冬より米穀價高く粒を珠の如く柴薪尊き事箇々桂樹の如し朝
 廷より遼東荊州へ運送の兵糧夥敷求め給へど諸國の百姓上納すべき米粟なくいかゞせん
 と議する所、酷吏村々郡々入り來りて困民を虐青田を刈せ都も求むされ、諸州の人民怒み
 憤り山林幽谷に逃げ隠る去程は國々の群盜蜂の如く起り民を殺す事葉を切に等し李自成生質
 凶惡の者あれ、同の惡黨數百人を隨へ漢中の地は盜を畜す此頃交趾國より兵を起し明の京城
 を責討崇禎帝諸國を募て兵をめし給ふより國々より軍勢を出す漢中の地よりも數千騎を出し
 て都に到らしむ李自成此軍勢を向て大音を罵ける、爾等へる、都より上り寇を拒んとそれとも



明鄭芝龍寓
 日本長壽娶
 田川氏生男
 鄭森

今の朝廷賞罰正しからず功あるも罪を受死て身を葬の地なし唯徒ら身力を盡し夫は何の益か
有ん吾の關中の草寇其名三泰を高く成り八呼んで關將軍といふ爾等早く吾を従ひ下半世の身を
安くせよ先試し我手鎌を見よやといひも終を待たる戦を倒し大地へがりと突立置き白馬よ
跨り縦横に馳る事風の如く弓を取て矢を搭ひ駈さまは彼戦を射るよあやまたす柄の正中はつ
しとめて劈事八九寸衆軍是を見て同音に讚稱し謹で尊命に隨へんとて皆李自成が屬手となる自
成大に喜びおのが衆は伴へんとする所も忽數十人の客商北京より歸り來るも逢り李自成是
を見るより我輩の得物こそ出來れり囊中の物を悉く剝取れよと下知するよぞ屬手の小賊百人計
簇々と取圍み行李金銀少しも残さず奪ひ來て自成も呈ぐ此客商とも身邊の財寶残りなく掠め
取られ今ハ舊窟に歸りても命を繋ぐべきはかりとなしとて是等の者とも皆李自成が屬手となり
て伴は強盜をいとなみける李自成是に依てます勇み諸軍に向ひけるハ我軍勢を集る事山
賊海寇の所爲と異へ今明の朝廷衰へ令ハ貧り吏ハ虐ぐ万民の苦惱爰に究れり故に我仁義の黨を
結び逃兵飢民を集めて普く天下を横行し不義の寶を奪ひ窮民を賑へさんとす爾等盟て義よむ
く事なかれとて美酒を買猪を宰し紙錢を焼て軍神を祭るその祭文よ曰
結義衆性李自成等各人郷貫不レ一只爲下近來天地不公因而貧富不レ等

更兼三官貪吏酷是致二隨竭膏枯願效二梁山之故事二期爲二晁蓋之後人二即漢世五盜將軍亦嘗助貧而掠富豈今日自成衆等敢稱二益寡一以哀二多伏望明神懇祈貽鑒

ねんをろゝ祭り終て臘の肉を煮熟し卓子あまた席は排べ岡將自成上座は着き數千の屬手居流て大碗酒を呑み大饗肉を吃ひ宴をなせ事數日の後其勢は遠近に震ひ終南太行山の幽僻は隠れ住み多くの人馬を山より下し客商を却かし貪官酷吏を捨め奪ひ一時の富饒人牧を欺き諸國の軍盜美岡將軍が剛勇を慕ひ蟻の如く集り其手下は屬する程も今の軍兵強大なる事六百万人漢中より蜀の泗川にいたり九十八所の塞を搆へ二十四人の大將ありて首尾相連りいかめしく守護しける誠は希有の大盜あり

○李嚴得二開封府民心

不義を行ふて生を偷へ夫魚の釜中は遊ぶが如し終久しき事を得まどかや李自成が猛威日々盛よして九十六塞六百万の人馬二十四人の賊首自成を押尊んで岡王と崇め大元帥と稱す爰はひて自心は思ふやうに吾も六百万の軍馬あり恐らくは官軍を斬崩すべし此勢は乘北北京の都は責入天子を廢し大業を圖るべしと張獻忠王聞人の兩魁首を招きて事を評議す張獻忠はける

の岡王大義を起さんと欲し給へ先豫糧糧を貯へ六百万の軍勢の糧を足しめ根を固ふして進み給ふべし王聞人の曰獻忠が評議極て善分數万の軍馬を東西南北の國々遣し民間の財物を掘み取り九十八塞は積事山の如くならしめ而て后大義を成すべしと云李自成大に喜び其計策を隨ひ孫昂と史定兩人を大將とて兵十方を領せしめ山西を亂妨せまめ呂佐と林漢といふ者を魁とし是も十方騎を以て陝西を行しむ聞人訓と方也仙の兩人は山東に赴き洪用光鄭曰仁の安慶は亂入を其外張獻忠王聞人等を初めとし數十員の大將各十方の軍卒を領し四方の國々へ亂れ散て兵を劫し財寶を奪ふさしも中原廣しといへ共國賊の至りぬ國もなく人民害を受ける者擧て説べからま爰は開封府といふ所の縣官の筆帳李嚴といふ者あり平生財を輕んじ義を重んじ普く天下の英才を友とせ或日知縣を告て曰く連年荒旱打續き庶民飢は臨み困窮既は迫れり然るを敢て救ひ施を事なく返て其租税を催促し貧民をして途は啼泣せしむるは不仁の甚しき亂世の基は候ふ希は知縣令を出し十年の貢を免し倉を開ひて飢を救ひ給へといふ知縣是を聞眉を縮めあき不怪の中事や朝廷より日々糧米の催し頻よして文書の到着する事恰も雨の降が如し今もし租税を免して取せんべ何を以てか朝廷の催促は應むべき必重き罪を蒙るべし又飢救ふも今の時節は當つて豈無用の錢糧是有んや目前は大亂を引出すとも更は施すべき計なしと答ふ李

殿の知縣が首を叩いて慷慨して止す家もかへり倉も積たる粟米を残らず出し百姓も分ち與ふるといへども只限り有穀を以て限りなき百姓を救ふ事なれば悉く行届す是よりよつて無頼の若者數十人中合せ家富の家も押入李嚴を閉きて貧民を濟へり然をいひんや此家門富家の身として知らず顔するこそ心得ね早く粟を出して百姓も與へよと聲々罵る程に各當の富人門戸を閉て共々論せざれば無賴共大に怒り石を投かけ棒をふるひ門戸を崩し倉庫も押入後の火を放ちて焚立ければ市中是が爲に騒ぎ亂る、事大方おし知縣甚驚き官軍を出し捕へんとすれども夥しき百姓群集り却て官軍をさんぐ小打擲し縣の前より我を殺せしめて道路も死んよりハ酷吏の手も死すべしと聲々罵り敢て退く者一人もなし知縣大に是を恐れ李嚴を招きて怨みていふ爾よしなき施しをなして將よかゝる大變を引出せり今百姓聚りて散る事なしいかよして好からんや李嚴の曰く相公一箇の告文を書暫く租税を免し給ひ、百姓等必き悦び退くべし知縣是に隨ひ李嚴を命じて告文を寫さしむる其詞は曰く

杞縣正堂 示爲下暫停徵比以恩窮黎事竊今國課雖嚴民情更急目下災荒殊甚飢饉難堪所有下應比錢糧上暫停三月始俟三秋成有濟再行開限爾百姓亦各安心靜聽毋得聚眾喧嘩以取罪戾上

崇禎八年七月

初四

日示

李嚴 自告文を持て縣門の柱に粘貼けるを衆くの百姓望み見て互に相謂て曰李嚴自ら彼所は有告文の旨は偽りあらんとて悉く散り去れり知縣の李嚴が行狀百姓の心を得たるを思懼れ本府の上司へ急入人を馳て中けるハ李嚴が心腹大に量がたし家財を散じて民の心を結び煩國の大患なり早く圖り治せせんハ無窮の害を殘さべしと告ければ上司大に驚き重ての糺明も及ばぬ數百の官軍李嚴が弟宅を取り圍み提騎大勢群かゝり李嚴を捕へ高手を擲め牢獄へ引下す諸の百姓是を見て忿々大に怒り李嚴相公ハ我徒を救ひ給へる恩人あり今却て夫が爲に害を受け獄に下るこそ不思議なれ己民を害ふ狗官悉く打殺し李嚴を立て知縣と成すべしと近隣の百姓群り集りを研戦を刃磨き既大亂を引出しぬ

○宋孩子見闖王

去はと開封府城中外の百姓數千人黨をあし夜の三更知縣が館へ押よせ門を崩して亂れ入れば上下の士卒大に愕き鎗よ弓よとひしめく間も百姓ばら藪々走りより片端より斬殺す是よりよつて館中の上下接し相違し防ぎ戦ふ事能はせ我先よと逃出れば多くの百姓彌猛勢ひを得て難なく堂中に亂れ入帳の内は隠れたりし知縣を探し出し棒を上て打殺し直も半の傍も押來り獄

卒夜廻の者を悉く斬倒し終に李嚴を救ひ出し凱歌を上げて退く程に縣中の役人一人も出て遮者なく震ひ恐れて鼠の如く逃竄時、李嚴衆人に向ひ中やう、旁、一時の憤り、絶せしめて某が難儀を救ふといへども却て又一ツの大事を引出せり知縣をば、め數多の官士を殺しぬれば其罪を正さんとて都より討手の大將向ひ來らん、切いかよして防ぐべきといふ百姓の中より、こざかしき者一人出て申ける、李相公此事よおひて小しも心を苦しめ給ふな我輩、始めより是を思惟し置たり今、獨の泗州は強盜をなせ、闖王李自成、其兵六百万、余一度動けば、霹靂の震ふが如し、官兵は曾て制する事能はせ我々李相公を伴ひ、闖王の陣中、隠れな、何の恐れか有べうといふ、李嚴是を聞て大に喜び、是屈竟の計略、汝等が言ふ順が、いんとて先縣館に火を放て、一時の煙と、焼立數千人の百姓を誘ひ、闖王の陣に趣きける、此時、闖王李自成、賢を尊ぶと稱し、專人心を結び納るゝの時、あれ、李嚴が來れるを大に喜び、請ト入て對面す、李嚴謹で禮を行ひ、小生の開封府の李嚴と申す者、數千人の飢民を従へ、難をのがれて大王の膝下、來れり、希ひく、哀憐を垂て、帳下、一頭目ともなし、給ひ、活命の大恩、必死を以て報奉らん、闖王、自手を取て、助け起し、足下の大名を、聞事雷の耳、は、斯が如し、只相逢事の遅きを恨む、吾爲す寸忠を出し、大事を圖り、王業の基を開き、い、何事か、是は勝れる喜び有んとて、席を對して、酒宴を設け、其情、恰も舊交の如し、爰よ、おいて、李嚴も心を安ト、千余

人の百姓と共に此陣中、數日を送りぬ、是より先、四方の國々に云ひ、や、童謡あり、其詞、曰く

十八 孩子生三穴 下 一 自 小 生 來 好 殺 人

時、一箇の人あり、闖王の陣に來る、身の丈、僅に二尺六七寸、面貌、凡て猴に似たり、河南の歸德府、永成縣の人性、宋名の、獻策、世人、是を宋孩子と呼り、能人の禍福を占ひ、機謀ありて、六壬六合の神を使ひ、神出鬼没の妙を得たり、闖王、つら、見て、心、思、穴、下、十八の孩子、とい、將に、宋孩子に、應せり、此者、必ず、吾軍中の師と成るべしとて、近く、招きて、物語を、おぼ、句々、奇を、吐言々、妙よ、あらざるなし、闖王、甚だ、よろこび、帷幕の中、留て、大業を、謀、宋孩子、五言四句の、謠を、唱ふ

流 人 順 河 干 一 陷 在 十 八 灘 一 若 要 三 十 雲 去 一

起 自 雁 門 關 一

大王、他日、義兵を、起さ、雁門關、よして、馬を進むべし、門中の、馬上の、王の、闖王の、号、は、驗あり、といふ、李自成、此論を、妙とし、宋孩子を、尊んで、宋軍師と呼び、専ら、大義を、計議しける

○ 湯 同 昌 蔣 專 閻 等 喪 二 官 軍 一

闖王、李自成が、勢ひ、日々、月々、盛よして、遠近の、國々より、兵を、引軍を、率し、來り、伏せる者、賊を、知ら、せ、らさ、大軍を、發して、天下を、定むべしとて、五十四、余万の、勢を、揃へ、河南の、地を、攻んとす、此時、李嚴、闖

王は中けるの王大事を圖んと欲し給ひ、賢を尊び士より暴逆を禁じ民を恤み給ふべし近き頃打續き年荒五穀登す奉行代官百姓を虐取事法は過なり爰を以て万民苦しむ事熱湯の中は陥る如し大王の軍過る所秋毫も犯す事あしと云ひ、天下の民欣々然とよるこび單食糲漿して軍を迎へ王業忽ち成就せし李自成之を聞て甚喜び李儼を先手大將となし大軍を進めける然るに河南の百姓聞兵散て民を犯さず撫育して軍をせむと聞或の財寶を呈け或の米粟を獻上來り復せる者夥敷未だに血をぬらずし、數百里の地を略せり爰も又張獻忠といふ者あり始め閩賊が屬下の一將之しが諸國亂効の爲め十万余騎を引て他國へ行しが忽ち自立の志を起し閩王は從ひて自大軍を領して湖廣の地を犯し掠むざるよつて湖廣河南の兩所より北京へ急を告る事雪の飛が如し崇禎帝大に震懼を腦し給ひ湯同昌と云者を大將軍と成し二十万の官兵を發し賊を討し給ふ時、河南の藩府福王と申の崇禎帝の叔父君よして陝西の守護之しが李自成が大軍を城を攻落され福王父子都をさして落給ふを自成兵を分つて追討しめ終に福王を擒よし忽ち斬て其肉を醢よし鹿の肉をまじへ福鹿酒と号けて是を食ふ此時賊首張獻忠は數十万の大軍を以て襄陽を責討既ち城を陥れんとす然るに官軍大都督湯同昌三十万の兵を引て襄陽を後詰し獻忠といとみ戦ふ事數日といへとも元來湯同昌軍略は疎き大將なれば獻忠が伏兵を取こめられ三軍忽ち亂

れ潰へ襄陽の城も陥り藩府の公達悉く討死し給ひ罪皆湯同昌が一身よかりぬれば活て都へ歸るべき心もなく自ら縊れて死たりけり大將かくのごとくなれば從卒東西に散れ南北に散じ男女の百姓啼叫び迷惑ふ有様の目もあてられぬ次第是よつて張獻忠勢ひを得漢陽荊州黃州岳州等も責入て向ふ所更に敵する者なく斧を以て竹を破がとし閩賊李自成は河南の地を悉く斬平け開封府を攻圍む時、崇禎十五年秋八月黃河の水俄に溢れ堤潰へ岸崩れ開封府の地忽ち湖水と成れり閩兵力を用ひずして開封府を皆殺しよし終に南陽懷慶を切從へ是又破竹の勢ひをさせバ崇禎皇帝彌々驚き給ひ再び大將軍を擇みて逆徒を鎮め給へんと兵部尙書蔣專圖は兵十方を附して營を河北の地は布しむ蔣專圖自ら才能は誇り賊兵を物のかずともせむ閩王李自成蔣專圖が向ふと聞てわざと勢弱りたる民を撰み官軍と戦ひしむ蔣專圖味方を驅て大ききす、めバ閩兵さんくは斬立られ討る、者三万余人賊將李牟といふ者勢ひ盡て降参る蔣專圖李牟を近く召寄せ賊軍の虚實を問ふと答て曰く李自成が軍兵とも蔣公の向ひ給ふと聞いて衆軍皆色を失ひ大羊の猛虎を恐る、如く早ぬけくと落失て今ハ軍兵僅に五六万よハ過中すまじあはれ此虚に乗し長く驅て大に進まば一撃は賊兵を平ぐべしと申しける蔣專圖も有んと大よよるこび頼て軍を三隊に備へ李牟は道の案内させ深く賊巢を討入バ大に遮る賊兵粉の如く亂れ四角八方へ逃隠

る官軍大は勝り乗り進るを追て進む事六十里豫州の地に到りけるは左右皆樹木繁り中より一道の細路有様伏兵の有べき所なるれば蔣尊開馬をどくめ李牟を召て事を議せんとす此の時軍中普く李牟を捜し求めども何地へ行しや更に見へず蔣尊開大に驚き扱敵の謀は落たるぞや引やくと下知する所は忽相圖の鳥銃響く程こそあれ十方より賊の大軍潮の如く激き出矢を飛ばし火砲を打かけ一人も餘さじと喚き叫で取圍へ官軍大い肝を冷し我先は遁れ出んとひしめけとも敵軍鐵桶の如くして逃出へき道も無く進退を失ひあされはて、有けるを李自成が大軍縦横も斬倒し血の流れて川の如く屍の積んで丘の如し十方の官軍或は討れ或は降参し大將蔣尊開も只一騎辛き命を助り都をさして逃登れり李自成いよく猛威をふるひ秦關を過て都近く押寄せたり

○周遇吉射李自成眼

崇禎十六年甲申の歲首閏王李自成偕は國号を大順と名年號を永昌と設く此日北京より百官元旦の朝賀を成し所は俄は西北の方より大風吹來り沙を揚げ石を飛し或は地裂け山崩れ帝城の樓閣多く頽れ街巷の民舍悉く倒る天文官奏して曰く歲朔の風乾より起りしは是兵亂の兆として暴賊卒に到り城破れ君亡る、驗之と中程内外の諸臣眉をしのめこいいかよと議する所は闕賊益々

々猛勇にして居庸關を陥れ不日は都へ押寄るよし急を告る事櫛の齒を引が如し朝廷群臣唯天を仰ぎて嘆ずるのみ誰か一人馳向ふて防戦んと云者なく議論のみよ日を送り帝かくては國家の滅亡は及さんと殊さら聖慮を苦しめ給ひ自ら撰で學士李建泰といふ者二十万の選兵を授け尙方の勅を賜ひ同月十六日正陽門の五鳳樓は幸有て大宴を開き給ひ李建泰は儀別の御盃を下したまふ李建泰謹で天盃を頂き且奏しけるは上必聖慮を保んじ合戦の事を以て心とし給ふ事なかれ臣肝腦地をまみるとも誓て姦賊を平け國家安寧を奏すべしと帝殊は御氣色佳しく諸軍勇み悦ぶ所は卒は大風吹來り又鳳樓の門ゆるぎ倒れなんとす帝甚をとるき恐れ給ひ急ぎ内裡は還御あれは李建泰の輿を乗り宣武門を出けるは轅折て建泰の地は落たり上下の軍卒大は怪み古人の語の出兵遇風沙一軍覆不還家と云へり此軍墓々しかるまどと思へぬ者もなかりけるかくて李建泰同月廿日都を發し軍勢を引て涿州に到る時賊の兵勢強大こと聞軍卒落行者大半は剩へ東光縣の百姓等相謂て官軍の狼籍なる賊軍より勝れるとや此所へ狼り入まじとて城門を閉て是を防ぐ建泰此跡を見て大は怒り晝夜三日是を責て百姓を追散し光縣城に入といへども敢て又まゝむ事なく漸々は行事三十里寧武關に到り寧武關の總兵周遇吉忠勇の強將なれば建泰と力を合せ賊を退け國家の災ひを拂んと數万の兵を集め關前を柵をより逆茂木を引き敵の

来るを待居たり李自成が部下の大將苗人鳳といふ者大軍を引て寧武關を責寄せ関を作つて戦ひを催す程周遇吉大に怒り選兵數方を引卒し門を開いて斬て出目に余る賊の大軍を追つ返しつ戦ひけるが周遇吉が鋒先するどく賊を斬事一万余人血の白沙を染み屍の青草は横りたり去れどと賊軍限りなき大勢なれば新手を入替おめひて責れば遇吉も兵を引入矢石を飛し鳥銃を放ち爰を最期と防ぎけるされども外は援の勢もなく兵糧既盡きて士卒半の餓たり賊の陣中より兵威彌盛んとして鳥銃石砲の鉛弾の雨のそ、ぐが如く八面より喚き叫で責上り難なく城門をうち破り李自成自ら大軍を驅て殺倒し周遇吉歎じて曰く賊の衆く味方の寡し我討死の期也とて矢倉より上り賊軍を見渡せば關王李自成の袍は黄金の甲冑を看黒き馬を躍らせ兵先を進み責上る遇吉是を見て大に喜ひ弓は矢番ひしべしねらふて放つ矢は李自成が左の眼をくさど射通せばさしもの目成たまり得ず馬より下り落たりける周遇吉城兵を招きすのや進めと云程よとあれ雲霞の如く群たる賊軍の中へ面もふらず切て入縦横無盡に突立けるの勇々しかりける剛きなり此時遇吉數刻の戦ひは力勞れ身も立矢の箕毛の如く眼くらんで漂ふところを賊兵とも落かさなつて搦め取りたり扱も賊の大軍門々より亂れ人所るは散て火をかけぬれば城中の軍民或は討れ又ハ落失せ大將軍李延泰も防ぎざるゆへに術計なく一騎鞭を打つぐともなく落付ける關王

城中に入て上下の軍民を保軍功を稱す此時生捕周遇吉を引て帳中より列り衆人聲よく呼りける關王汝が忠勇を感じ厚く軍中より用ひんと宣ふ速に降参し軍忠を勵むべしと申けるを遇吉聞て大に怒り我は明朝の忠臣何を狗の如く盜賊に降参せんや無用の言葉を費んより早首を刎けんと其顔色平常の如し賊徒甚憤り頓て遇吉を市の巷より引出し磔として殺しけるに無慚なりし有様なり李自成此事を聞て大に感嘆し是眞に忠臣なり明の諸將悉く周遇吉が如き忠勇あらば今日我此所迄至る事を得へけんや嗚呼松柏の歳寒して節操を知り士氣し國亂て忠貞を顯はるとい周將軍の事と深く感稱したりけり

○崇禎帝對臣擊賊

賊魁張獻忠の湖廣をたいらげ獨郡を攻落し關將李自成と舊好を深く結び兵を合せて荊州岳州を打靡け惡感を震ふ事尤も甚し人の妻女を奪ひて父と夫を自然に離置き其側にて恣に淫し取かしめ俱に斬て之を殺し或は孕る女を割て男女を試み或は大鍋に油を熱し稚き子を其中へ投入苦しむを見て快とし其外人の腹を割て米豆を推込羊を飼て其肉の美なるをよるこび都て軍役も當らざるもの悉く殺し屍を柴薪と雜へ城に賣する時城下より積上て是を州に穢氣人魂をくらまし城上の守兵立どころは氣絶せ城を乗るの要器として專人を斬殺す時は慈東の鞭鞭

の軍勢威風彌盛んとして攝政王覇業の術を行ひ貝勒王軍務を司り明國と婚姻を取結仁政を布施せし遊の群民深く其徳を懐きて清の國号を唱へ專南の方明の都を攻破んと圖りける又閩賊李自成の數百萬の軍兵宣府を屯し不日は畿内を犯さんとそかくの如く天下鼎のごとく分れ所々の賊徒霧の起るに似て中國を掩ふ崇禎帝甚患ひ苦しみ自ら徳政廢し御出ありて百官を集め計議し給へども諸臣只默然と勅答する者一人もなし帝再三賊を退くべき計や有と問給へども彌以答る者なし爰もひて崇禎帝大に嘆じて曰く朕世を治めて既に十余年日夜政事も心を苦しめ身も華飾を省き専ら聲色を遠ざく朕の亡國の君も非ずといへども臣の悉く亡國の臣と御涙を浮められ衰衣の袖を打拂ふて内殿に入せ給ふ哀し事ともなり翌日詔を下して吳三桂を寧西伯に封し山海關を鎮め韃靼の兵を防せ左龍王を寧南伯に封し張獻忠を討し唐通を定西伯黃得功を靖南伯に封して閩賊を退かしめ給ふ去程は閩賊李自成の勢を擧て榆林の地を犯し掠む此地の巡撫使總師孔と云大將忠勇の譽ある者之しが賊兵到ると聞て陣をつらね防禦をあす五色の旗を立書は五方の神將を以てし八門八卦の靈文を押し其兵するどく他の士卒は異あり賊の先將劉崇文は天羅地網の陣を張り四方の旗は麟鳳龜龍を各が數多の隊將列をつらね陣を揚て進み來る兩陣互に金鼓を鳴し矢石を飛ばし討つ討つ數日が間息をも繼ず責戦ふ憑師孔勇猛

こといへども元來寡き勢を以て數限りなき賊軍に對せべき戦ひも有されば次第くは陣營亂れ終に軍中を討死す閩賊進んで昌州を打傷む守護の官軍或は討れ降參し賊勢真に利刀の竹を割がとし定西伯唐通の數多の官軍を驅て進み戦へども官兵常は糧足らず勞れ疲たる軍兵はれ何ぞ賊軍の猛く勇あるに當るべし皆悉落行よを今の戦へべき力もななく終に兜鍪を脱で賊軍に降參せりいづれ明朝の衰敗かかと悲しかりける次第なり

○崇禎帝開三秘室

崇禎十七年春の首大風吹起つてより以來北京の地晝夜共震ひ動き内裡の中は怪き事とも多かりける其姿美しき婦の白き衣裳の上は黒髪をふり亂し帝の御側どもやさきを顯われ出てさめくと泣はとよ后妃や髮肝を冷し魂をうしなひ絶人者少きからず宿直の武官劍を抜て斬んとそれば忽然と消て陰もなし帝甚思み惡み給ひ鐵冠道人といふ者を召て妖を穰はせ給ふ道人一丈計なる白面の觀音を北京城の四門に造立し又百人の大衆を集め餓鬼施食の偷伽檀を討け紙錢を焼て祈ける或人問て曰く三世の諸佛皆金色之此觀音のいかてか白粉をいて粧へるや道人の曰く是經に所謂白佛あり或人又問白佛の何の經より出るや道人曰く釋迦一代の説法は千餘卷皆是白佛言の語なり藏經に就て審よせよと答ふ都下の道俗おぼへて失笑せむといふ者なしさるほど

宮中ノ日毎鳴動して震ひ傾く事幾度といふ事を知らず宮門ノ懸たる額忽地ニ落其地裂開けて一ツの石碑を顯りし石面ニ順治の二字を刻たり崇禎帝種々の妖怪ぞむべき術もあく御心更またのしみ給はず爰ニ明の高祖皇帝開國の軍師劉伯温か誠め封じたる秘室あり上面ニ題して曰く

凡國有二大變方可開視不得輕易洩露以啓中禍端上

此時崇禎帝自ら此秘室ニ行幸し給ひ櫃を開き其兆を試んと給けるは大監謹で奏しけるハ此秘室ハ先天の秘機あれバ猥りニ開き禍ヲ需給ス事なかれト帝更ニ從ひ給はず官人ニ仰せて上包の皮を掲げ黄金の鎖を打開き朱門の扉を押あけ帝自ら進み入らせ給ふニ室中くらくして見るものなく妖氛目をくらまし呼吸を止む帝をハしめ内官兩人膝振ひ肉動きて恐れわな、く事半時ばかり漸よして室中少し光りさしけれバ目をとくみて透し見るニ只朱塗の木櫃あり帝内官ニ命して此櫃を開かせ給ふニ中ニ書軸三幅あり第一軸を開き見るニ繪圖あり左ニ云

文武の百官數千人皆手ニ冠ヲ執り髪ヲ披リ素足ニて亂れ走れる圖なり

帝御覽して是何の圖ニて何の讖兆なるや内官謹で奏して曰く此圖恐くハ是君の百官多しと云へども讖法亂れ冠を脱て敵ニ降る形ならん帝再び第二軸を開き展て見給ふこれも繪圖なり左ニ

若干の兵將戈を倒よして甲を棄兜を投ト飢なる民の男女を携へ奔走の圖なり

帝又是をいかゞと問給ふニ以官奏して皆必軍中背若を捨て北走の狀ならん帝勃然と色を變じ給へバ内官皆頭を叩き係る不祥の物聖覽ニ入られんハ勿体なしと取納めて掩へんと帝強て三輪を開き看給ふニ畫像あり左ニ云

身ハ白き背袴を着右の足の趾よして左りの足のハ襪履をはき髪をし亂し肩よか、れり宛もよく帝の聖容ニ似たり

帝又此像をいかゞと問給ふニ内官答て曰く臣等か不肖を以何ぞ未來の兆驗を洩さん假令いがある前兆ありとも君の仁愛よく民を治め政の正しきいよしへハ恥す必ずしも聖慮を煩しめ給ふ事あかれと奏す帝ハ心更ニ樂しみ給はず問々とりれひて宮ニ歸り給ふ去程ニ闖賊が兵都近く押よせ畿内の守城皆賊の手ニおら入總兵知縣忠なる者ハ自ら縊れ身を思ふ者ハ賊ニ降り京師より西の郡縣ハ悉く瓦の如く解ぬと聞へけれバ北京の人民安き心もなき所ニ北京の街ニ童謡を誦ひはやす其歌ニ十八の子北京ニ到ると謠へり人民是を聞て十八の子ハ李の字ニ李自成此所ニ到らならんと彌恐怖周章を時ニ闖王李自成北京の四門ニ牌を立て三月十八日順天府の會同館ニして矢合せをせしと書たりける諸人は是を傳へ聞童謡の十八孩子恰も十八日ニ應せりとして

恐れおの、き我先に老たるを扶け幼きを携へ山谷深林の中は遁れ隠れ都の上下擾れ騒ぐ事云ん
かたきし實は國家滅亡の期といたわしかりしありさまなり

○ 閩賊陷北京城

賊の軍師宋孩兒の兼て北京の王氣消亡せるを知り且當月十八日必風雨暴く吹き雲霧天を掩ふ
べき事を鑑て十八の子北京に到の童謡を都下は流行せ諸人の心を恐動させ四門は札を建た
るも皆宋軍師が計略之且國王は見へて中けるは今月十九日辰の刻は都城破れ天子崩する事其應
驗天の文は顯れたり今若此機に乗せずんば援兵四方より集り再び大事は及びなん大王十五六歳
のいまだ冠せざる童子を撰み前軍の兵を成し四句の權語を唱ふべし其語は曰く

孩兒軍師孩兒兵 孩兒攻戰官殺敵

只消出三個孩兒陣 孩兒奪取北京城

かく唱へて北京を攻討ハ大功をなさん事心の如くあるべしと云李自成是は隨ひ速は童子五千
余人を率らび各弓矢鎗刀を持せ甲冑爽は出立せ大旗は十八孩兒の文字を金書し跡より大軍
數百万先昌平州を賣崩し十二の皇陵を墮ち樹木を伐捨草一根も残さばこそ或ハ亭殿を燒兵糧を
奪ひ沙河よりぞ進みける正は三月十六日あり崇禎帝ハ賊軍近く押來るよし聞し召れ兵部尙書

張縉元をハ下め在合ハ諸臣を召集急ハ事を議し給ハ兵部郎中席を出て奏しけるハ獄舎
にある罪人の刑を免し寶を與へて賊を防かせ給ハ命を捨て戦ふべしとやけれと其余の諸臣一
言のいらへもかく默然として居たりける帝ハ事の既ハ迫たるを知しめしおぼへず龍顏を掩せ給
ひは涙落る事珠の如し群臣相向ひとも聲を放つて大は歎く此時帝諸の臣を指さし汝等徒は
詩書を讀空く今古を論ずるといへども今日に至て其實なく唯朕が面前は假の涙を粧ハ何の事
をのなし得んや朕ハ只社稷をまもりて死をべし爾等か賊はつかへて諛るを黃泉の下より見るべ
しと宣ひけれハ群臣いよハ奏すべき言葉なく逡巡として退き出ぬ其中ハ大學士范景文尙書倪
元瑯都給事吳麟徹の三人御側を退かせ帝の宸襟を思め奉る然るハ賊兵既ハ平子門ハ入ぬと聞ハ
けれハ京城の人民亂れ騒ぎ男女東西ハ走り迷ふ此時李自成降將杜鐵亨を使とし帝ハヤしけるハ
再軍既ハ都城ハ入今ハいかハ防ぎ給ふとも及ぶまじ李自成明朝の今日滅んことを便かく思ふが
故ハ帝と天下を兩ハ割て是を領し軍を息めて退くべきやと奏しけれハ群臣皆大いハ喜こび是を
國家の幸主上の洪福よこそはやく其旨ハ隨ハ給へと進め奉れハ帝ハ唯涕を流し聲を吞で宣ひ
けるハ抑我祖廟幾許の精神を費し此山河を創業し給ハ不肖の子孫座ながら安樂を受く若ハ一旦
地を割て賊と並び政道を執行ハ朕死して後黃泉ハ趣き何の面目ありて高皇帝ハ見ハ奉るべき其

地を割て活んよりの寧死せんよの如しと彼使來りたる杜鐵亨といふ者を引出して斬せ給ひぬ
 扱も帝の大監王之心といふ忠臣を召ぐし國公王の府に到り商議せんとし給ふも門を守る者帝の
 自ら到り給ふとの思ひもよらむ國公宴に趣きいまだ歸らずと答ふ帝をべきやうなく宮中へ歸り
 給へば御母君周皇后手も節を持ち涙して宮中を走り廻り天災既降り大禍正に至れり忠ある
 者は是を救ひざるやと叫びく廻り給ふ帝の城頭を望み見給ふも彰義門破れ官軍鳥のとく散亂
 し帝忙しく後宮に入皇后もるとも手を組で大事至れりと哭泣し給へば數多の官女御座を繞
 り御側へ倒れ何れ成らせ給ふ事ぞやと啼叫ぶ形勢の譬て云ん方ぞなき帝官女等を見て爾等早く
 爰を落て命を扶れと勅し給ひ頓て守城官を召し白き燈籠三ツをあたへて令し給ふ事急なら
 ば此燈籠を城門高くさし擧よ益急に至らば二ツの燈籠を上げ火急迫て實は進退究らば三ツの
 燈籠をさし上べし宮中へ只此燈籠を目當とせしとて乾清宮へ入らせ給ひ太子定王を周皇親も
 附與なし給ひ永王を劉皇親も托し社稷の傾覆天地祖宗をして震怒せしむる誠は爾が父の罪なり
 とて兩位の太子と聲を放て悲み悲き相別れて外へ出給ふはや一ツの燈籠を高く挑たり既も壽寧
 宮へ入て長公主を見へ手を取て涕哭し帝公主を早く斬殺さんとして劍を震て向ひ給へこゝろもく
 らみ斬かねて倒れ伏し給ひしが又思ひ直して一刀を斬下さんく打給ふを公主玉の如き手を以て

遮り給ふ臂を切て肩も及ぶ公主あど叫て地へ仆れ氣絶魂くらみ人事を知らせ給はず帝又走り出
 て西宮へ到らんとし給ふも燈籠既も二ツをかけたり帝御心碎る如く宮中へ入て見給ふも袁貴妃
 自ら縊れ給ふ帝繩を切て地へ墮し劍を以て斬殺し又愛妃數人を一時も刺殺し坤寧宮へ行て周聖
 母の縊れ給ふを見哭し給ふ事一聲皇極殿へ登り景陽鐘を自ら撞きならし給へば其聲殷々とし
 て京城へ遍く響き出ゆといへども文武の官人一人も來る者なし帝涙をふるひ三眼銅鈴を手も
 持内監數十人と前門に至り城頭を望み見給へば此時三の燈籠高く掛並べたり帝長歎し天命既も
 至りとして自ら指を刺血を滴りて遺詔を寫し御衣の中へ縫こめ給ひ髪をふり亂して面をおけひ宮
 後の煤山へ行て自ら滅び給ふ王之心の哀痛腸を裂竟も相向ひて縊れ死す嗚呼悲い哉宋明三百
 年の金甌賊の爲も破られ一時の霜と消けるこそ眞も古來いまだかくの如きの奇禍のあらじ實も
 崇禎十七年三月十八日の事ありけり

○ 賊軍亂三妨帝都

三月十八日の暮方より旋風土砂を擧げ木の根を倒し屋舎を崩し暫く有て雷雨交り廻り今や天地
 も滅却するらんと人々安き心もなし此時賊軍帥宋孩兒五千の童子を前軍となし彰義門より亂れ
 入り縦横は馳めぐりて斬立れば官軍僅も六万斗我先よと進行程も朝廷文武の百官冠を捨て破笠

よかへ寶劔を投て鋤鉄も取かへ數多の百姓も打交り所定めず逃れ出でぬ係りける程は都城の内
 只婦女兒童の泣叫ぶ聲天は聞へ地は震ひ哀れさかざりなかりけり此官軍の中は義を守り忠を忘
 れざる兵五千あまり討死を共せんと齊化門の傍より鋒先を並べ開を作つて斬てか、れば賊
 兵大さく騒ぎ亂れ急ぎ備へを立直んと上を下へと騒動も死を窮たる一隊の官軍、面もふらず突
 立れば賊軍思ひの外は斬崩され討る、者二千余人賊の軍師宋孩兒遙く此跡を見て兵も下知して
 前年鐵冠道人が所の道は造りたる白面の觀音を打崩せば腹の内より忽數千の鉛丸飛出火藥四方
 よみだれ散し官軍の頭のうへは雨霰とおはひか、れば賊兵一同よ力を得て宋軍師兼て計略有進
 めくと呼つて烟の内より薙立れば髀むべし五千余人の官軍一人も残らず皆討死を成したりけ
 る爰は御史王章といふ者此形勢を見て涙流る、事附の如く大刀を振て只一騎敵軍は斬入五六騎
 斗は難伏たり賊の大將牛金星といふ大勇の壯士鎗を捻つて王章より合七八合戦ひしが狼臂
 をのべて忽是を生捕合參せよ登庸んとやけるを王章、眼をいつて、と白眼我の明朝の忠臣汝
 如きの叛賊と同じからず速く斬と怒りけるを牛金星今は是非なしとて一刀は切捨たりされば此
 後官軍一人も及向ふ者なく賊の兵卒八方は亂れ縋紳の第宅百姓の家居は亂れ入金銀を奪ひ婦女
 を掠め亂妨狼藉言詛は絶たり百姓是を見て大は恐れ潰れを以て旗を作り順民の二字を大書し且

永昌元年順天皇 帝萬歳と寫し門々立戸々香を焚跪きて拜をなす此時關王李自成黄金の
 鏡も七寶と兜を着白馬は跨 旌旗鎗刀空は掩ひ悠悠々歩行せ數百萬の軍兵四方を守り大明門を過
 て承天門を望み見自ら弓は箭を打つがひ天を仰て大さく笑ひ諸軍を顧みてやける、我今勢山河
 を併呑し當は大明を滅しぬ我子孫永く天下を一統せば此箭承天門の額の天の字は中るべし汝等
 試は是を見よとてよく引てひやうと放つ矢盡下つて天の字の下は中れり牛金星走り來つて大王
 の箭天の下はわたる、天下一統貫き得るの祥也と祝しければ自成大は喜び終は紫金城は入て宴
 を開く宋孩兒をいじめ二十四員の大將等一齊は万歳を唱へ都城の娼婦歌唱變童百余人を拿へ來
 り酒進み備へ歡飲む其余の賊徒思ひく、一席を定め深宮大殿は舞曲をなし酩酊して猥は淫まさ
 し、明朝三百年天下の政事を正し給ひたる金門鳳閣忽ち青樓煙房と變下けるこそ淺ましかりし
 事共也されば城門の外數方の軍卒東西は馳て士は羸民を侮り富人の家は入て、白銀赤銅の花缸
 を奪取馬槽となし秣かひ貴戚の家より琥珀珊瑚の盃を掠め大なる、楯鉢を成して牛姜韭を
 摺小きの油盞を成して燈を點す其余の狼藉は是は進じて知るべし

○ 應三劉 伯温 識

扱も李自成の崇禎帝の行方を知らざりければ告文を發し崇禎帝を捕へ來る者、銀一萬兩を賞と

し侯伯は封すべしと雖廻しけるに諸軍草を口かつて尋ね求む途は煤山紅閣の内は崇禎帝の屍を得たり身は玄色透白の青心を御衣をさへひき面を覆ひ左の足は朱履を着右の足は赤靴にして衣箱の中は血替の遺詔あり其辭は曰く

朕涼德藐躬上干天谷然皆諸臣誤朕無面目見祖宗自去冠冕一以髮覆面任賊分戮勿傷百姓一人

人々是を見るは彼秘室に籠在し劉伯温が圖識は少も違ひき定は天數の止べからざる所也と愕かぬ者もなりかける并は皇后の死骸は宮中より取出し自成一錢二貫を出して柳の棺を真土塊を枕として是を殮草の廠を建て以て之を覆ふ王之心が薄棺をも其便に置き年老たる内官六七人是を守るを哀さたぐひなかりける李國禎外成徳といふ兩人帝の棺を取きがり悼く哭て絶入けるを自然とも傳へ聞實も理は過たりとて袂を濡さぬ者もあし

○忠臣殉死烈女死節

忠臣の二君は仕へき貞女二夫は更きとかわされば崇禎皇帝國賊の爲は弑逆せられ給ひければ内外の臣節は死する者尤多し孟兆祥と章明兩人は正陽門の下にて刺ちがへ死し范景文の食を厨事三日城の陥るとき井中へ投じて命を落し倪文略の紗帽を戴き袴衣を着漢壽亭侯關帝を祭り

南面して縊死す翰林院の王偉は壁上は身不レ可辱志不レ可降と大書して妻の耿氏と正しく縊る李邦華も壁に題して堂々丈夫聖賢爲レ徒忠孝大節之レ死靡レ他と書し縊死す劉理順は妻の萬氏妾の李氏其僕四人共は縊る是も壁上に題して曰く三忠祠内無レ愧二前賢一其外金紵と云者は麻素を着冠服を加へ河中へ沈み凌義渠は自頰を柱に打當碎き死を劉文炳は内へ男女十六人同く投じ火を放て宅を焼供は井中へ躍入て命を終る惠安伯張慶臻の兩人は財寶分て親族と與へ家の四方は薪を積み其中は妻子と俱は酒宴を成し火を放つて俱は焚死す其餘節を守り義も死するもの數白人悉く記すべからず係る時世は懶ぎは婦人の身也常は深窓の中は姿を粧ひ人よりも顔色の美しからん事を求むれ其國亂れ家破るゝの期は臨んで其容の絶しうが故は辱を蒙り身を傷くいたましさかな宮中の女官賊の亂れ人ぬと聞捕へられて汚されんも口惜しとて河中へ身を沈め死する者二百余人哀れといふもあはかなり死を後れたる宮女三十余人爰彼所にてとらへられ心るあき賊將ども少しも容の美なるを争ひ奪ひ取妻もへ婢女と成る其中は第一の美女費氏なる者年方は二八ばかり賊將羅公と言者捕へられ既は辱しめられんと其時費氏忽ち一計を出し涙をながし告て曰く吾は崇禎皇帝の娘長公主之狼り汚し戯るゝ事なかれ一度闖王よやて後其命は従ひて身を任さん羅公此事を尤もや思ひけん引て闖王よまみへしめ爾々と

言上す季自成つら〜費氏が姿を見るるは艶麗にして動止の幽閑なる何様傾國の風容是必長
 公主は有ざるを知り試みよ羅公よあたへ妾となさしむ羅公大よよろこび急ぎ己が奪ひし宮中よ
 歸りふうふの交りをなさんとて費氏の曰く關王の免し給上正爾と夫婦の昵を爲すべし妾未
 年幼なく男子を觸し事なし何ぞ假初は婚をなさんやよろしく吉日を撰み而後行へ給へ羅公
 是を聞て誠と思ひ流石は皇帝の女ある哉禮なくてまみゆる事を免さずとて吉日を撰み猪と宰
 し羊を殺し宴を設く衆賊來りて是を賀し終日の酒宴は主客とも大に醉罰公足も定らる房帷の
 中よ入費氏を呼んで枕を連んとて此時費氏利劍を袖の裡よかくし持酩酊したる羅賊が咽喉を
 ひと突刺一刀よ殺し其身も俱よ心を貫き何所よ死たるは類殺るる行跡之此費氏始關王よ近付奇
 怨を報んと思しよ言ならまして爰よ及ぶ其義勇男子よ劣す季自成も其貞烈を感心し士卒よ命
 し屍を集めて葬し茲よ又吳奎と云賈人有其妻張氏なる者容貌美しく心貞烈之吳奎外よ出で
 張氏家を守けるは賊等數多亂れ入ぬれば張氏心中よ大に恐れ庭よ有ける泉水の中へ身をかく
 して忍び居けるは賊等財寶を掠めとり門外へ出行たり張氏夢の覺たる心地して池の中よりい
 出衣を改め夫の吳奎を呼來んと門戸の際へ立出しよ一人の賊人來り忽張氏が艶色を見て奪へ
 姦淫する事屢々なり此賊元來酒よ酔たれば其後熱く眠りて更よ覺す張氏心中深く恨み怒り兎や

せん角や計んと心忙しき所へ夫吳奎歸りきたりて門を叩く張氏ぬき足して門を開きしか〜
 と物語り姦賊よく睡りていまだ覺す深殺して恨みをむくひて給へとて夫婦等しく刀を抜持吳奎
 先賊が咽喉をさし貫けは張氏の劍を揮ふて寸段々よ切殺せ此賊懷中よ若干の金銀を貯へけれ
 ば吳奎頓て是を奪取家を棄て夫婦諸共難を遁れて道を行事五里ばかりよして一ツの井あり張氏
 是を見て夫よ向ひゆけるは貞女の二夫よま見へすとかや妾先よ賊の爲よ身を汚され生を偷み義
 を失ふは君の歸るを待ん爲今既よ逢て怨を報ぬ思ひ寄ざる財寶を待たり心残りの事更よなし
 いとま給ひへとて彼井よ身を投せんとて吳奎愕き抱き止んとするを張氏聲を揚て君のが罪を赦
 し給ふとも妾何の面目ありて世よなからへ待るべきとて押開き井の中へ飛入て死たりける吳奎
 をへきやうあく側ある垣を井の上よ引崩し涙をわさへて落行ける

○ 兩婦 殺二兩賊

北京の都よ豪富の生藥店有名を潘鵬と云妻の宛平縣の進士が女徐氏妾の臨清の妓女揚氏一妻一
 妾花の如く球よ似たり揚氏ハ琵琶の秘曲を傳へ雪の朝月の夕水弦よ彈するは聞者感じて神を
 失ふ今計らずも國難よ逢ひ賊等都よ亂れ入狼藉防ぎ難きよ寄徐氏夫よ向ひゆけるは頃日賊等婦
 女を奪ひ姦淫せる事甚しき由日々よ聞り吾の唯死を期せるの外なしとて即砒霜石を酒よ和し

兩婦相約して若變あらば一所飲て命を終るべしとていと騒がすして居たりける然るも二人の賊門を崩して進み來り室中に入らんとぞ潘鵬驚き卒はかくるべき所なければ天井の上より登り身をひそめてを隠れける兩人の女に兼て覺期せし事あれば盃を取て伴の酒を飲んとす二人の賊大は喜び娘子酒を酌給ひ、諸とも我も酌べしとて先徐氏は一盃をそむ徐氏元より死を求むる心なればよるこんで飲盡すは忽ち面の色變じて身を倒して其所より臥たり賊等是を見て此娘子酒は勝も早くも酔ぬと打笑ひ又一盃と酌て揚氏進む揚氏此時笑を作てやけるは妾元より酒を好まず若兩將軍情ありて賤しき身を捨給ひす此一盃を飲給へとて賊等もすむ二賊目もなきばかり打笑ひ我輩此酒を呑で君の情を蒙らん事元よりと希之壁上琵琶をかけ給ひたるは必是風月中の人なるべし我正は其酒を飲べし贈よ一曲の妙音を弾し給へといふ揚氏打笑ひ頓て琵琶を把て金徽を按へ玉軫を調べ鳳求鳳の曲を弾じけるは曲韻ゆるやかは揚氏歌の聲宛轉たり二賊ことを聞て余念をわすれ盃を取て一連三五盃を飲猶妙音を誦けるが忽然として服中裂がとく面色青く唇紫の色をなし毛穴より鮮血流れ立すくみ成て死たりける潘鵬は天井より是を窺ひ急は飛下羊半は走けて羊と血をとり徐氏が口は灌入れは毒酒を吐きて甦れり潘鵬爰はあひて大は悦び砒霜石の性重くして底は沈む徐氏先は飲が故は其毒淺し二賊は後多く飲を以て

自命を失り是天の亡す所とて嗚て家財を取納め二人と婦人も男の姿も出立せ山中深く遁れ

けり

○李自成登位

爰は曹化淳といふ者あり先は闖王都に入し時彰義門を開ひて賊を引入れいまだ時至らざるは燈籠を上て帝の命を迫り闖王は内通して賞を貸りけるは闖王李自成却て是を怒り汝明朝は臣として國恩を忘れかへり忠を成す事惡むべき罪人なりとて引出して首を刎させける又李國禎といふ者あり闖王は中て曰臣三ツの願ひあり聞れまば自ら死すべし一ツは明朝祖宗の陵を開く事なかれ二ツは先帝の葬を禮を以て爲すべし三ツは太子を始め諸王子を殺す事あかれ李自成聞て悉く是を赦す國禎恩を謝して退きぬ次の日李自成崇禎帝の梓宮を天子の禮を以て徳勝門より送り厚く葬り奉れは李國禎よるこふ事限りなし頓て崇禎帝の靈前に至り劍を抜て自ら首をはね義を全ふして死たりける去程は同年四月六日李自成自ら皇極殿に登り皇帝の位は即文武の百官を定め朝賀を受く百官頓首して万歳を唱ふ不思議なるかな此時に至て自成目眩きて立事能はむ忽ち白衣の人其たけ數丈なるが自成が前より顯はれ出たり賊將等大き驚き力を究めて捕んとするは忽然と消て其跡なしこれより後自成御座のほる毎は此妖物見れ出自成劍を抜て

斬んとすれば陽炎の如く手も留むべき物更よふし是を怪み思ひ居けるは寶璽を鑄さしむるは其
 文理亂れて見へる永昌の銅鏡を鑄るは是も文字あざやかあらず幾度鑄改むれども更も分明なる
 事なし賊軍師かゝる不祥を見て李氏の滅ん事を量り知り書を作つて諫めけるは主上位は登り
 玉ふののじめより種々の怪異見る、事尤帝王の恐れ謹しみ玉ふべき大事よろしく堯舜の仁
 を以て其民を愛し堯舜の徳を以て天下に施し玉ひ、百姓帝王の化は潤ひ國家永く後世に傳ふへ
 し假も荒暴の行ひあらば天地の神明是を罰し忽他人の有と成べしとさましく諫訟をれど
 自成是を心とせず日夜宮中美女を集め恣に荒淫し酒は亂れて罪なきを殺し奢を究めて
 百姓を虐げ悪行日々募りければ心ある人々の李氏の滅亡近きありと危み思ひぬ者もなし

○ 吳三桂 將下請三兵 於 鞏 鞏 討中 賊 賊

遼東の總兵吳三桂は三十万の勢を督し鞏の防として遼の地へ趣きけるは闖賊李自成亂を成す
 より去月吳三桂をも都へ召れける是よりつて三桂軍勢をまとめ北京として登んとしけれども
 闖賊畿内へ遮り關へ入事能はず心ならずも日を過しけるは三月の季に至り闖賊北京を陥れ崇
 禎帝賊の爲に薨じ玉ひぬと聞へければ吳三桂甚だ驚き一時は北京へ押通り怨を報べしと議けれ
 とかゝる大變有しと聞て三十万の軍兵散くよあちらせ今に僅一萬騎あり過ざりける吳三桂

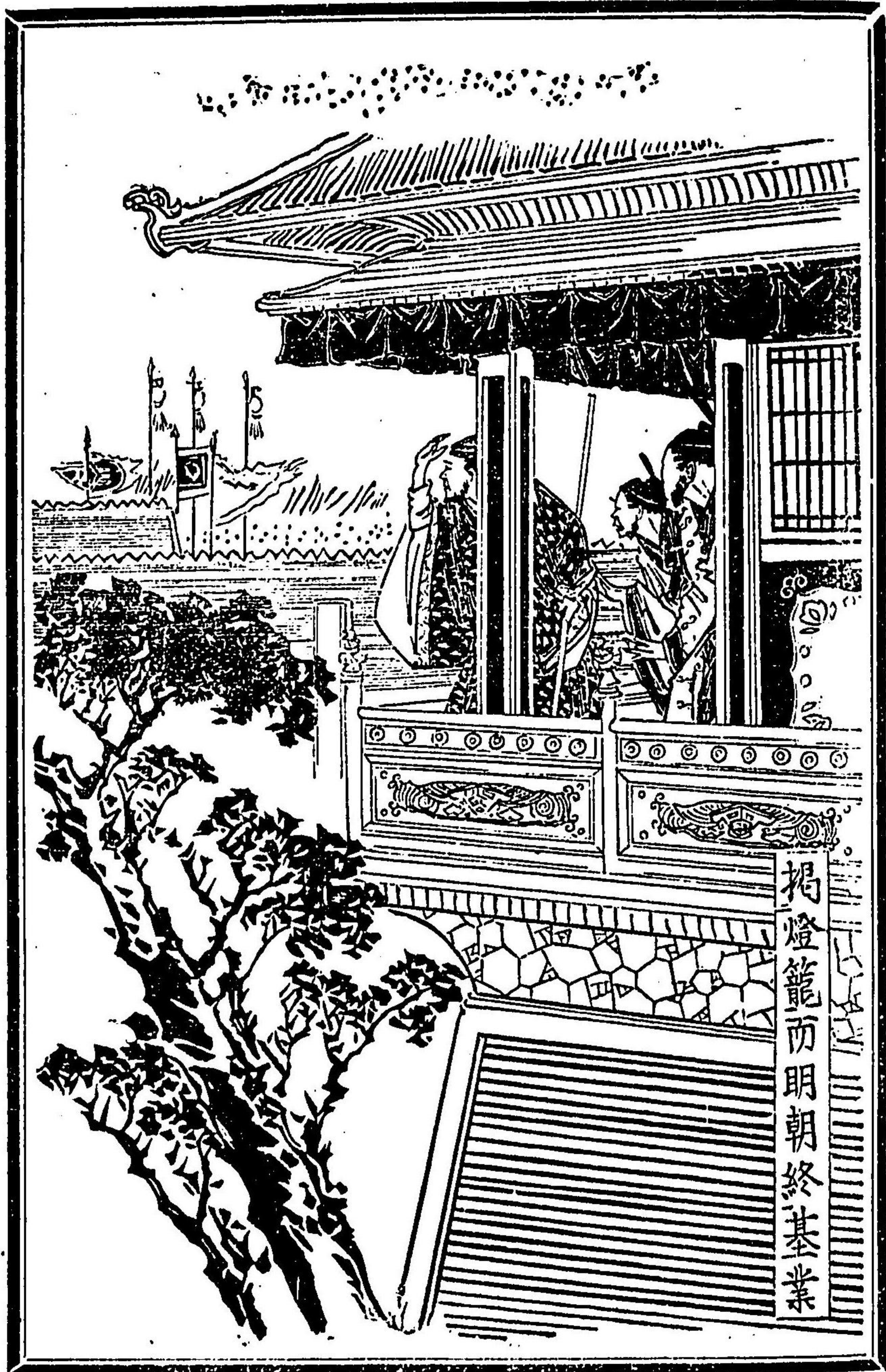
無念かぎりなくいかよもして賊を亡し先帝の御憤りをいらし奉らんと檄文を飛し諸方の侯伯
 を募り集るは皆闖賊の猛威を恐れ吳三桂は力を合さんといふ者なし爰もあひて吳三桂一ツの計
 を心よ定め鞏の勢を假て怨を雪んと直に山海關を越て日夜道を急ぎ瀋陽城に至り明の總兵吳
 三桂國難に逢て爰も來れり希くは謁見を救し給へとやけるは門吏此旨を攝政王に告げれば頓て
 吳三桂を招きよせ攝政王自ら出て相見す吳三桂頓首再拜して申けるは吾崇禎皇帝はからざるは
 李自成が爲に社稷を死し衆賊北京に入て國を亂す臣死して以て國怨を報んと欲すれどもいかよ
 せん力微し勢足らば抑明清兩國の寇亂は互に威を示すは過を今日に至て大王隣國のよしみを
 捨き寛大の仁心を發し小臣は兵を假し力を添て明國の讐を討しめ給ひ、大恩永く忘る、事有ま
 じく親族の因を結び猶負を入れて其徳を耀さんと肝膽を吐き血涙を落し涕泣して願ひければ攝政
 王聞て良思惟して有けるは堯舜として答て曰明國亡びて忠義の臣なし獨吳將軍大功を建國寇を
 平けんとする賢も大丈夫の志なり吾軍勢を發し是を援けなは賊を斬んよ何の難き事か有ん然
 といへども功成て後將軍何れの地も身を安し何れの王を君とするや吳三桂泣て答て曰く大王の
 宣ふ所の事成て後義のよろしき順ふべし某が今日もあける死を以て國を報る肝腦地も塗ども
 亦更に辭する事なし大王よろしく事を請り給へ是もあひて攝政王吳三桂を旅館に退かしめ群臣

を發し闖賊を亡すべき旨を認め遣しければ李自成甚是を恐れいかくのせんを謀したりける時
降参の大將唐通といふ者進み出て曰く今天下悉く君の威勢を復し獨り吳三桂のみ何の力有
て敵對すべき某是を以て説く某必ず害を捨て利を就べし若迷ひを取て隨ひずんば忽兵を發して
三桂を生捕國家の大患を除くべしと申ければ李自成大よるこび汝が計を以て妙なり吳三桂
を擒するか或の味方よ招き來らば爾を以て侯伯とせしめて精兵三十万を與へ遼東へ趣かし
む此時吳三桂の清の大軍を催足し山海關迄來りし唐通が軍勢も爰に至り五十里隔て陣を取唐
通自ら數十騎の邊兵を從へ吳三桂が營に來り姓名を以て通ずれば吳三桂智勇を兼し名將なれば
豫め唐通が計略を推察し招き入て對面す唐通禮終て申けるは將軍邊關に在て功高く名大あり
といへとも今既國敗れ國亡び暫く身を保じ給ふの地なきも似たり順帝李自成よく士を下り英
雄を慕ふ堯舜の仁なしといへとも頗る湯武の徳あり將軍の大名を渴慕する事宛も泰山北斗の
し一度見給へは位職富貴豈先朝に仕へ給ふ如く微々たる者あらんや爰を以て先尊大人書ませ
よせ招き給へとも一旦の義よりてしたかひ給へば某再び爰に來りて將軍を告て將軍自ら利
と不利をよく察し給へと云吳三桂之を聞て假な面を和らげ君が詞よく我肺腑を貫けり謹で
尊命に隨ひ降参して忠を勵むべし然といへとも今我清國の囚と成れり大夫丈軍中よ有て逃走ら

を集めて評議有る貝勒王進み出て奏しけるハ吳三桂が吾王ヲ援兵を求るハ天の清國を引て中國を與へ給ふ之請まかせ大軍を進め給へ昔戰國の時江濱は釣する者あり或日魚を得ずして空く家よかへらんとす濱の畔は大きる蚌あり口を開ひて體を晒す時よ鵝といふ鳥遊は是を見て其肉を食へんと飛來つて啄を差入る、よ蚌愕然として貝の口を合す事尤固し鵝又驚きて啄を脱て飛去らんとするよ蚌ますく強く噛て相離れず釣者より是を見て力を用ひずして鵝蚌を兩あがら手を以て捕獲たり今吳三桂李自成の相戦ふハ鵝と蚌の闘が如し大王力を用ひずして自然之を得給ふへし攝政王大よ喜び翌日吳三桂を召出さる此時吳三桂髪を披き香をかけ謹で攝政王よ見ゆ攝政王則ち援兵を給ふの旨を下し貝勒王を惣軍師とし副將軍邦免公。龍虎將軍附馬鐵右先鋒丁知豹。左先鋒海利王。右監軍安大人。左監軍烏金王。をはじめとし噤噶靴子。丁黑山。馬德光王老虎。金虎山。等其兵總て百万騎攝政王自ら是を引卒し日を撰て打立ん、よ吳三桂天よよるこひ地よ喜び専ら出陣の用意をなし攝政王の命令を相待ける

○吳三桂斬唐通

此時關土李自成ハ吳三桂が父吳襄といふ者を擒へ書を作らせて吳三桂を味方よ招くといへども吳三桂元來關賊を怨る事深く其肉を食んと欲すれば何を是よ順ふべき父が許へ返書して近日兵



揭燈籠而明朝終基業

を發し國賊を亡すべき旨を認め遣しければ李自成甚是を恐れいかくのせんと謀したりける時
・以降參の大將唐通といふ者進み出て曰く今天下悉く君の威勢を復し獨り吳三桂のみ何の力有
て敵對すべき某是を以て説く渠必ず害を捨て利を就べし若迷ひを取て隨へずれば忽兵を發して
三桂を生捕國家の大患を除くべしとやければ李自成大よるこび汝が計を以て妙なり吳三桂
を擒よするか或は味方よ招き來らば爾を以て侯伯とせしめて精兵三十万を與へ遼東へ趣かし
む此時吳三桂の清の大軍を催足し山海關迄來りし唐通が軍勢も爰に至り五十里隔て陣を取唐
通自ら數十騎の選兵を從へ吳三桂が營に來り姓名を以て通ずれば吳三桂智勇を兼し名將なれば
豫め唐通が計略を推察し招き入て對面す唐通禮終て中けるは將軍邊關に在て功高名大あり
といへとも今既國敗れ國亡び暫く身を保じ給ふの地なきに似たり順帝李自成よく士を下り英
雄を慕ふ堯舜の仁なしといへとも頗る湯武の徳あり將軍の大名を渴慕する事宛も泰山北斗のと
し一度は給へば位職富貴豈先朝に仕へ給ふ如く微々たる者あらんや爰を以て先ず尊大人書をせ
よせ招き給へとも一旦の義よりてしたかひ給へば某再び爰に來りて將軍を告て將軍自ら利
と不利とをよく察し給へと吳三桂之を聞て假な面を和らげ君が詞よく我肺腑を貫けり謹で
尊命に隨ひ降參して忠を勵むべし然といへとも今我清國の囚と成れり大夫丈軍中よ有て逃走ら

んは口惜し明日公軍勢を引て此營を賈給へ某其時後軍より卒に起りさし狹で清勢百万を塵よ成し其功を以て閻王の賞にあつからん唐通是を真くと大に喜ひ若しかくのとく成時ハ我も又是も過たる大功なし必ず計略を誤り給ふを明朝未明此陣はあしよせ合戦も及ぶべしとてこまに計を中合せ唐通ハ欣然として己が陣所は歸りけり其次の日唐通三十万の軍勢をくり出し早軍又ハ討勝し思ひを成し敵陣近く押よせ閻をとつと揚たるハ愚之ける謀略之時ハ清軍金鼓を鳴し旌旗連り劔戟ひらめき大軍師貝勒王一輔の軍は乗り右は安大人有左は海利王あり五十万の軍勢備へを亂さず押出せば唐通も三十万の軍を領し等々進み互は鋒先を交討つ討れつ半時斗も戦ふたり唐通が先手の大將管無昏紫金龍の盜は紅白線の甲を着し真先は馬を乗出し誰か出て我と戦を決んと大音は呼べつたり清の軍中より丁黒山馬を陣頭へ乗出すと見へしが毒箭をあけて切て放つと誤す管無昏が右の眼は中て真倒は馬もり落唐通が大將栗鄭仁といふ者は是を見て大に怒り丁黒山をえかけ鎗を捨て突かゝるを清の將軍安大人揮子鎗をふつて一往二來十餘台戦ひしが安大人ハ世は聞えたる猛將おつと喚ひて栗鄭仁を馬より下へ突ふせたり唐通ハ眼前またのみ切たる兩人の勇將を討せ心驚き自ら馬を乗出し吳三桂ハいつくよある見參せんと罵りながら後矢遅しと立たる所は吳三桂ハ甲の上は縞素の喪服を打かけ偃月刀を提げ横あひより

馬を踊らせ吳三桂是も在といふぞと見へしがつと馬を驅よせて唐通が肩さきより脇腹かけて一刀は切て落せば賊軍大將を失ひいかでか戦ひを勵むべき我劣じと逃行を清軍百万大浪の打よる如く一同は動と切まくれば賊兵討る者擧て算べからず逃のびたる兵卒僅は五六万鼠のごとく頭をかへ都をさして走りけるハ拙かりける有さまなり

○李自成遷金銀貨於西蜀

楚人沐猴にして冠す果然とハ韓生が項羽を諷する言葉ハ閻王李自成北京を陥れ自帝王の位に登り万民の父母たらんとはかれともいかにせし性鄙しく心姦賊万の事首尾相應せず殆ど盜賊のむかしのみ懸幕れ金殿玉座は政事を聞ハ似氣あくこそ見へよける係る時しも山海關は趣し唐通ハ吳三桂が計略すかしのせられ三十万の精兵と俱に命を彼地は落しぬと追々都も聞へければ李自成大に愕きこいにかよといふ程こそあれ清軍百万吳三桂は催され此頃北京は責來るよし風聞しければ李自成彌々懼をなし宋軍師を招き諮議しけるハ朕此北京は都成すハ大業は害あり別は地を撰んで遷んハいかよといふ宋軍師答て此計事甚よし秦關の固め天下は並所なし大王先宮中の財寶をあつめ西秦は送り後所は遷て事を圖り給ハハ万全の計ならんや李自成是も隨ハ北京の宮中ハ貯へし黄金三千万兩白銀壹万兩其外官員民間より取集めし金銀七千方

兩鎬物師も命じて重さ一千兩ツ、の大なる餅の状と成し孔を穿ちて索を通し車數万輛は積引つる、車數百里影敷事諸人の目を驚かしぬ嗚呼かしむべし崇禎帝英明にして儉をまもり令主も非ずといふべからむ然れども金銀を蓄むこと吝なり賊のはじめて起るときは僅か三五人もしくは十人飢え勞れたる土民のみなり此とき庫を開き金をいだし彼勞れたる民を濟ひなべからる大亂にのをよぶせじ之加賊の盛んなるも當つて兵糧軍用を諸國に徵め飢民をして益々飢しむ是よよつて万民怨み諸侯叛き國破れ身滅る時に至つて官庫も集め貯へし金銀悉く闖賊が有と成れり抑は何の所爲ぞや他なし其民の國の本たる事をまらさればなり

○吳三桂大破李自成

李自成は此時羽數多の賊將と俱に珍器財寶を取集め未だ北京の都城に留りけるも吳三桂十五万の軍兵を引卒し都城近く押よすれば攝政王みづから百万の軍卒を驅て後より續き旌旗空またなびき鎗刀日は輝き威風凛々と卷よせたり李自成今の急は退くも及はず備へを定めて戦へど都城の九門は勢を分ち大木大石を投かけ石鳥銃を釣べ放ち嚴しく支へ戦ふたり吳三桂が兵の國哀を發し軍兵皆甲冑の上より素絹を打掛吳三桂真先より馬を馳出し忠を忘れ孝も怠たる者の禽獸に李自成が首を見ずば誓て此戰場は屍を止めよ進めくと士卒を勵し無二無三も攻登れば此鋒先はわた

りがたく賊兵等防ぎかねて見へたりけり賊將容天成此時矢倉の上より顯れ出吳三桂が父吳襄が首を竿の上より貫きて高くさし上げ吳襄が家族三十八人同く首を刎て城上より梟ならべ吳三桂を見よとて一同よとつと笑ひける吳三桂の父の首を一目見るより勇氣たゆみ力勞れ覺へて馬よりとふと落大地を叩き涕泣されば一軍皆涙もむせび進みかねて見へけるを李自成下知してを一切て出て塵もよせよと惣勢都て六十餘万門々を押開きとつと喚ひて突立れば吳三桂怒れる眼も血を灑ぎ己姦賊悉く斬て此怨みはらさでやと黒漆の弓は白羽箭をつがひ城頭も向ひ切て放つよあやまらも容天成が咽喉を射通し只一矢よ命を落しぬされども賊兵は事共せせ鋒先をさらべ殺到すれば貝勒王百万の清軍を驅て向へ戦ひ兩方の大軍入亂れ親討れ共す願す主傷とも從卒救ふいとまなく死人手負を踏こへ飛越生死しらしも戦ひしいつ果べきとも見へざりける此時清の軍師貝勒王兼て用意やまたりけん風上より敵の軍中より石灰を投散す事影し折節野風荒く吹て賊の軍中忽雲霧の中より戦如く前後の文も分らねば將卒とも軍法を失ひ陣脚動ひて見へけるを貝勒王羽扇を以て味方を招きせいや進めといふ程よぞあれ附馬鉄丁知彪海利王安大人噯喇丁黑山馬德光等を始めとし數十員の大將百万の大軍を驅て大に進めば李自成が軍兵さんぐも敗北し賊將聞人訓陸綱豹史定蔡本雄姜廉可などを始めとし世も聞へたる軍將數十

人討死し甲兵二十餘万人の首を得たり李自成今ハ支へ難く宮中の門々高樓金殿玉宇ハ火を放ち一同ハ燒立煙ハ紛れ十餘万の兵と俱ハ山西さして落行けるされバ美善を盡したる王城一時ハ灰燼と燃上り民戸十万人民七万空しく燒土と成けるこそいたましかりし次第ハ攝政王兵卒ハ命ヒ王城の火を鎮め燒跡ハ陣をつらね専ら日姓を保んじ軍民を撫育しければ皆徳ハ懷き恩ハ浴し万歳を唱へ悦びあひぬ

○吳三桂製猛虎扒山甲破賊軍

闖賊李自成ハ都城の一戦ハ鋒先くじけ西の方蘆溝といふ所まで敗走せしが此所も止りがたく固安の地へ引退き爰ハ暫く寨を下し人馬の勞れを休めける抑李自成登極の始めより白衣の妖人常ハ顯れ心悞鬱して樂ざるハ吳三桂が爲メ敗を取今ハ氣ふさがり神倦みて病の床ハ打臥たり自成素性暴惡として人を殺す事を好むがゆへハ此病を忘ん爲とて日々百姓の男女を斬殺して酒の興とし僅ハ悶を遣ふされバ百姓是を恐る、事虎狼の如く他國へ走り山林ハ隠れ天ハ祈地ハ告て早く此賊を滅し給へと諭る聲洋々と遠く聞ゆ宋軍師屢是を諫むといへとも李自成敢て順ハせず時ハ李自成が先ハ斬靜めたる河南の地歸徳府鹿邑縣の百姓亂を起し自成が留主居の守將を斬殺し其勢ハ漸盛んこと訟ふ李自成甚驚き河南の地ハ吾巢穴なり急ハ去せむんバ大事ハ及ぶ

べしとて副將軍李嚴其弟弘將軍李牟兩人ハ三万の精兵を興へ河南の亂をしづむべしとて下知をなす時ハ丞相牛金星常ハ李嚴が民の心を得且其心の寛大なるを忌み惡み闖王ハ讒言しけるハ李嚴兄弟舊身雄なり先ハ勢ハ窮り王の旗下ハ屬すといへとも久しく人の下知ハ隨ふ者ハあらず況や河南の地ハ三秦の門戸晉楚の屏藩としていよしへより帝王の都を建る要地ハ今兵を得て故郷ハ歸る是虎を山ハ放ち添るハ翼を以てするが如し恐らくハ腹心の患ハをたさん李自成此時心恍惚と亂れ是非邪正を決斷する事能ハず牛金星が言ハ隨ハ酒宴の席へ李嚴兄弟を招き帷幕の陰ハ數百の選兵を伏置相圖を成して終ハ兄弟を斬殺せり是ハよつて賊將互ハ異心をいだき軍士離れ背く者甚多し去程ハ吳三桂ハ北京ハ有て暫く人馬を休足しけるが賊の臆病神の醒ざる内ハ追討して根を斷べしとて自ら工夫を凝し猛虎扒山と號せし一隊の甲軍と制ハ其法ハ選兵五千人皆虎の皮を身ハ被り其上ハ紙の鎧の綿糸ハて感たるを打ける等しく並て前軍ハ進み弓矢を持って敵を射るこれ鎗銃の銃丸を防ぐの隊なり吳三桂軍伍既ハ定りければ其勢ハ十五万騎蘆溝の地へ押よせたり李自成是を聞大ハ驚き眞定府ハ引退き防禦の備へをなす吳三桂直ハ眞定を取圍み彼扒山の陣を張り鯨波を作て押登る李自成劉崇文を大將軍ハ拜し六万の軍兵を以て出で防ぎ戦しむ且賊軍より西洋炮を放ち火珠を飛せ事敵の敵か如く夥しといへとも紙のよるひの軟るるハ

銃彈轉び落て、傷者あし劉崇文是を見て大きき怒り赤兎馬を跨り丈八の蛇矛を舞し吳三桂を只一突と陣中へ衝入れ、吳三桂側ぞし、猶豫へき假月刀をさしかさし馬を躍らせ劉崇文と二十餘合戦ひけるが双方間ゆる強勇あれば勝負いまだ見へざるほど、吳三桂馬の頭を返し偽り負て引退く劉崇文大きき怒りきたなしかへせと呼びつて馬を飛ばして追けるを吳三桂尻目に見て弓と矢つがひ後さまし射なりける、劉崇文が内胃をくさすと射進し馬より倒れ落死たりける大強無双の劉崇文かくの如く討れぬれば賊の陣々亂れ騒ぎ甲を棄戈を抛ち先を争ふて散北すれ、吳三桂が惣軍鐘を鳴し関を作り追詰く討けるはと、關王李自成の捍子鎗をひらめかし當るを幸ひ防ぎ戦ひまた、く内へ十五六騎算を亂して斬立ける、扒山の陣より討出す流矢李自成が肩へ深く討込馬よりがべと落たりけるを從卒驚き扶けて營へ歸りける、吳三桂か軍兵益機乗り花散微塵は斬散せば賊軍討る、者麻の如く知千人と云敷をしらず此時日既、西へ沈み埋伏の兵有んも心元へ吳三桂も軍をおさめ退け、賊へ辛ふして寨へ歸り汗馬も水飼息みける

○李自成死三維公山

李自成が幕下將假丞相の官を授けし牛金星常々叛逆の心有て自成を殺し權勢を奪へんと計りける、智へ宋孩子あり勇へ劉崇文あり徳へ李嚴ありてみだり、事をあしがたく空しく月

日を送りけるが先、讒言を搦へて李嚴を失ひ今日劉崇文へ吳三桂が爲、討死し今、心置者唯侏儒の宋孩兒一人、李自成へ矢疵重ふして床へ臥ぬ、今、我計あれりと思へ、李自成が勢ひ先日よかあり前、吳三桂清國の大軍あり從軍皆離れをむら、既、滅亡は及びなんとす、李自成が位を奪ふとも更、益なし所詮自成が首を取、吳三桂は降参し重て大義を計るべしと心、思案を定め刀板持、李自成が臥たる居間へ走り行、牛金星いづく、行やと聲かくる者あり、金星驚き頭をかへして是をみれば、則、宋孩兒の牛金星とさあらぬ体より、あし軍師何事有て留め給ふや、大王今矢疵重く衆軍悉く離れをむけり、いか成計を以て大敵を防ぎ給へんや、我此事を諷せん爲、床下まで大王よ見んと、宋孩兒莞爾として答て曰、實、大王矢疵は痛んで事を辨する事能はず、丞相大王よ代り大業を圖り給へ、某計策を獻じて相扶ん、牛金星是を聞て心中、大に喜ぶといへとも、且さと辭して曰、某才拙く智淺し、何を此任に當るべきや、此時宋孩兒聲を放つて、大に笑ひ丞相辭たる事なかれ、爾先、李嚴兄弟を讒言を殺し、今日劉崇文が討死を悦び、大王を殺して、吳三桂も降参せんと、とるや、牛金星大に驚き、軍師我を讒罵する事なかれ、宋孩兒吃て曰く、牛賊何ぞ人を欺くや、我汝が逆心有、知事久し、牛金星今、遁れじと、甚、怒り大刀を震ふて、宋孩兒が頭より、眞二段、斬たりけり、怪むべし、其手懸、只水を切が如く、切目より、血流事なく、一通の白煙立上り、其中、宋孩兒が

状ありくと現れ手を拍て呵々と笑ひ空中へ飛さりける牛金金心愕く事甚しく身寒く毛髪動
 き更言事能はず恐れて己が陣所へかへりけり此時國王李自成の痛み堪がたく燈の
 下は紅錦の褥を敷婦女あまた介抱せられ臥轉びて惱み居けるは宋孩兒飄然と燈下より立さめざ
 めと流涕す李自成愕き問て曰く軍師何の事有て夜中爰より來るや宗孩兒が曰く大王の矢疵急治
 せずんば今宵忽ち大難至らん此故に一盃の奇藥を呈せ金胎を塗て早く愈し給へ李自成大喜び
 侍女を命じて疵口を傳しむるは奇なるか痛み忽ち去り起居恰も常の如し李自成甚よるこ
 び宗孩兒が面をみれば其色蒼其狀甚哀げ之更も心安せず問て曰く軍師一度我を扶てより四海
 の内を横行し未曾て愁の顔色をみず今夜いかあれは悄然たる色を成や宗孩兒答て曰く吾は人間
 中の者非を羅喉星の精之世界に降する事五十年今天數既盡て牛金星が爲に殺されたり牛金
 星異心を發し大王を弑せんとす就中營中の軍兵多く金星に屬し事既危し大王宜是を計れ李
 自成是を聞て哭る事一聲天我を喪せり只軍師我を救ひ給へ宗孩兒忿然として曰く汝が運正よ
 窮る天命いかんとももる事なし速に此所を去り泗川の地に至りて張獻忠と心を合せ再び事を
 圖るは如し路は羅公の遇を枕とし俱に語るべしと云終てかき消とく失はけり李自成驚き暫
 し止まれとて取まがれと松風の響き颯々たる外は目も遮る物もあし爰よりひて李自成宗孩兒が

詞は隨ひ取物も取あへて泗川の方へ趣んと軍勢を點見するは十万余の賊衆悉く離れをむき從
 以行んといふ者五千騎は足らず李自成涙をふるは西の方へ落行けるは湖州の何騰蛟と云者圍賊
 を捕へんと五万余の精兵を集め路を遮り責討事急之李自成心驚き羅公山の嶮岨によつて寨を構
 へ何騰蛟が勢を防んと然れども陣中兵糧の貯へなく五千の賊兵悉く落失て僅十八人になり
 まけり李自成其者どもを向ひ涙を流し中けるは爾等かゝるは逆吾を隨ひ背ざるこそ生前の愧
 ひなれさしも勢ひ猛かりし時の諛り仕へて賞を貪りしが今日飢に臨めども是をさへ助る者なし
 世は口惜き次第ならまや今雷雨の深きは紛れ爰を忍び出張獻忠が泗川營に至り如何も計略を
 めぐらし此恨みをいらすべしとて主従もろども寨を出西方へ急とも飢ますく甚しく唯一歩
 も進みがたし是よつて傍の村落に入て食を乞ふ村民等甚訝りすはや盜賊をさんなれと鼓
 を鳴して人數を集め鋤鍬を以てさんくは打擲すれば打殺さる、者五六人李自成はほうく逃
 出山上さして這上り人里を遠ざかれの少しの心を安じ其所は廟の有けるは立寄て休息しけるは
 忽ち人有て打が如く眞うつむきは倒れ足痒身痺れて動く事能はず頭を上げて廟内をみれば中は生
 るが如き像あり髪をさばきし姿崇禎帝の薨じ給ひし御容よく似たりさしもの李自成あな恐し
 とて逃んとすれと抱身痒て露ばかりも動かす係る所へ百姓追々馳登り盜賊の爰ありと鎗を

以て首を微塵も打碎き快とて家へ歸りぬ嗚呼闖賊上君后を弑し下庶民を荼毒す上天怒り鬼神
 惡み終に野夫の手を借て之を斃すものならん奇とすべきの宗孩兒が十八孩兒及び羅公蓬枕の識
 皆能其言を叶へり去程は將軍吳三桂の十五万の軍兵を卒し黔陽近く到りけるは湖州の河藤蛟羅
 公山にて李自成が碎けたる首を取り吳三桂が陣所へ來り其首を獻つければ吳三桂大よるこび
 手の舞足の踏所をえらず即羅公山へ登り自成が屍を首と俱に埋し浸し北京へこそ送りける然
 るは牛金星は屬せし賊等李自成が死たるを聞俄に心を變し大將牛金星を高手縛り皆背を脱旗
 を伏吳三桂が陣所へ來り頭を叩き死罪を認へ降人よこそ出たりける吳三桂彌喜降人の悉
 く是を赦し牛賊を引出して問て曰く爾闖賊と北京の齊化門を出し時崇禎帝の兩太子の何れの所
 へ隠し置しや爾はよせと云牛金星大に笑ひ我徒何の道よか兩太子を隠し置べき汝が父吳襄
 と俱に自成が一刀を斬殺したり吳三桂是を聞て慟泣泣事數聲自ら劍を抜て牛金星を三刀刺終に
 殺して其屍を京城へ送り自成と同く磔にかけて罪を正す都下の軍民是を見て悦び勇む事限り
 なし

○張獻忠死漢中

爰に張獻忠は昔年李自成が屬手にして十方の軍兵を引て湖廣の地を犯し掠め終に自立して泗川
 の境に入其黨日々集り終に成都へ入て國王諸臣を殺し獻忠自ら西王と稱し年号を義定と号す
 専ら兵を起して蜀の士大夫をおびやかし降る者の救し降らざる者の其妻子を捕へ殿下へ引すへ
 數万の大衆を呼てこれに觸しむる其衆の吹所の者を引出して殺す是を天殺と号く畢竟何の據
 といふ事をえらず張獻忠が暴惡日々甚だしく泗川の兵多く山林へ遁れ隠る然るは闖賊李自成
 既亡び吳三桂清の百万騎を引て前の總兵左良王と一手に成り張獻忠を責討んと漢中へ向ふよ
 し聞へければ張獻忠大に驚き嘆息してやけるは吾蜀の地を得て國王を登り今既に命盡て滅んど
 す豈我一人滅ふべきや蜀中の軍民のこらす斬殺し我と等しく滅せんとして先蜀中の文士學生を數
 百人召出し武士を命じて取かこませ只一時に討殺す百姓を屠殺す事怡も草を切が如し百姓恐
 れぬの、山林へ走り岩洞へ隠れ石窟へかゝむを探り出して斬盡す是又何の故といふ事をえら
 ず張獻忠が先手の大將劉進忠といふ者あり六万騎を督して關を守れり此手の軍士多く泗川の
 者おれば獻忠が爲に親を殺され妻子を屠られ怨み悲しむ者數をえらず一夜の内へ遁れ出左良王
 吳三桂が陣に至り降参する者三万余人大將進忠も今に張獻忠もたのみがたくて同く左良王が陣
 へ降に入る、左良王大に喜び進忠を討し進忠を欺き討し進忠命を領し營を歸り
 わざと嚴しく敵を禦ぐの備へを成し扱張獻忠が方へ使を以て敵營の見配を希ふ獻忠は何の遠慮

よも及ばず逸卒五十騎計を引ぐし進忠が營中に至る此時進忠兼て善射者數十人を幕の蔭に伏置よくれらひて射させける程も過す獻忠が頼と咽喉二ヶ所を射て馬より下り命を落す進忠劍を提げ大に呼つて曰く張獻忠が暴悪天の赦さざる所之依て誅して官軍は歸順せり背く者の獻忠を以て例とし悉く誅せんといふ從卒大に恐れ平伏して謹て命を隨ふ進忠則 獻忠が首を取て左良玉に呈し關を開きて官軍を迎へ入る、左良玉吳三桂及血ぬらずして漢中を平定し軍をおさめて北京に歸陣せり

○大清定鼎於燕京

清の攝政王の居るが北京を靜め給ひ同年五月初の三日北京城武英殿にて即位あり大清皇帝と稱し奉る則年号を順治と改元あり百官の朝賀を受給ふも万歳を呼ぶ聲天に震ふ眞よめでたかりける次第なり吳三桂を遼東に歸し世代平西伯に封じ給ふ吳三桂清朝は國を奪はれ快からずといへとも清の勢ひ盛んよして事をなすべきよ有されば謹て命を領し遼東に趣き時至らば再び明の恢復を計んと密に勅諭を窺ひける順治帝詔りして崇禎帝を懷宗 端皇帝と諡し周皇后を列皇后と諡し神主を帝王の廟に安し五月六日より八日に至る迄万性哀を舉喪を發して其靈を慰め給ふ是に依て京城の人民順治の盛徳に服し伊代長久を祈りける順治帝再詔りして官々以下

京城の庶民に至まで髮を剃明の衣冠を捨て大清の制に遵しむ爰にいたつて國風忽一變し北虜のさまと成りけるの則天のまからしむる所よして人力の爲し得べき事よあらず爰に崇禎帝の御女長公主の何新宮人よ救はれ順治二年 自書をさへげて出家薙髮して先帝の御跡を吊ひ給はんとの御願ひ有ける順治帝更に免し給はず言配有し周奎を尋ね出し公主の禮を以て嫁せしめ田宅金銀車牛等まで下し給ひ爰しみ甚渥し公主此よしを聞て厭敷き給ふ事かざりあし終に病臥て薨じ給ふ 則 彭義門の賜地を葬る張震といふ者文を作て公を悼む讀者涙を流さるるのなし

○順治皇帝遣書南京

茲に南京の兵部尙書史可法と云者あり先は闖賊京城に亂入すと聞て數万の軍兵を集め都を救んとしけるよ三月十八日京師終に陥り先帝の稷を毀つ給ふと聞大に驚き南京の武官等と計議して賊を討んと圖りけれとも路遠くして急に至り難し此時先帝の兄 福王とや御方賊の亂を避て淮南に來り給ひしを史可法等南京に迎へ入奉り天下第一日君なくんば有べからずとて五月十五日即位ありて年号弘光と改元あり百官を定め朝議日々怠らず其大讐を報ふべき計のみ議せられける然るも遼東の惣兵吳三桂鞭を兵を借り闖賊李自成を北京に破り終に羅公山よして營を殺し怨を報ふといへども兩太子の先達て闖賊に害せられ北京の清の攝政王即位して國を大清

と号し元を順治と改るよし詳々南京へ聞へければ福王大に驚き給ひ百官齒をくひしづつて俱れども更に詮方あり其年七月北京の都に順治皇帝の勅使南京に到る福王先其使を請ふ國臣史可法等を出して旨を聞し北京の勅使順治朝の國書を出し且史可法は向ひてやけるは吾清朝の帝天の禪を受けて既に北京城に都し帝業を創め給ふ然るは南京の諸臣福王をかしづき登極せしめ元を弘光と建る事更に謂ふし天は二ツの日なく國は二ツの王有べからず福王速に号を削り貢を入て清朝の封号を受なば世々侯伯の上は有しめ南京の諸臣悉く舊職に依て無事成べし然らばんは北軍一發し南征せば金陵都下の人民生を得る事難しよつて命じて是を論す史可法は是を聞答て曰く夫先帝の亡國の主はあらず賊臣政を亂し遂に聖體義を守り社稷は殉ふ某千里の外は有て一度國變を聞しより俱に天を戴ざるの恨をいらさんと義を料るの間皇上冠亂を避て淮南に來り給ふ正しく神宗皇帝の孫枝先帝の皇兄にましませば南京の諸臣押尊んで帝位に冊を急し師を出して賊を討んと計る所は吳三桂清朝は兵を借り闖賊を亡し先帝を諡し天下の民を安んず是皆清國の助けによれりされば其恩廣大にして例なき明朝は臣たる者實は頭を叩き謝すべし然ども清王北京に都して位を昇るに至つては臣等心は冤る事なくんばあらずむかし唐宋の世にも回紇契丹兵を貸て中國を助けしも或は中國より公主を嫁せしめ或は金帛を送りて隣國の好み

を深くするは過を未曾て中國の虚に乘り其土を奪取を謀す且當皇帝即位の事は又怪むは足らず漢の光武唐の睿宗皆中興の天子にして其仇のまた滅びざる前は位に即り今清王の賢徳を以て何を舊好は忘れ吾中國を奪んとなし給ふは是兵を貸て討しめたる初の心は違ひぬらん時清朝の使者顔色を變じ答て曰く史可法が論吾朝廷の聖意は逆へり闖賊京を陥るの日吳三桂來り兵を借其心の只忠臣の仇を報むる大義にして國の爲に在る所はあらず故に清朝急は百万の兵を出逆賊を一戦の下に滅し明國の讐をむくひぬ抑明朝を亡せしもの闖賊なり吾兵の明を滅せしむあらず闖賊又北京を以て清朝と與ふ明朝より得たる北京はあらずされば史可法がいづゆる冤みはあたらぎと云史可法又曰く吳三桂荒活にして吾國を誤れり忠臣何ぞ二君に仕へ封職を受んや使者の曰く史可法若忠臣たらば何を北京及び陝西四川蜀へ師を出し國の大仇闖賊を討ざるや史可法が曰く忠臣は社稷を輔く師を出すの迅速を論せんや使者笑て云明朝の儒臣は文章の爲に國を亡す北軍若至らば一擧は是を得べしとて報書を取て呵々と大笑ひ北京へ歸りける

○弘光帝 徵三鄭芝龍一

泉州の鄭芝龍は日本に渡り名を一貫と改め流寓する事數十年肥前の岡松浦郡平戸に住家を定めらるる紅毛の賈船長崎の津に滞泊間紅毛とも毎に平戸に來り交易し鄭一貫とも睦ましく親しむ

けるよ或時紅夷醉は乗ト一貫と争論し劔を抜て一貫を刺殺んとそ一貫事ともせず紅毛が扱持たる劔を蹴落し空拳をつかひさんぐま打擲紅毛の痛く撃れ悶へ苦しむを平戸の百姓やうくは説言し扶けて疊船へかへしける然るも紅毛とも數十人合せ不意に鄭一貫が舎を取かこみ劔戟を震ふて込人たり一貫元來武勇絶倫の強夫なれば日本の刀を抜かざし當るを幸斬倒せば紅夷とも争是は敵すべきまたく内は數十人悉く斬殺さる平戸の郡主後の災ひを恐れ一貫を妻子諸とも長崎の津へ送り歸しぬ其後日本寛永十四年明の崇禎十年泉州の賈伯林元輔といへる者歸帆の便船は打乗り妻子と共に中國へ歸り安平城へ入て兄弟同く守ける爰は南京弘光帝清朝の軍勢を防ん陳謙といふ官人勅使として鄭芝龍を安南伯に封じ水軍を率て清兵を防ぎ退けよと詔りを下し給ふ鄭芝龍頭を叩き恩を謝し且勅答して中けるは南京の新帝臣が昔の壯なるを聞しめして老衰せるを老らせ給へば麒麟も老ては驚馬もだも如し臣年既は六十は余りいかに北虜の悍兵は當るべき弟鴻達頗ふる軍略あり臣は代て軍を出すべしとて美酒珍肴を以て勅使を饗應し鄭鴻達を督都大將軍とし芝豹鄭彩を左右の先鋒とし函輝を以て軍監と成し其兵すべて十余万騎年來造り時へたし戦艦五百艘を繕ひ別は兵糧の船三百艘九月下旬泉州の濠より順風は帆を開き東洋を過て揚子江の津金山の麓に艦を繋ぎ清華谿の流れ三里計を輿へ入本寨を搦へ

江口よ軍門を設け斥候船數多往來し十万の煙空をかける鳥も驚き避る勢ひ兵は當がたくぞ見へよけり此時大清順治帝も南京從へざるを征せんとて唐起龍を大將軍とし丁黑山噯喇を左右の先鋒と成し其勢十五万余騎數百艘の巨船をつらね是も同く揚子江の北岸に碇を下し鄭鴻達が寨を去事三十里堅固な水陣を布敵の消息を伺ひける時鄭鴻達諸將を集めて評議しけるは凡湖中の戦ひは火責は利あり家兄芝龍南蠻傳來の飛天噴筒火筒といふは數里隔し敵船を燒き甚利あり我此器を用ひて敵を盡せんと思ふいかよと云時監軍函輝すみ出て中けるは火攻は付ては某一つの計あり今十月の末はわたつて寒風烈しく北京の兵寒氣は苦しむべし今溪中の樵夫が賣炭は硫黃硝煙の火薬を塗價を賤くして敵船を賣しめ敵の兵士よるこんで是を買べしそのうち彼炭より火の起る時同時は噴筒火筒を射かけて責討なべ一撃に敵軍を斬崩せし鄭鴻達此計をひめて妙とて函輝を命じて行はしむ函輝彼炭賣の樵夫とも多くの金銀をあたへ炭毎は火薬をぬり付計を中合めて敵船へ遣はける其翌日十月廿八日彼樵夫とも函輝が陣を來り一船の炭悉く敵の舵手を買得ていと中函輝是を聞て大に喜び鄭鴻達と俱に合戦の用意をなし敵は火の起るを待居たり去程は北軍はいつしか馴ぬ船軍水陣は病を發し殊更中國の兵とも寒氣は破られ痲痛は腰を腦まし樵夫が商ふ一船の炭を買船毎は分ち寒を防んとす丁黑山噯喇

の鞭鞭の大將されば寒氣をいとのす却て是を快とす故に中國の兵士炭を買寒を避るを見て大笑ひいよしへより今に至る迄手を火より炙り而して後敵は向ふ兵を見ず中國の兵の弱さよと嘲り笑ふ唐起龍廷を聞て韃人の書を讀ざるより古へを去らば昔楚の大將手龜さる樂を買ふて水戦は大利を得たり然らば水寒尤寒を防ぐに良將の爲業なりとて士卒は命とて買たる炭を火に燒まむ然る炭の中より忽硫黄焰焔燃進り人の頭を壁遂帆火とびうつり上下の士卒あつてふためき火を防んとひしめく程は早二百余艘の船毎々悉く火もへ出火光波映し黒煙天を掩ふ鄭鴻遠の大小の艦船を賊南の岸に扣へけるが敵船は火の先爆々と立上ればまわや函輝が計こそ的確せり進めくと下知をなし數百の艦船を押し出せば折よし金山の小夜嵐頻り吹ふるせば南壁帆幾重も掛矢を射る如く北の岸に押し寄せ兼て用意せし慣筒火箭を風上より懸敷打放せば火殊の飛事急雨の如く北寨の惣陣忽火中へ沈みけるに恐しかりけるありさまに北軍の大將唐起龍丁黒山噓嗚等味方を下知し水陣に埋伏せし諸軍漿船も乗移り本寨の軍諸とも五里計引退り本船を燒る、事なかれ夜明なれば嚴く掛立敵兵を打散さんと自ら小船も取乘て諸方の手へ指揮をさし難なく大船數百艘四里余りも退けたり南軍の大將鄭芝豹の敵船近く船を押寄せ水寨の四門を思ふまゝに燒らへると本陣の船其間隔火勢及ばず再船を進て火薬を込んとし

ける所も早はのくと夜の明渡りぬ北將丁黒山の遙に鄭芝豹が船を見るよりわれおつちらして討取れと清軍百餘艘の船を並べて押寄せれば鄭彩函輝是を見て芝豹討せては叶ふまじと同く數日の軍船を押並べ射手を揃へてさんぐに射けるほどは兩方の船入まじり金鼓の音波も動じ矢叫びの聲風もまがへり北將丁黒山の猛勇並びなきものなれば一丈ばかりの鐵鞭を真向よさしかざし兩足は浮囊を着け船より下へ飛下り水上を行事平地の如く芝豹を目がけて討てかれば芝豹が船は逆櫓を立射手をならべて雨の如く矢を放ち次第に引取れば唐起龍も丁黒山があやまぢ有ん事を恐れ鐘を鳴らして軍を治め自ら小船を進め來り丁黒山を技乗敵に向ひ毒箭を射させけるに折しも濕雨さらりと降りきたり兩軍とも船を引わけ其日の軍の止みよけり

○ 得天妃 感一鴻遠 擒二反間

扱も北軍の大將軍唐起龍の函輝が計も中りて四門の水寨一時は燒拂われ大に恐れ朝暮の魚菜もも毒藥をや塗けらしと疑ひ十万の軍兵只粥を煮て飢を養ひぬ丁黒山やけるに敵の大將鄭遠が軍令を考るも原海賊の徒なれば水戦こそ術をも得たれ陸地へおびき上さふに鵝鷺を沙上へ追ふも同く味方しばらく山中に寨を引入れ二三ヶ月も屯なさば鴻遠が軍中糧乏しく戦ひを急ぎ賣來らば只一擧に擒よまべし唐起龍頭をよつて我苟も勅命を蒙り南征に向ひ僅に一戦の敗

愕き見苦敷業を退くべきや今既味方の將卒江上の進退、馴驅引の自在を得たり況や今十月の末、當て南東の風吹事なし敵將火責を用るとも却て己が船船を燒のみあらん何の恐る、事有んとて更引べき心なし諸軍皆是を聞てまよふ此論大の時、叶ひ地の理も應じけりと一同、是は隨ひ堅固の水陣を守りける唐龍龍のいかよもして敵業を打破んと種々計を工夫しけるが兎角北國の兵士水上の戦ひは練す十分の勇氣出がたければ俄に鐵治を命じて鉄の鎖を造らせ數千艘の船を繋ぎ浮梁の如く上へ板を並べ平地の合戦に等しく制へ別一ツの謀略を設け時の至るを待居ける此時南軍の敵船數多燒失ひ將士皆英氣を益し勇み悦ぶ事かぎりなし鄭鴻逵の幼より南海を横行し船中を住家とせし者なれば常々天妃を尊信し兵船も悉く菩薩棚を設け海茶を薦めて祭りを成せ或日天妃は供する樽飯事なきは二ツは破たり鴻逵是を見て快からず齊戒して諸事を慎む時門を守る大將曹岩錢彭兩人告て曰く搆船十餘艘溪澳に入て搆を販く事を請ふ門を開き通し中へさやと云鴻逵是を聞て其鹽船を疑し先一艘を引入れて點檢せよと下知すれば曹岩畏り搆船を近く招ち中へ此陣中元來鹽を乏し價を論せず一船の鹽を先此陣中へ買取へし時お搆官答て中ける我徒十餘艘の搆船同郷より出て等しく買を成す某の船のみ買盡し給ひ余の船とも某を恨み中へし希く十餘艘の船より一艘分の鹽をどかちて買

給ひ有難かるべしと中曹岩彌怪事と思ひて然らば汝等將軍の本陣は行て直其事を願べとて伴ひて本陣に至る搆商人等何の心もなく誘はれて本陣に至る此間、錢彭自業外は走り出數十艘の鹽船を改見るよ上への搆をうづ高く積で船底の西洋砲及び數百斤の火藥鉄砲火箭を夥數隠し入たり急ぎ此由を大將に告げれば鄭鴻逵大に喜び先天妃の感あり果してかゝる凶事有んとす神靈まよと尊むべしとて彼搆官を悉く殺切し數艘の船のこらず奪ひ今嘗かならず敵船寄來るべし用意をあして盛よせよとて芝豹鄭彩曹岩錢彭は四門を守らせ鴻逵自ら七萬の選兵を督し數百船の號船は鳥銃火箭をひししと搆へ敵の寄るるを行かけたり函輝は別よ三万余人の兵を領し二十里許上流の黃鶴灣といへる曲たる渚に埋伏し是も相圖を待て討出んとぞ圖りける

○鄭鴻逵鏖三北軍

兵の詭道なり謀計の密は善洩る時其害大あり北軍の大將軍唐起龍の鹽船の火藥敵を欺くよ足れりと獨喜び時の十一月初の八日戰艦は連環し十方の北兵金書したる招撫の大旗西北風は蹴し颯々たる金鼓の響き水神を驚す丁黒山の樓櫓より望遠鏡を以て敵の水寨を窺、鹽船の火の手を今やくと待居たり然る南の岸を去る事五六里ばかりとむぼへて小船一艘波は漂ひたり目

を凝して是を見れば、艦船の上は數ヶの首を斬鳥たり、唐起龍是を見て大に驚き、扱の謀斗敵は洩て、艦船の者等斬れたり、と覺ゆるを今へ進み戦ふとも、味方の勝利覺束なし、小寨へ歸りて守るべしと云けるを、丁黒山大さよ呼て曰く、敵我軍機を悟りたれば、とて何ほどの事は、有ん黒山の書戦は五萬の兵を殺せし、噓嘯が矢の下は又五萬騎射伏すべし、進め、と勇はとよ早敵樂ちかく押寄せたり、丁黒山の號船は手垂の舵手數十人を具し、精兵僅に百騎斗打乗り、黒煙を揚て敵陣へまつし、くらは衝て入一丈余りの書戦を震てさんく、悪戦すれば、南兵傷手、謀者數をしら、と鄭芝豹是を見て物々しき敵のふるまひかな、南閩の先鋒鄭芝豹の我也と、高聲に名乗わけ、號船を漕せ、偃月刀を真向まかさし、黒山は討てか、り、兩船の北戰平地の如く、北船舵を進むれば、南船逆櫓を押し、寄手の舶より射出す、毒箭の雨よりもしげく、南寨より放つ鳥銃の敵の降は異ならず、兩軍互に勇をふるひ、喚き叫んで戦ふ程は、勝敗更に分ず、いつ果んとも見へざりける、此時南軍の大將軍鄭鴻逵の髪を抜き、劔を抜き、菩薩棚の前は天妃を念じ、吾軍今正は風を逆ふ兵を進んと欲せれども、能はず伏し、願ひく、神よく東南の風を假し、此軍は利あらしめたまひ、他日楊子江中は天妃李菩薩の祠を創立し、永く春秋の祭りを怠るべからず、神若感應なくんば、鴻逵忽水底は身を投じ、菩薩の爲は怨敵と成べしと、紙灰酒を洗ぎ、丹誠を凝して祈ける時、不思議なるかな、鴻逵が一念神に通、下けん、忽西南の方より

一點の黒雲起り、一陣の怪風さつと吹來れば、鄭鴻逵大よるこび、そのや天妃の神風吹來るぞや、進めくと下知を成せば、南軍七万余人同時よとつと、関を作り、一面は船を推出す、風は彌強く、西南より吹まされ、北軍の艦船あしらひか、ねて見へたる所は、黃鶴灣は扣へたる、函輝が三方の軍兵、天風は眞帆を揚、一文字は推來る、唐起龍は是を見て、前後に敵を受けて、川ふまじ引退んと制する所は、神風荒く吹來り、白波高く打て、船を掩ふ、元來北軍の艦船は鉄の鎖を以て繋ぎたれば、引とも自由ならず、前後の南軍はしと、取圍鉄砲を並べて打す、くむるは北軍暴風は逆ひ、大海は巻れて、前後を顧るいと、まかく水烟肌は透り、手足氷へて、弓を引とも矢離す、矢砲は討れ、命を落す者數を知らず、函輝兵士は下知して、風上は火箭を放つ、事電の閃く如く、忽大小の帆は火もへ付風は任せ、燃上れば、上下の軍士防ぎ、戦ふべき、手術を失ひ、只北岸へ船を寄んと、數千挺の櫓を立、推切んとあせる所は、山の如く成大濤、北軍の船を打踰ると見へけるが、哀むべし、唐起龍噓嘯の兩大將十一万の軍兵、諸とも千仞の水底は沈み、魚鱈の腹は葬りける、丁黒山の號船は乗りて戦ひしが、此ありさまを見て、大に驚き、今かな、いじと急は北岸は船を寄、五千余人の殘兵を集め、立足もなく、北軍を見て、敗北を鄭鴻逵の北軍を悉く打滅し、凱歌を唱へて、兵船を泉州へ返し、此旨南朝へ訴ければ、弘光帝御感斜ならず、鄭鴻逵を靖南伯と封じ、給ひ、其余將卒厚く恩賞を賜ひ、彌朝廷の守護怠る事有べか

らずと詔なしたまへば鄭家の一族謹で領承し恩を謝して退きけり

○西北兩軍討南京

鄭鴻逵北軍の大軍を揚子江に壅らしける後、南京の弘光帝殊に心を緩め給ひいつしか女樂を耽り海に荒み去のみならず男色を寵愛し美童としいへば乞兒といへとも宮中召れ幸を蒙るされば朝廷の政の悉く馬士英阮大誠劉良佐などと佞姦の徒心の儘に執行ひ大啓の魏忠賢も猶勝れりされば恢復を志し忠義も勇む諸臣の悉く官を捨て舊里に退き朝廷の唯暗夜の如くたのもしげも動靜あり爰は先帝の忠臣左良玉、吳三桂と俱に張獻忠を滅して後心ならずも清朝の指揮に順ひ西安伯に封せられ山西を治めけるが南京の弘光帝恢復の志ありて鄭芝龍等と事を議り給ふよし聞へければ太もよるこび自ら臣と稱し數度北軍を破るべき計策を獻し奉れと姦臣馬士英等是を拒て事聞れず是に依て左良玉大に怒り上疏して奏しけるに君明朝の恢復を圖んと欲し給ひ須賢を擧て佞を退け民を愛し仁を尊み給ふべし今の寵臣馬士英阮大誠劉良左が知る姦佞の輩を磔よし民の望に隨ひ給へ臣が言を納給はず馬士英が輩朝政を亂さば臣天下の爲に義兵を揚げ逆賊を殺し別君を建て北京を征し先帝の志を繼ぎ万民の塗炭を救ふべしと奏しければ弘光帝馬士英等が勢ひも恐れ給ひけるよや又の酒色も荒み事を怠り給ひけ

ん唯其儘に打過ける是に依て左良玉南京の賊臣を誅せると号し練兵三万の沙船の輕きを取乘り湖水の流れを南より下り白鷺灘といふ所を水寨を下し南軍を引入一戦に盛はなさんと其勢ひ頗盛也南京の朝廷大に驚き馬士英等詮議して黃得功を都督大將軍とし方國安を惣兵將軍と成し八方の軍勢を率ひて左良玉を討しむ然も北京より再び豫王を大將とし其勢三十余万徐州揚州を踰り南京に到るよし頻に風聞し南京城の騷動大方ならず史可法朝も出て奏しけるに左良玉が兵急に至るといへとも恐るゝも足らば北軍一たび貴來らば南京の患ひは是より大あるべし弘光帝の曰く諸方の急を告る事甚切なり卿よく是を料て左良玉急あらば左良玉を討北兵急ならば北兵を防ぎ汝が凱歌を奏するを俟と宣ふ史可法大に歎き君の詞何を容易なるや吾凱歌を唱へて君を見ん事覺束なしと涙を流し軍兵十方を引卒し揚州の城を趣きける

○左良玉戰三白鷺灘

去程に黃得功方國安の兩將の八方の軍勢を督し教千の艦艦を湖流に浮め流よさかのぼりて行程より日一行事纔に三十里早兵糧盡さいまた一戦も及ばざるに軍勢大半に落失たり左良玉此事を傳へ聞其子左良棟といふ大力無双の勇將を大將と成し其勢すくづつて二萬余人暗夜に流れを推下り南軍の水寨を取かこみ大炮を放ち火箭を射かけ喚き叫んで責たりける南軍の兩將あつてふた

めきまの左良玉が夜討せるに只射手を備へて射とれやと下知をなし火の光を目當とし差詰引詰
 さんくもこそ射たりける左良玉の兼て是を期したれば船の表は藁を積上げ其陰は軍士を伏た
 れば更は傷者もなし大將左夢庚の偃月刀を提げ精兵十騎斗小船は取乗り敵近く忍びより大將
 を討んと伺ひけるが其時南京の總兵方國安五方旗の下は立て士卒を下知し矢を射さしむ左夢庚
 是を見て其船もつと飛乗り匹夫吾刀を受けて黄泉は趣けよと偃月刀を揚て只一刀は斬下せば南軍
 大將を討れ何か暫しもたまるべき我先よと船を飛ばさんくも敗北す此時左良玉の本寨あり
 て樓船は上り遙は合戦の跡を伺ひしは石火砲の音次第は遠く聞ゆるの味方勝は乗りしと覺ゆる
 を進めくど下知をなし數百艘の早船楫を鳴し揉もんで推よせしは敵船四方八面はさん
 らんし或は流れは随ひ逃るもあり又は陸より走もり右往左往は敗北す左良玉大夢庚を賞し
 凱歌を上げて軍勢をせとめ本寨へこそ歸りける南京の劉孔昭阮大誠劉良佐等後詰として明月庵と
 いふ所へ船をつらね水寨を市けるが黃得功が百騎斗の兵を引てさんくもに成て逃來左良玉が
 銳氣は當りがたく方國安の討死し軍兵悉く落失からふして逃たりと云諸卿是を聞て大は驚き
 扱いかよして合戦を催し左良玉を退くべきと評議さまく成けるは阮大誠はけるは元來是等の
 敵を殲んよは鄭芝龍は如者なし然れども此芝龍馬士英と睦ましからず互は思ひ退んと是よ

依て此度左良玉と北京の兩寇等く至るといふとも鄭芝龍も兵を出さず朝廷も又芝龍を召す
 事なし今左良玉が勢ひを見るは鄭芝龍あらで斬断むべき者なし我偽て詔りを作り急は鄭芝
 龍を此所は招き一舉は大功を成さんといかよとすは諸將皆是は同じ卒は勅使を仕立詔を偽
 り前関の安平城へを遣しける

○鄭芝龍説左良玉

安南伯鄭芝龍の其弟鄭鴻逵揚子江の大功より清南伯の封を受兄弟其譽世は高く人譽てうらや
 みける然るに此頃左良玉亂を起し兵を集めて南は下れば朝廷是が爲は軍を出さる、事を聞大は
 歎息し此朝廷も又久しからせして汲びぬべし北京の大敵既お至るの時、隣んで私の争ひは軍兵
 を失へん事吾居ながら是を見るは忍びず自ら往て左良玉を諭し戦ひを止むべしとて裨將函輝と
 五千余騎の選兵を引卒し安平城を立て先南京城に至り弘光帝は奏聞して左良玉を説て合戦を止
 むべきとやければ帝馬士英を召て議り給ふは士英も此節兵糧の運送は惱み其上方國安の討れ官
 軍多く落失せ討さへまじし時なれば芝龍が旨尤へと同トければ帝則ち芝龍を召て其請を
 任せ給ふ鄭芝龍直ち船を乗り采石江に至り官軍の水寨は來る此時阮大誠等の先は遣しぬる偽
 りの詔より鄭芝龍軍を引て來ると思ひ大は喜び謝して曰く帝先は詔を賜ふより將軍勞を

辭せきして爰に至る正は天兵の降るが如し水塞元來糧乏しく左良玉が軍威は碎かる將軍力を盡して功を建たば其名万世は高く鳴らん鄭芝龍是を聞て卿等何を言て讖れをみせや某爰は來るの帝の勅命を受けて援ひを成すはあらず朝廷の大臣詔りを偽るは魏忠賢も初れり卿等も又忠賢は習ひんとする歟左良玉は先朝の功臣誰か是を是非せんや芝龍今朝廷は請ふて利害を説て集む有め軍戰をとめんとぞ旁怪み給ふとなかれとて函輝等の兵を船に殘し十騎計にて采石江の左良玉が樂に至り名を通じて謁を乞ふ此時左良玉傷寒を病て樂中は臥す其子左夢庚出て是を向へ賓主禮終り坐定て芝龍やけるは某万里を遠しとせず爰は來れるは天下の安危を議せんと言ふ左將軍何を自ら見へざるや夢庚が曰く父此こる寒は傷られたつ事能はず此故は兒を以て款待しむ老將軍諒給ふ事なかれとて酒肴を設けて宴を成せ芝龍夢庚と俱に飲り酔たり枕を請てうまく寢入たり左良玉是を聞て鄭芝龍の當世の英雄吾いよしへの知己あり今爰は來るは必我を宥て軍を止しめんためあるべし我何ぞ是を避ん鄭老爺眠りさめあば病を扶けて拜すべし時芝龍猶よく寢て鄭の聲雷の如し良玉が手下の兵卒芝龍が不敵なる振舞を見て驚嘆せずと云者あし二時計有て芝龍漸ねふり醒たり左夢庚謹て曰父病を扶けて將軍を見へん事を希ふ芝龍大に喜び夢庚を俱に左良玉が病床に至り互に手を取て舊情を語り先朝の事及んで且悲且喜び

鄭芝龍が曰く今國敵大清の兵正は南より下んとぞ將軍は先朝の忠臣義を唱へて北兵を討べきは何ぞ私の宿意は依て蠅牛の戦ひを成そや馬士英等の姦人朝は變るとも日あらしめて滅ぶべし馬氏等が害は小く清國の災は大きあり大行の細謹を願ひ先大患の北敵を亡して後心を合せて魏侯の姦人を退けんは何の難き事是有ん左良玉兩眼より涙落る事殊の如し君が言甚善然れども弘光帝の詠復の君しあらず別の主を建て事を圖るべし我今病重く死せん事旦夕はありまると國の爲は忠を盡し給へとて又其子夢庚を命じて鄭芝龍を拜せしめ我死せば父の如く敬ひ仕へよ鄭將軍も子の如く恵み給へとて其後いよく病急は迫り言能はず夢庚歎きかなじみ藥石交進ひれども其驗なく賜は病床に死す鄭芝龍は夢庚が喪を扶けて暫く湖廣に滯留せり

○史可法 奪兵糧

此時大清の豫王の安大人吾金王等の強將と俱に其兵二十餘萬人北京を發し毫河より淮海を渡るは皆清の徳は服し敢て支へ禦の兵なく順治二年四月廿二日揚州に至り史可法が籠りたる鎮江城を圍んとす抑鎮江といへるは揚子江の南ありて東は常州府の界に至る事七十五里にして浙江に交り西は應天府の句容縣の境に至りて四十五里群蠻競秀万水争流る寔は南中緊要の地なり南京の史可法其勢三萬餘騎にて鎮江に籠りけるが清の大軍向ふを見て早馬を馳て援兵を求

れども南京よりのことさへ軍兵乏しきよ不長玉を防ん爲大軍さ向ひしかば鎮江を救ふべき兵な
く詮議のみも數日を経けるぞうたてかりし事ども也史可法の麾下の大將陳雅買張郛呂太方韓
元郁等の諸將を集め籠めて守ける清の大軍揚州の地よ入といへとも猥り兵を進めず諸將を
撫して降らしめんとす且此鎮江城兵糧乏しさを知るが故に戦はずして味方の飢るを待と見へ
たり味方計を定め海上に浮みたる敵の兵糧を奪取らば味方は得有て敵は損わり永く籠城して
支へざる敵自ら窮るべし諸將皆此計略も同じ只風強き夜よまざれて敵を焼んど其用意なきり也
或夜史可法權上つて天文を見るに北斗の光り燦然として衆星の動揺するを見る故に其夜大風
有ん事をしり陳雅賀蘭兩將を湯餅買買人よ出立せ二艘の船に舵手一人ツ、を乗せ數多の火薬を
船底に隠し碇方より船を漕出しぬ扱清朝の粮米運漕使羅國輝といふ者數艘の粮船を岸近く繫ぎ
用心堅固に守りけるが彼湯餅を商ふ船近々と漕よせ聲高く唱へ賣り船頭水主滯留の憂を忘れん
ど銘々粥を買餅を沽酒を飲で興よ入賀蘭兼て酒の中へ蒙汗藥を和たれば數百人の船頭とも醉倒
れて手足痿痺を流して言いふ事能はず賀蘭陳雅を見て背並べたる蓬よ火をかけ相圖の火炮
一聲音かす程こそあれかねて用意したる呂太方韓元郁五千騎の射手の數百艘の號船も備へ江
土より関を作り矢のごとく漕よせ火箭弩を雨の如く射かけさんくは斬入たり此時卒よ大



牛金星伏兵於幕中殺李嚴兄弟

風起り火の盛んは燃上り苦を飛し楫を折船中大に驚きすのや敵のよせたるを防ぎ戦へと罵れども船頭亦主皆疲薬も手足軟敢て働く事能はず大將羅國輝此体を見て敵の計略は落たるを防げよせげと呼びつて手下の兵も下知して嚴しく戦ふといへ共敵の大勢況や巧し事あれば愛は願ひれ彼所は隠れ船中大半切倒し思ふ儘は兵糧を掠め取次第は船を退けたるされとも西屋のいよ強く吹来りて鎮江城へ歸る事能はず心なきらすも江上は碇をふるし漂泊として止まらざる清の大將軍豫王は江上にて兵糧をうべはれしを事ともせず安大人吾金王の兩先鋒と號して白く運糧使敵の計は中り糧を失ふといへ共又不日は淮南より運び來れば思とするも足らぬ我國るは鎮江の城兵三方の過べからず其三分か一の江上に在て風の爲は漂ふ此處は乘して急ぎ圍み責罰は一舉に鎮江を陥べし安大人答て曰く王の計甚よしといへ共鼠咬猫といへり城兵死を極めて戦ひ味方の士卒捕亡すべし只緩々と江上及び城外を遠巻して糧の路を斷切らば城中自ら亂るべし豫王是を然りとして則安大人は五万騎を與へ兵船を揃へて江上の兵を遮り吾金王は八万余人を卒し江城の前は屯し豫王自ら七万の勢を従へ太祥山といへる山の麓に陣を取城中の音信を伺ひけり

○鎮江落城

鎮江の城中より兵卒を出し柴棘を刈らせける清の大將吾金王是を捕へて金銀を多く與へ你等城中
 中より歸り今夜城門は火をかけ叛逆人有と呼り城中を騒がすべし事と、のふの上へ猶重く恩賞
 すべし草刈の士卒金銀を得て大に歡び許諾して退きける吾金王 豫め人馬を點檢し城中の變を
 伺ひける其夜亥の刻斗は城の東門は火發り叛逆人よを呼ひる程も上下騒動する事かぎりなし史
 可法自ら城中を下知し是正しく雜兵を内應して火をかけたるならん鳴りを静めて火を救
 へやと罵る所も早吾金王八万余騎闘を作つて四面より責かかれ雜兵士卒あつてふためき城門
 を開き甲を脱戈を捨我先も出て降參す清の大軍雲の如く襲ひ來れば城中手足の置所を忘れ周章
 驚る物なし史可法大に怒り亂世は生れて國家の難は死するを誰か是を辭せんやと鉄錮の蓋は錦
 の袍を着し玉帶を高く結び青眼は打乗り右に張鄂左に李郭の勇將あり健快いづくも有と呼べ
 つて眞先は馬を出せば清の先鋒吾金王立豹の鉄盔は虎の小斑の甲を着し勇武の神將數千人左右
 前後を擁み陣前も馬を出し敗將早く降れと口々罵れば張鄂大に怒り鎗を舉て突應り清の軍兵
 七八十人を突倒し勇を震ふて戦へとも終は多勢の清軍は取圍れ斬死はそしなりける史可法は吾
 金王と勝負を決せん迎前は衝後も當り一方の圍みを破り敵の中軍を目がけ韋駄天の如く馳來る
 を清軍此勇は破られしと毒箭を射事雨の如し哀むべし史可法身は立箭雲毛の如く馬より落せ勦

從經は首を取られぬ大將如かくの如くなれば裨將李郭を始めとし城中の兵とく降人こそ成
 りたりける城既破れければ豫王自ら城中も入て百姓を安んじ貢税を免し金銀を與へ懐けぬれ
 ば揚州の百姓樂しみ喜び皆髮を剃て万歳を唱へける海上はありける陳烈賀蘭も安大人は就て降
 參し同く是も髮を剃れば豫王大に歡び降參の大將を悉く原官は居らしめ海利生に屬して鎮江
 城を守らしむ

○ 清豫王 陷南京

去程は東南の都は阮大誠劉孔昭劉良佐歸京して奏しけるは左良玉天の攻免れを熱病を煩はて
 既に死ぬはよつて軍兵おのづから湖西へ去る鄭芝龍 徒は遊説を興すのみ何の功をか成し得
 たるや弘光帝是を聞て阮大誠を靖國公に封し劉孔昭劉良佐も位階を加ふ然るは五月の始め清
 兵既は揚州を陥り史可法討死せしよし告來れば馬士英大に驚き帝都の軍勢を點檢するは日々
 は落失て纒は五千余騎は過さりけりされば都の守もとらるもとなしとて弘光帝は浙江の方へ
 遷り給ふべき旨宣ふはより馬士英贛州の兵一千二百をめてして衛護せしむ此時端午の節なれば騒
 敷中も百官悉く朝賀すれとも帝は係る折とも云はず宮中も歌舞妓を成して朝は臨み給ふ事
 なし鄭芝龍は此時五千の選兵を以て系口を固め有しが弘光帝の淫樂を聞嘆息し左良玉が詞想ひ

合せりといひて急ぎ帆を揚南閩へ歸る五月八日清の大軍船を編燈數千をつらね鎮江を渡り南
 京の城に押來る抑南京の地の南北二十五里東西九十六里十三の門を開く外城の山より江に
 臨み四方各一百八十里門を開く事十六其中央は皇城あり七所の學校三所の書院太祖武帝創
 業有し都なりかゝる廣大の京城守る官軍僅に七万百姓を見て驚き悲む事限りなし同十日辰
 の刻白日俄に暗く曇り大風砂を飛し石を走せ暴雨盆を覆すが如く其中は清の大軍押來れり弘光
 帝は猶此時迄李園の中は女樂をなし酒宴して有けるは清兵迫りぬと云ふ驚き聖駕を促し落行給
 ふ九嬪歎き叫び御衣はすがり別れを惜み奉る形勢推察れて哀れなり馬士英太后を輿に乗せ監兵
 を守らせ浙の地へ落し參らすれば宮女の輩我先よと亂走し若干の宮嬪寂として人籍の聞ゆる
 事あり十二日弘光帝太平府に至り給ひ阮大誠朱大典黃得功來り見へて府城に入奉らんとそ城
 生黃斌卿先は逃去居民聖駕を拒て入參らせす十三日よは蕪湖に至り十四日浙の地に至り給ふ此
 日清の豫王大軍を引て南京城に押來る一人も支ゆる者なく皆門を開ひて駕を迎ふ豫王大は喜
 び京中の百官を集め朝見を受け御酒を設けて宴をなし給ふに百官皆方歲を呼べり去程は弘光帝
 は隨ひ參らざる官人勢ひの止べからざるを見て思ひくは散じける中は劉孔昭は浙の江に入劉
 澤清は海に入劉良佐は清に下れり劉良佐豫王の命を受けて却て聖駕を追ひ十五日蕪湖の地にて黃

得功を見て俱に降参せん事をすむ黃得功怒て曰く吾儘東林の文官よく義を知る何ぞ二君
 は仕へて恥を後世に残さん劉良佐是を惡み弩を伏せ黃得功が咽を射る得功生べからざるを知
 つて自ら首刎て死す劉良佐弘光帝を捕へ奉り清朝に參り豫王是を北京に送りて其終りを知る者
 なじかくの如く南京陥ぬれば忠臣義士自ら縊れ溺れ死する者數を知らず爰は弘光帝の變遷濁
 小瑜といふものあり舊白川橋に住る乞食の兒なり色を以て帝の幸を得たり帝清朝の擒を成
 給ふと聞百川橋の欄干に一絶の詩を題して河中身を投じて空しく成りぬ其詩は曰く

三百年來養土朝

如何文武盡皆逃

綱常留在昇日院

乞丐羞存命一條

○唐王即三位福州

爰は明の高祖皇帝九世の孫は唐王と申君おひしましける元南陽に封せられ給ひしか幼少にして
 父は後と親族の爲に掠られさま／＼漂流して高牆といふ地は止り給ひしが弘光帝の時召出され
 杭州の瀧王と申人の許に居給ひしを鄭芝龍南閩の諸臣と議て終に福州天興府は唐王を冊す皇帝
 の位に即奉る爰はおひて鄭芝龍を平國侯に封じ鄭鴻逵を定國侯に封じ鄭芝豹を澄海伯に鄭彩を
 水勝伯に封じ給ふ兄弟四人等しく侯伯の爵を受る事實は勇々敷かりけるありさまに其外六部九

卿の官を定め隆武元年と改元ある隆武の帝鄭芝龍が忠肝を歡喜給ふ事他も越たり芝龍が子鄭森の時年正は二十歳身の尺六尺八寸ちからいよく大象を挫くことよ日本の刀を兩手よつかひ中國は類なき猛勇と聞き召れ悉くも宮中よて元服せしめ成功と字し帝の御氏を賜朱成功と呼給ふ明國の姓を賜ふより臣民成功を尊んで國姓爺と稱しける國姓爺常は帝の左右よ侍し帝の御心の向く事へ成功よく是を知り父芝龍よ告て事を執行し程よ都ての事鄭芝龍が一言を異議する者もく朝廷の政事皆鄭芝龍よ定めぬ或日宮中よて麾下の諸大將を集め宴をひらき各武を習練し馬を馳鎗法を論ず此時國姓爺日本流の兩刀を遣ふ敢て敵する者なし此折しも遙向ふの野邊より大なる牛の車を離れ角を振立一參よ此方へ走り來る函輝見るより庭よ飛下り馳向ふて彼牛の角をしつかと捕へ押かへさんとす牛の怒つてかけ倒んと猛威をあらわし足をそげなて此文へ推まを剛勇の函輝金剛力を出しるいやくと推はどに半丁斗あどすさうし終よ前足を折て地よ臥たり人々是を見て一同よ聲を上げ其勇力を感しける扱も是を始として我もくと力をたくらべ永き春の日を戯れ遊ぶ萬禮といふ者も長直丈あまりの大石を輕くと引上げ宙よ掲げて礮よ撃く發天祐の百斤の弓よ矢をつがひ四丁斗向ふなる桐の枝を的とし是を射るよあやまたず射落したり張英の門外より白馬よ乗りしづくと庭上を輪けるが一鞭くれて客門へ馳行き門の梁

よ手をかけ鎧よて馬の腹をしかとしめ馬を中よ釣上げしに數希なる勇力も國姓爺の前よ萬禮が持來し大石の前よ立まり日本の骨頭を見よやと拳を握り之を打よ大石二ツよ破たりける其外勇力の覺有將卒我もくと武藝をたくらべ力を斷ふ實よ一騎當千の勇士とも哉と見る者舌をふるおしける去程よ大清北京の朝廷よ鄭芝龍明の番臣等と俱よ唐王を冊き福建よ都を立即位せしめけるよし聞へけれへ重て詔を下して貝勒王吾金王海利王等よ三十萬の兵を給ひ是を征伐なましめ給ふ貝勒王謹て命を領し先浙江道よ入諸州を撫安んじ抗州迄軍を進む早く此中福州の都へ聞へけれへ群臣皆奏しけるよ北軍今抗州の地を犯し掠め隨つて當朝よ寇をささんとす今湖南の何騰蛟十萬の兵をわづめ帝の軍を扶んとす此時を失はず都城の兵を併せ帝自ら北を征し給ひ一舉よ清の大軍を挫くべしと進め奉れよ隆武帝實ももと聞き召れ鄭芝龍をめしを職し給ふよ鄭芝龍奏しけるよ今北清の動靜を見るよ向ふ所敵なく責れよ取戦へよ勝況や仁を以て士を撫慰みを以て民を懷く誠よ是征し難きの國患之陛下登極給いていまだ軍民の心定らざる何を以て遠く軍を出し大敵を征すべき只よるしく仁を行ひ能を治めて時の至るを待給ふべし自ら恢復の時節至るべしとて北征よとめ奉まつる此時福建の都下よ流行童謠有曰く清行如蟹曷遅其來と唱ふ是安からざる妖言ありとて兵部尙書何楷兵部給事劉中藻等語りて曰く此頃浙江

の東よおひて明朝の舊臣等神宗帝の御孫魯王を冊立て監國王となし近日帝位は登し奉つらんと計るよし聞り鄭芝龍利害を奏して北征を止め密魯王と志を通ずると知られたり元來芝龍が一族君を挟み已れが權を恣にし全く明朝を恢復するの心なし渠舊海寇の賤しきものあるを前朝めして招撫使となし當朝もまた渠が餌を假り給ふを以て居ながら相位を掠め黃口の小兒は國姓を賜ふなんと前代未聞ざる事とも我徒苟も六部の臣として渠が指揮は隨ん事口惜き次等之早く歸田を賦ふよ如じとて共其間を去て家は歸る隆武帝大驚き頓て鄭芝龍を召れ諸臣汝が軍を出さざるを恨み何措劉中藻が徒既國を去れり是朝廷の欠し計策はあらしと宣ふ鄭芝龍奏して帝何を事を急成し給ふや大器の晚成といはずや況や今都城の内兵糧乏しく何を以て大軍を出すべきとさましく諫め奉る折しも湖南の何騰蛟使を以て奏しけるハ早く聖駕を迎儀兵を起し杭州の北兵を退くべしとや程は鄭芝龍が諫言空しく成りいよく軍勢福州を出て北征有べきと定りける

○隆武帝親征

隆武元年冬十一月詔を下して鄭鴻逵を左先鋒と成し鄭彩を右先鋒と成し福州の西の郊外は禮を築き吉日を擇み推轂の禮を行ひ啓行の賀を成し給ふ此時大風俄は起り旗を吹折燭を滅す

三軍是を見て色を失ひ今度の征伐はかゞしからずと皆眉をひとめける十二月十六日聖駕福州を發し二十六日建寧は止り給ふ翌丙戌の年正月元日建寧の地にて群臣朝賀しけるは天色暗くして人の面を分ちがたし暫くして復降事甚しく兵大さ斗の如し鄭芝龍奏してやけるハ天の時未至らば災異の顯はる、事頻りなれば聖駕をかへし福建を守り給へと諫め奉れと群臣皆今駕をかへし軍を留め給ハ恐らくハ民の望みを失ふべしと争ひ奏しけるは終は進んで劍津に至り給ふ此時浙江の魯王陣謙を使として隆武帝は書を奉る隆武帝其書を啓き見給ふは皇叔父と記して陛下と稱せず帝大は逆隣有て陣謙を獄下し給ふ此陣謙弘光の朝は仕へ鄭芝龍と好み深し先は弘光帝芝龍を召さる、時陣謙を使として芝龍を南安伯と封し給ふ芝龍謹で詔書を讀み南安伯を誤て安南伯と記したり陣謙其時中けるハ南安を安南と記せしは是書記の誤なり然れども論言ハ汗の如し則鄭將軍の僥倖といへり是よよつて芝龍安南伯と封せらる夫安南ハ一道の名南安ハ僅一邑之眞一宇の顛倒して地の大小天地懸隔之是より鄭芝龍陣謙相睦き事親族の如しされば今陣謙が獄下りしを見て芝龍大驚きいかよもして救ひ出さへやとさましく奏問されども群臣皆奏して云芝龍が心頼むべからず陣謙と交り厚し故は謙と計て魯王は志を通ず他日必内患を生ずべしはやく陣謙を殺して後の災ひを除き給へと云隆武帝是を信じたまひ俄は陣謙を

引出して斬罪し給ふ鄭芝龍是を聞て周章ふためき市に至り斬手を停て曰く爾しばらく陳謙を斬
 事なかれ我今帝見へて赦免を希ひ來るべしとて 即朝又匿きくれ命を請ふて止む助命の
 後官を削り民となさんと云隆武帝芝龍が請ふは任せ給ふの旨勅許し給ひながら兎角の物語は間
 を延し密勅を下して陳謙を斬せ給ふ芝龍の救ひ得たりと歡び朝を出て市に至ればや陳謙が首
 の覆られたり爰ふおいて鄭芝龍父子帝を大に恨み奉り且倭人の讒言を納給ふを嘆き其心更樂
 ます時泉州城は海賊來り責よし急を告る事櫛の齒を引が如し國姓爺父に向てやけるは海賊弄
 境を犯す捨置さば我々が根本を失ふべし某向ふて防禦べしとて即時は手勢引くし船を飛して
 安平城へ歸ける是よよつて鄭芝龍も坂を棒てやけるは今海寇臣が泉州安平城を犯す夫三關の兵
 糧悉く臣是を出ま然らば臣が家滅る時國家の患是より大なるはあし征せずんば有べからずと
 て是も兵を引て本區よ去る隆武帝大に驚き給ひ急使を以て芝龍を止め朕も共征すべしと中
 給ふは其河口に至る時芝龍が船は早く順風は帆を卷て安平さして走らせける鄭芝龍父子かくの
 如くなれば諸軍皆力を失ひ或病と稱し或糧盡たりと唱へ我もくと本國へ軍をかへせば營
 中寂として人跡なしこの時清の大軍帥貝勒王の吳金王海利玉等と數十万の大軍を引卒し浙東よ
 魯王を擒と成し弘光の朝は仕へし馬士英阮大誠が徒多く魯王の下は有けるも悉く清朝は降

參し貝勒王が大軍彼阮大誠を郷導とし仙霞關よ押入隆武帝は追らんとす此山の麓は關帝の社わ
 り其前よ至つて阮大誠が乘たる馬忽ちおとろき高く飛で主を地に落し阮大誠血を吐事三升斗り
 卒然と問へ死たり心なき鞭の雜兵も阮大誠が不臣なるを關帝惡み給ひて蹴殺し給ふ物ならん
 と恐れざる者もなし浦城を護る大將鄭為紅と云者清の大軍を恐れ門を閉て義を守るされとも
 城中の百姓亂れ散じ清軍を引て入ららしむ貝勒王遂は爲紅を生捕髪を剃り降參せよと進む爲
 紅聲を屬まし國は負ひ不忠之先祖を取かしむるは不孝之忠孝ともは虧かば生たりとも何の益か
 有ん只速に斬べしとて遂は屈す刑は着貝勒王いろく大軍を馳て帝を追事急之浦城の郊外よ
 て隆武帝の輿丁一人を生捕たり 懷は馬士英が隆武帝を呈たる内通の書を持たり貝勒王怒つて
 馬士英が首を斬て其所よ梟たりける是なん不忠不義の姦人として軍民唾吐して見る事市の如し

○隆武帝崩三汀州

同年八月廿一日の事ししが北軍饒ひ來る事急之と聞ければ隆武帝皇后諸とも御馬よ召れ百官を
 引く一頼州の方へ落させ給ふ貝勒王は衢州より獨關に至り延平を圍み責る事甚急なり知府王士
 和僅は五千余騎の兵を四方に配し嚴敷防ぎ戦へとも目の余る清の大軍支へ禦くべからざるを知
 り衣冠を正し壁上は辭世を題せ

雄風烈々搗虚城

正氣從來履險貞

一月延平甘殉難

狐忠千載有誰明

書し終て從容と自ら縊れ死す。叔も隆武帝の皇后と俱習はせ給ひぬ。旅の空方聖慮に叶はされ
 べ道へか行せ給はず。順昌といふ所に着せ給ふ。北軍早劔津迄追來るよしありた。しく騒さぬ
 る。御馬よかき。のせ道を急ぐ。官軍皆落失て。只朱繼祚黃鳴俊等のみ従ひ參らするを哀れ。もい
 たわしけれ。廿七日。汀州に至り。翌日。贛州の府城に着ぬ。とて一日休め給ひける。御衣も露
 霜ぬれ。そぼちけれ。黃鳴俊御衣を脱きて。日は曬ける。日月龍鳳を縫せし。類なくも見咎め
 らる。爰に先に刑に逢ひたる陳謙が子陳慎といふ者あり。父の罪を承て。刑せられたるを憤り。數
 十騎の兵を帥ひ。帝を追て。父の仇を報せんと。汀州に來りける。が彼龍鳳の御衣の乾たるを見て。聖駕
 爰に留り有を知り。城門を叩て。帝の扈躡を僞り直ち。行宮に入んと。熊緯と云者。敵兵なる事を
 知り。劔を抜て。防ぎ。張致遠といふ者。隆武帝の御前に至り。跪き奏ける。事既急。逼れり
 臣帝の衰衣を着し。聖體に代り。爰て死すべし。其間。朱繼祚黃鳴俊兩人をくし。間道より遁れさせ
 給へや。と奏す。帝御涙を流し。給ひ。朕何ぞ死を辭せん。卿心を焦す事勿れ。と宣ふ。致遠聲を高くし。こ
 云。甲斐なき聖慮。よもまします。の哉。昔漢の高祖が楚兵に圍れ。既し事急。しを臣下紀信高祖に代

り大難の下に死し。遂に漢高四百年の基を開き。給へり。いざ。せ給へ。とて。致遠自ら帝の衰衣を着流
 し。長刃振て。敵に向ふ。陳慎是を見て。隆武帝を思ひ。弓は失つが。ひ一矢。射殺し。首を取て。さし上た
 り。熊緯も手痛く。戦ひしが。續く味方も有され。陳慎が爲に。斬れたり。帝の皇后と俱。黃鳴俊朱繼
 祚が介抱。よて。漸に汀州を落の。贛州の府に入んと。し給ひし。を清の大軍潮の如く。追來り。終に安
 大人が手。帝を始め。皇后も。残らず。擒れさせ。給ひける。貝勒王大。歡び。福州の都。至り。痛且しくも
 隆武帝の皇后二方を市。引出して。斬奉る。福建の人民。歎き。悲む。事限りなし。貝勒王朱繼祚黃鳴俊が忠
 義を感。五品の位を以て。招くといへ。とも。病を託して。遠く遁る。其外曹學詮馬思理。さんとを始め。と
 し。死す。殉る者。少から。或は縊れ。或は河中に。身を投。世の哀を。ととめける。

○貝勒王 定計 捕鄭芝龍

清の大軍帥貝勒王の福建の都に入。大將李成棟韓固山の兩人を以て。興州邵州汀州漳州等の國々を
 制せしむる。風は隙で。來り降る。唯泉州のみ鄭芝龍が一家安平城を保ち守り。武威盛ん。よして。敢て
 屈せず。芝龍元來家富み。兵糧山の如く。貯へ。數十艘の戰艦。城下。浮め。十余万の練兵。よと令を守
 り。眞に動し難き。あり。さま。あり。隆武帝若芝龍が謀を用ひ。固く福延を守り。給ひ。かく容易に喪ふ
 まら。を況や。聖體市。斬れさせ。給ふ。事先代未聞の國難なり。此時貝勒王泉州の地を宥招く。よ徳化

といふ所の知縣陣元青のしめて降旗を立しより百姓多く髪を剃清朝の順と泉州の官員郭必昌といふ者書より鄭芝龍と交深し貝勒王必昌を以て使とし鄭芝龍を王と封すへり詔書を持せ且利害を説て招んと其詔は曰く

朕自承鴻業天下無不應諾歸順然閩越一省自古有豪傑潛聚其中朕未及三誥策其綬朕所以深恨也茲聞其名鄭芝龍武略斌全機業久積收二撲海邊草寇今已安堵民得樂業經生甚稱朕意也開三封三省王願欲見面念其鴻業課績朕親宣宣下趣殿謝恩拜皇帝上皇

芝龍見終りて其詔旨の深切なる郭必昌が説所皆利にして害なしといへとも心疑ふて更に決せず況や清の大將韓固山大軍を卒て安中よ迫れり是等を以ていかん説と信とせず郭必昌急よ此事を以て貝勒王よ告ぐ貝勒王頓て命を下して韓固山が軍をまとめて安平の地方三十里が間清兵曾て犯さず是よよつて芝龍が疑ひ大半減じぬれと只唐王を建て隆武の朝を冊たる一事よ於て清王必悪んで芝龍を罪をべしと疑へり貝勒王又此事を聞重て芝龍よ書を送る其言は曰く
吾所以重將軍者以將軍能立唐藩也人臣事主苟有可為必竭其力力盡不勝天則投明而事乘時建不世之功此豪傑事也若將軍不輔

立吾何用二將軍一哉且爾粵未平今鑄閩粵總督印以相待吾所以欲二將軍來見者欲商二地方人才一故也

芝龍此書を見て始めて大に歡ひ家弟鴻逵之約鄭彩其子國姓爺を招こよせ相議して中ける今清王と貝勒王と我を招く事深切なり行せんべ恐るゝよ似たり吾行てたとへ誤り有とも汝等力を併せ此安平城を守らんよ何の恐れか是有ん時よ鴻逵之約等しく言を揃へて曰く夫魚の淵を離るべからず我一族元來水軍は練たり早く海よ入難を避よ如し何を蕃夷の封を受給ふや國姓爺も席を進んで止て曰く韃靼の貪欲よして仁義を知らず今大軍を率來りて未一戰よも及ばざるよ却て我一族を招きて盟會を成さんとするの所謂無約而請和者謀也父虜の營よ至て一度敵の計よわたらば万悔もるも益無るべし只一族の兵此安平を守快く一戰よ雌雄を決すべし此外よ何の議論か是有んや芝龍是を聞て中けるの我等が言語無よ非ず然とも我原大義を起し兵を動す事ハ民を安せんが爲に我今北京の封を受けて以閩粵の民を安し武備を講じて時の至るを待再明の社稷を恢復せん成功父に代て閩廣を保べし國姓爺及ひ三人の兄弟を憐て留むれとも鄭芝龍更よ聞す十一月十五日五百余騎の進兵を從へ遂よ福州の營よ趣く貝勒王大よ喜び芝龍を向へ相共よ手を取て歡びを盡し箭を折て誓をなし酒を酌いたく飲む事三日三夜忽一夜醉中よ乘し芝龍を

縛へいましめ北京を送る芝龍貝勒王に向つて中けるの北京に至て清王を見へん事の元來願がふ
 所之何ぞ是を辭せん然とも弟鴻逵芝豹并に鄭成功などとかくと聞へ海上の氏を動し忽亂及び
 なん貝勒王が曰く是卿が興る事ゝあらず我も又慮る所あし只京師に至り朝廷に陛見よろしく
 事を請しいへとて守護の兵を嚴しく相添北京へと急ぎける芝龍が五百余騎の選兵皆別營に置た
 れば敢て相見る事も叶はぬ漸く芝龍が書を求めて安平城に歸りける

○北事陷安平城

去程に鄭芝龍の貝勒王が計に陥り幽れて北京に趣きけるよし聞へければ成功を始め三人の弟
 其外一族兵士に至る迄臍を嚙悔む事かぎりなしされとも芝龍が送り越たる書を諸清朝の
 忘るゝ事なかれと記したることを不審けれど様々評議なしけるに成功進で曰く昔漢の高祖父太
 公を楚に捕へられ給へとり曾て軍を退けぬ彌進で校戦し遂に楚國を亡し給ふ今鄭家の威勢を
 落し父芝龍を請需るとも渠何を容易に父を返さん却て害を求る成べし大軍を起し鞏固了頭
 の首切ならへ追て是を奪取ん時は鴻逵やけるの成功が言よしと雖未北京の消息も問定ずして
 軍を出さん卒忽あるべし況や兄北京に至る上の貝勒王も吾此安平城に逼るべからず事臨ん
 で恐れ謀を好んであそむ智將のあす所之辭し事を糺して誤る事有べからずといふ一坐皆是を



尤と同じ暫く形勢を見合せける同月下旬北將韓固山俄は數十万の兵を引卒し安平城を取圍み短
兵急を責たりける國姓爺を始め鄭家の一族あるひがけなき事なれば防ぎ戦ふべき備へもなく上
を下へと騒動す韓固山兵を下知し嚴敷討て責上れば城中防ぐ事能ひまさんく成て船も取乘
り海上は通れたり北兵我もくと安平城は亂れ入家財を掠め婦女を奪ひ亂妨狼藉甚し國姓爺
が母は日本長崎の津丸山の遊君よて其容麗敷類たき艶色なれば韓固山是をどらへて大に悦び
營中へ携へ歸り己が妾と成んとす此婦人肅然と容を改め妾は安南伯飛虹將軍鄭之龍が妻國姓
爺成功が母は何ぞ北虜狗豚の類ならん賊將淫し汚す事あかれとて懷より短劍を拔出し韓固山
を飛かゝる固山大に怒り劍を引て刺殺す國姓爺の母の屍を尋ね求めて大に歎き脚の溢れ出
たるを洗ひて體をぬぐひ喪を發して是を葬り十二月一日大に兵を起し南海中の夏門といへる島
に要害を構へ明を忘れずして仇を討の意を以て島の名を思明州と号し専ら恢復のこゝろを
顯しける

○國姓爺破三廣東一

明の神宗皇帝の嫡孫永明王とやす王子ましくける其父桂王が以來衡陽に封せられ給ひしが
寇亂を避て梧州に寓し父斃し給ひて永明王喪を籠り御座けるは廣西の舊臣劉式宿王坤陣子莊を

んとしへるもの冊立て監國王とす國姓爺是を聞て廣西より來り謹んで申ける大王の國を監給ふの百姓の希所之早く先帝遺勅順ひ皇帝の位に登り万民の望み違き給ふ事なけれ永明王宣て寡人未先帝の勅命を聞て卿是を詳に告よ國姓爺が曰臣曾て隆武の朝に仕へし時帝常より曰く永明王の神宗の嫡孫朝家の正續之朕の子なし後將に永明王に屬すべしと此詔り内臣普く聞所あり大王疑ひ給ふ事なけれ爰よかひて釋式程王坤等とも謀りて丁亥三月朔日肇慶府の官署を行宮と定め永明王即位を給ひ元を永曆と改め文武の百官を定め給ふ而して國姓爺鄭成功の閩廣を恢復し北軍を退くべら旨を永曆帝に奏し叔父鄭芝豹を思明州の城に止め鴻逵と俱に大軍を發せんとて先思明州の城外に壇を築金の幣を挿み銀錢をつらね敷日馬を殺し天を祭り鳥牛を宰し地を祀る鄭鴻逵を稱して大將軍と尊み成功自ら盟主と成り壇上に向ひ香を燒き再拜それ諸將同く香を續ぐ成功高聲に盟文を唱へ誓て曰く今君父の爲に仇を報ず軍中異姓義を結んで兄弟の誓を成し上の家を安んじ下の庶民を惠まん軍中渾て十余万人同年同月同日生れずといへとも同年同月同日死ん事を希ふ皇天后土一片の忠心を鑑み若義よそむき盟違ひて天よく是を誅し地よく是を罰し給へと祈り終に性を刻みて血をそりて義勇みたるありさすの翼よゆ、老き次第あり時永曆元年六月朔日十余万の大軍思明州を進發し廣東の路を趨りける

爰は廣東の地は大星城といへる要害あり清の大將軍李成棟二万餘騎を率て捕籠り降兵を集め廣東の地を招撫せんと然るに國姓爺鄭成功十余万の大軍を率て向ひければ李成棟震ひ恐れ陳龍隱素などいへる大將を集め議しけるに國姓爺の世に双なき猛將父を清朝に擒れ憤勢十余万を起し爰よ押よせたり味方の小勢争か此剛敵よあたるべき早く福建へ急を告げ援兵を乞て戦はんといかよと云陳龍隱素もつとも同じ誰か福建に走行て急を告る者やあると城中の兵士を點檢するよ黒彪といふ者ありよく馬に乗りて日よ千里を行願て此黒彪よ命じて福建の使とす黒彪領承し先版に至り數千疋の馬を相し栗毛なる駿足を撰み出し此馬真に千里の駒あり然れども齡いまだ盈さる故三百里ならで走りがたし陳龍が曰く爰より福州に至るよ凡二百九十里兩よく兩日の内よ件還まべきや黒彪が曰く是又甚心易し然れども十日の糧を賜らざんば往事能ひし陳龍が曰く是又最易し如し何の器よ是を納ん黒彪手を以て自ら腹を鼓し我腹袋よく十日の糧を納む何ぞ外の器を勞せんや爰よかひて黒彪一斗の飯を食ひ盡し馬も又三斗の菽を嚼頓て黒彪此馬よ飛乗り鞭を加へて追風の發する如く福建に走らせし時國姓爺が大軍川を隔て陣をつらね敵の虛實を伺ひけるよ函輝國姓爺に申けるに我一ツの計あり敵の胡兵よてたのむ所の馬上の戦ひなりあれは覽いへ川の向ふよ大宛の名駒數千疋野畜せり此馬を奪取今の炎天よ當つて平地の歩戦

をなさば敵の一擧一崩べし國姓爺此計大よよしと同心しければ函輝村々をさがし需めて雌馬數十疋を買求め川の此方野飼するも胡國の雄馬彼雌馬の嘶く聲を聞て自ら川を渡り此方の岸に集る手垂の騎者數百人樹の蔭にかくれ居て悉く捕得たりされば二日が内名馬を得る事千余疋及べり敵將李成棟多くの馬を奪れ別當の守りを怠り庶民にや倫まれけらしと軍令を嚴よそ時を兩日を経て黒彪福建よりかへり報じけるに此頃廣州の地も唐王即位し兵を起して福州に向く梧州も永明王位も即師を出す此故も安大人丁黒山十万の兵を引て永明王を防ぎ海利王陸嶺韓固山の十万の兵を以唐王を支ゆ禮州又本營なれば守りの軍兵減しがたし兩方へ向ひし兵とも凱陣せざれば援兵を出しがたし宜く城を守出て戰事なかるべしと告げれば李成棟此報を聞て大よ力を失ひいかゝのせんと言する所も國姓爺が十万の逞兵稻麻の如く取圍鉄砲を打かけ火箭を飛ばし喚き叫んで攻寄しつすさまじくこそ見へよけり城兵も援を破られトと矢石を投かけ防ぐといへとも遂に第一の門を責破り大軍一同も亂れ入る城兵も今叶へしと心を決し本城の門を開き関を作つて斬て出たり國姓爺が先鋒揚祖喇叭を吹立太鼓を鳴し鎗屏障を作つて突立れば北兵多く馬を失ひ戦ひ心も任せざればさんぐも崩れ亂れ討る者數をしらぞ大將陳龍是を見てこの口惜と驪駒の逞きも跨り偃月刀を引さげ南海の鄭賊いづくもわると罵れば國姓爺錦

の戰袍をひるがへし三尺有余の日本刀を左右の手も引さげ獅子奮迅の勢ひをなし陳龍も討てかへり戦ひ三合あらざるも陳龍を切て兩斷とす噓素鎗を上げて突來るよいまだ見馴ざる日本刀國姓爺が手快き事鵬の落る如くあるよ心怕れ馬をかへして北行を國姓爺猿臂を延て噓素が頭より一刀も竹を破たる如く斬下たり其勢も眞も當がたくいよしへの關羽張飛が勇といへとも是も争及ぶべきと北兵粉の如くみだれ走れば大將李誠棟大も恐れ只一騎間道より福州さして敗北す國姓爺が十一万の軍勢勝も乗り當るを幸殺倒す事怡も草を妨が如し滿城皆血となれり國姓爺城も入て百姓を安んじ函輝を城主と成して一万余騎の兵を殘し惣軍凱歌を揚て思明州へ引取ける然るも北將李成棟の只一騎福建道も逃行しが能々思慮するも斯一戰も利を失ひ福建も歸るとも貝勒王必ず我をゆるそまじ如ト是より梧州に至り永曆帝も降參せばやと髪を延して梧州に至りぬ

○國姓爺奪三南洋島一

國姓爺鄭成功の大星城を一時も破り李成棟肇慶府も降ければ永曆皇帝御感甚敷是父あれば此兒あり眞も鄭芝龍が子にけりと詔りを下して鄭成功を延平王も封ト給ひ數々の金帛を賜ひ大功を稱せらる勅使思明州に至り詔りを傳ふれば鄭成功の北も向ひて再拜し謹て其賜を頂戴

し勅使を勞ひ送りかへしぬ斯て國姓爺の一日宴を設け數方の將卒を集て中けるの我父の樂業を
續て始めての軍は諸軍皆義を重し身命を輕んじ一戦は凱歌を唱へし事朝廷深く感し給ひ吾をし
て延平王に封下給ふ是は諸軍の忠戦より吾獨其賞を蒙らんやとて彼帝より賜りし紗綾縮
緇閃緞八糸天鵝絨などの賜を取出し手づから引裂て普く軍中賞を數方の軍卒其厚情を感
服し得る所の絹僅ますは滿ざれども是則天子の賜物大將の厚意と悦んで秘藏しける時顔
仲といふ老將進み出てやけるの廣東の南洋島は周回五十里にして前は白川の濶深たるを帯び三
方は滄海滿々たり城の四面泥深く人馬の足を立せ異は不双の要地なり此故は清の軍帥貝勒王島
の主許良を味方懐け忠勇侯は封し今清國の屬島と成れり將軍此南洋島を奪取給へば廣東の
一路悉く恢復せし國姓爺是を聞て大に悦び吾此南洋島を念とせる事既久し急し責討拔取
べしとて自三万余騎の選卒を勝り數千艘の艦船を取乘り八月六日思明州を發し南洋島へと押よ
せけるやうく南洋島のこなた三里計は船を止め國姓爺下知しけるの味方兵狼をつかひ終ら
今夜直ち攻かへるべし猶豫せば敵は防禦の備へあらん士卒皆命を領し早船を開く折し南洋
島の夜廻りの番兵城中は報して曰く海濱多くの烽火見へては何様敵の夜討あらん兵を出して防
が給へとや此時島主許良は貝勒王の招きよつて福州に至り其叔父許源城を守りけるが是を聞

て今此島へ押よそへき者覺し定めて海寇の類なるべし窺鳥銃をひかせ賊共をおびやかせと
て更驚く氣色あし然るは夜廻りの番兵追々注進しけるの先刻より早船を以て斥候致を所よ
海賊の類はあらき堅固の甲兵三万余り海上三里ばかりは相續き此島へ押よせしといふ許源爰は
おひてはためて驚き先諸大將の妻子を城頭の巖窟に藏し自ら五千余騎を引卒し要害を堅め敵を
俟國姓爺は南洋の砲聲を聞味方を顧みてやけるの敵兵既は防禦の備へありと見ゆるぞかくては
急し責るは利少し明方を待て討べしとて船の烽火を残らば打消し鎖りかへつて扣へたり許源遙
は此烽火のきゆるをみて大に笑ひ是海寇は違ひなしで追散して慰みよせよとて自から二千
余騎の兵は下知し手々は松明を乗我先驅出たり國姓爺遙かよ此たいまつを見て大に欣び敵兵
城中を出て防んとせるをやこれ吾は城を與ふる者なり責寄せて一討は殺せと數艘の兵船小を浪
を押切て彼島よすや否や先手の大將顏夢仲林順眞先馬を出せば三万の選卒驚翼は勢を並べ
眞黒は成て押よする城兵の先手徐買七百餘騎の甲兵を引卒し眞一文字は討てかへるを林順眞
仲餘はすまを作りさんくは突き立れば城兵多く討れ進みかねて見へたりける軍將徐買大に怒
鎗を捻て顏夢仲と馬を交へ戦ひ十余合に至りけるが夢仲が勇やまさりけん徐買を一突は刺つら
ぬき勢ひは乘じて殺倒し島の大將許源斯と見るより大に愕き鎗刀を提げ陣前馬を出し大に

罵つて曰く海中の草寇慎み聞け清朝の忠勇侯許良が叔父許源が守る城なるを爾等何方の軍兵責
 來るともおめくど奪べきや早く回りに命を呼はりけるは國姓爺も陣頭は馬を踊らせ汝
 島裏の胡奴吾を知らせや明朝永歴の封を受たる王延平國姓爺鄭成功とい我事之國の爲は仇を討
 快く刃を受よと例の日本刀をひらめかし斬てかゝる許源國姓爺が名を聞て心驚き六尺斗の鐵鞭
 を旋し向ふと見へしが國姓爺電光の如く飛入て只一刀を斬て落す哀むべし許源 鐵の甲二領を
 重着たりしが國姓爺が勇武日本の利刀を討れ兩斷と成て亡びたり城兵大將を討れぬれば何かし
 べしも支ゆべき鎗を棄甲を脱四角八於は敗亂す國姓爺が三万余騎逃るを追て二里ばかり斬立て
 しが鄭成功味方を止め暗夜は長追すべからずと其所を陣を取暫く息をつがせけり滯半時斗も過
 ぬれば隣村の鶏聲花やかま鳴て東雲の空明渡れは國姓爺士卒を下知して城門近く押寄するは
 防ぎの兵一人もさく城の傍は鳥雀飛廻りて飼食を求め國姓爺を見て大に笑ひ城中の兵はや落
 失て人のなきや群雀の聚り遊ぶを城門を破て押入やとて自ら大なる斧を提げ門扉は向て二打
 三打うつたりければさしも堅固の鐵門忽裂て飛たりける諸軍一同は関を作り我先よと込入よ
 只一聲の炮をだに聞かず寂然たるありさまは林順大音は呼て曰く逃る者へ去れ降る者へ來れ婦
 女兒童の傷じと數聲叫びけれとも敢て答る者もなし時は一卒來り告て曰く城後の海濱は古歐

あり其中は人語の響あり究めて敵の伏兵ならん國姓爺是を聞て諸事を論せず火をかけて燒盡せ
 と下知それ士卒とも命は隨ひ彼敵の中へ數百の火箭を射かけぬれば忽枯柴は火移り炎々と
 燃上るは奥なる巖窟の内は女童の啼叫聲頻りよして逃出べき道もなく火の紐々さかんは成り
 一大火坑阿鼻の地獄もかくやと思ふ言は國姓爺は難なく城兵を屠盡し降参せる者七千人其島
 の百姓を安んじ叔父鄭鴻遠は二万余騎の兵を附して城を守らせ自ら一万の兵を引つれ思明州を
 を歸ける

○ 瓊燕恣色傾城

福州の西南を去事八日路漳州といふ所あり其海邊は安海城といへる城あり鄭芝龍が築所にして
 七百余町の庄園を構ふ安平清國は属せし後清の大將王老虎といふ者漳州の國主と成り安海の
 城に住す其麾下は兩人の勇士あり一人は柳殿力士と呼て其力よく虎を捉ふ今一人は曾瑛神兵と
 稱し能飛鳥を射落す此二將王老虎を扶け漳州及び軍縣を横行し家財を掠め婦女を奪ふ愛は漳州
 の妓女は金瓊燕と云者あり一時の國色を以て隆武の朝諸公子は寵愛せられしが今王老虎瓊燕が
 美色を愛し營中を招きて去らしめ瓊燕嘆じて曰く我の賤しき娼婦の身されとも明朝は生れて
 明朝の粟を食へり然るを韃韃の夷が妾たらん自ら愧べし見よ妾が眉斧這一城を倒んも

のをど常よ計略をめぐらしけるの恐ろしかりし工みこ或日海棠の盛なるよ王老虎瓊燕と俱酒宴をあし戯れ遊びける一座皆胡八なれば一曲の歌を唱ふる者なく只弓を引て花は嘲る黄鳥を射るの外風流の戯れいなし瓊燕王老虎に向ひていふ花の下の遊の簫歌をこそ奏すべきは將軍先弓を響し納め太平の曲を諷ひ給へ王老虎來文字を知らず柳巖をめてして諷ひせんとて彼柳巖力士を召出しぬ柳巖一盃を酌て先唱へて瓊燕は勸む其詞は曰く

青雀飛降醉海棠

分明華下見霓裳

吟聲清く唱へければ瓊燕喜び讚る事限りあし王老虎の詩の意の通せされとも曲調の艶なるをよるこび一向酌で酌前し瓊燕は一曲を勸む瓊燕便下聯を足し吟じて曰く

樹碧咫尺迷萊近

一曲簫聲引鳳凰

聲際々として餘韻ひびき王老虎歌の面白さよ覺へず節を緊此時柳巖私に心中と思ふに一曲簫聲引鳳凰の句に正しく我妻と成て晋の弄玉が故事よ効へり艶話なる事を特暗し瓊燕が面を見れば渠も又目を以て情を寄る柳巖の心中天よ飛揚し手の舞足の踏事を知らず王老虎のかわる色情有との露も知らず酒宴毎よ必柳力士を陪せしめ兩將とも酒色は溺れ唯醉歌のみを事とし武を講ずる事會てなし曾瑣深く是を歎き王老虎を諫めて曰く將軍色は荒み武を怠るこれ身を亡じ國

を失ふ根元なり美人を愛されば傾城傾國のいましめあり將軍の爪牙の職其任甚重し況や此安海の鄭家の舊壘渠が一黨足をそべ立て望む所之一旦敵愾に乗じて襲ひ來らば何を以てか是を禦ん柳巖酒は沈酒して晝夜を知らず斬て軍令を正し瓊燕を舊里へ歸し給ふべし然らざれば軍中の將士悉く逃去らん事踵をめぐらまべからず王老虎是を聞て大に怒り爾が言甚不禮之瓊燕よく詩書を讀義理は通形豈是を傾城傾國と云べけんや猥り人をして説言する事なかれとて座を立て帷幕の内よ入此時奥の方よ瓊燕の丫鬟を供し陸局を成す曾瑣直よ走り來り瓊燕が肩さきをかゝり掴み階の下へ投落す瓊燕もとより舞の上手よて身を軽くして嘲る事燕の如し階下よたちて自若たり曾瑣怒て捕んとする時後より柳巖走り來りて曾瑣を紐で動かせ互よ力を震ひ揉合し柳巖力士の勇力よ争か敵せん終よ曾瑣を押殺せり王老虎大に喜び酒宴を設て柳巖を稱譽し屬金を賜へて褒美とす瓊燕此とき王將軍より代りて一言を贈るべしとて一絶を賦其詞は曰く

翩翩何日法聊派

胡國春寒只管啼

休說王家堂上客

依々柳色好雙棲

詩の意は瓊燕我身を燕と嘲し柳巖が須を揚柳よあしいつか胡國の寒氣を遣れ出て青々と快喜さ柳の枝よ止りて羽を休共よ棲んといふ意をのべたり去れども王老虎の更よ此こゝるを知らず

只瓊燕が敏才を稱す柳巖の心中焼が如く惚恍として寝ても覺ても其事のみを思ひ居りける

○瓊燕之國姓爺陣

永曆三年五月の始め國姓爺が軍威日々盛んとして靡下の兵卒十五万余り其名南海は鳴響けり時國姓爺諸將を集めて中ける漳州の安海城の父鄭芝龍が築所にして吾是を恢復せんと思ふ事久し近來北將酒色は亂れ兵馬の備へを怠るよし是天の我を扶る所也速に征し父の怨みを晴べしといふ衆將皆是より同ト十五万の軍勢思明州を進發し五日を経て漳州の海濱に押寄せたり大將王老虎の思ひ設けざる敵の大軍を見て肝を冷し城兵も機を奪れ防ぎ戦へんといふ者なし國姓爺諸軍に向いていふ成今日戦ひの占を成す震の卦を得たり震の雷也雷の聲有て形なし此卦よらば今宵五月暗し乗じ奇兵を以て責討べ敵必ず備へあからん諸將皆信服し軍を進んと川意を成す頃五月廿二日梅雨始晴て海雲墨を流し山霧蒸は似て路分ちがたし國姓爺諸兵は下知して相言を定め數万の松明を手々持せ態と是は火を點せ城門に至らば始めて燃すべしと約し各杖を脚で押寄ける城中より今夜俄に敵のよせべしと思もよらず諸軍本城はあつまり防戦の評議とりとなりしが國姓爺が大軍近くと寄來り數万の松明一時は火を點し関とつと上たりしかば山鳴り海應鐘の光は滿天の星よりも多く城中の兵大に驚き持口をかため矢炮を飛

し破れま下と防ぎける國姓爺が先手の大將戴健といふ者士卒は下知し二方より余る松明の城門は投かけぬれ積上たる車軒等して忽様極は火移り爆々燃上りぬ此時城中の猛將柳巖は鐵の甲冑を投掛驪駒は跨り狼才鎗を提げ嚴し士卒を下知する所軍將阿幾陸前門より走來敵軍の惣門は火を放ち黒烟り城内に犯し防禦の備へ崩れたり柳巖驚き首をかへして臨み見るま細の中は延平王の金旗ひらめき國姓爺が麾下の提督翁天祐林勝夢仲の兩將を左右に備へ一齊に群り起る柳巖狼牙鎗をまじし雪霰の如き大勢の中へ面もふらず突入を四方八面に殺倒す其勢ひ天神の如く奇手の軍卒死傷の者數を知らず奇手の軍將夢仲鎗を捻つて柳力士と馬を交へ二十四谷戦ひしが夢仲が鎗法次第は亂れ敵しがたく見へければ林勝偃月刀を提げ馬をとばしてかけ來り夢仲を扶けていとみ戦ふ柳巖兩人を相手とし惡戦せる事三十余合更に勢れたる氣色を以て翁天祐心驚き味方の大將討すまとい羽扇を揮て下知すれば國姓爺の旗下の大將萬禮揚祖戴健林順張英吳俊等の強將數万の軍卒を駈て城兵を中へ取圍め鯨沈一聲矢炮を飛す事雨よりも繁くさしも猛勇の柳力士今の叶ふまじと馬引かへし本城は逃籠り門を堅めて石炮を打出す事夥しく火珠の來る事霰の散に似たり奇手の大軍少しらみて退さける國姓爺味方は下知しける我軍七分の勝利を得たり本城を賣んよの別は計略を順らし只一息は責援べト惣軍攻口を退さ備へを堅め

て休足すべしとて軍をまとめ十里去て寨を下し兵馬の勞を休めける扱も國姓爺の諸大將を集め
 講しけるの今味方の大軍急は迫て責打さへ猶鼠猫を嘴の患有ん唯よく福建の界は兵を伏援兵の
 路を新海口は一軍を屯し兵糧を運入るゝを遮り止め安海の城自ら滅すべし諸將皆是は同じ實
 廷は二万余騎の兵を授け海口は出て糧を奪ひしむ又陳義は二万余騎を興へ福州の界は屯し援兵
 を遮らしめ城の四方は竹木を切て陣屋を造り芽を刈蓋を取集め雨露を妨ぐ備へをなし城外三
 十余里が間連綴と寨を構へ宛も長城を築し如く宿陣の隊頗る密也城將王老虎は柳巖と俱に敵
 寨形勝を見て相語つて曰く是必ず城中の糧を斷計也速は福州の援兵を乞ひ兵糧を催促す
 べしとて日々早馬を馳て福州に至らしむれども悉く國姓爺が伏兵は生捕れ一人も到着者なし
 王老虎心中大は苦しむ日夜瓊燕柳巖等酒を飲みせめての鬱悶を思めける時は監軍の諸將等齊し
 く來て諫めけるの今既は城中の糧米十日の設あり此頃東南の風のみ打續吹とも更は兵糧運送の
 船一ツも來ぎ是必ず敵兵は奪取るゝ者なるべし然るは城中瓊燕を始とし諸の妓女無用の糧を
 費す其謂れなし先は曹神兵是を諫めて不慮は死せり神兵は言符節の合するが如し早く瓊燕が
 徒を城より出し軍中の恨みを止め給へ柳巖側は有て心中私に喜び當瓊燕城を出なへ奪取て
 已が妾と成さんるのを俱に言を作つて中けるの諸將の論當然の理に軍中も婦女を愛するの故に

○蓋なり其承り舊里へ送り歸すべし監軍等は是を聞て曰く何を是程の小事は柳將軍を勞せ
 瓊燕も此城を傾け陥る衆軍の惡む所之吾輩は賜りて一刀兩斷は斬て軍中の望みを達せ
 ん柳巖愕て曰く瓊燕何を此城を傾んや諸軍皆曰く王將軍先は諫めを納給はず柳力士又狂て
 曹神兵を殺せり是より後城中軍令亂れ上の將軍より下の歩卒に至る迄悉く酒色は耽り軍士甲冑
 を質とし酒を沽ふ敵は此處に乗じて寨を固めて兵糧の盡るを俟たとへ張良陳平再生をも
 其是を奈何せんや故は城中の軍卒瓊燕を寸断しは切て其肉を喰んと欲す王老虎茫然として
 其能はず時瓊燕帷を揚て立出王老虎は向ひ中けるの君が一日の情は妾が百年の命を喪
 ぶ諸軍の請ふ所吾何を辭せん速は死して衆人の心を易くせん然れども今我死たりとも敵の退
 まへさあらず爰よて死する命を暫く假り敵の陣中に至り色を以て欺きよせ大將國姓爺を殺し
 て王將軍の厚恩を報ふべし諸軍是を聞て大は笑ひ瓊燕が辨舌は囁る事おかれ渠は一個の妓婦何
 を千方の大將を殺し得ん瓊燕の曰く吾たとへ敵の陣中へ趣くとも生て還るべき理なし何れと
 も死する命只々斬て諸軍の心を安んじ給へ時赤鬚髭々と亂れ眼は瑠璃の如く身の長七尺有餘
 の壯士偃月刀を引さげ大は叫で曰く吾の前監軍赤龍與なり女子よく命を捨て敵陣に入刺客を爲
 んと欲す先試みよ吾一刀受て後彼所へ趣け此時瓊燕心しづか玉の差櫛を取鬘雲を整へ階を

下て死し着つんとと赤龍興せきりゆうこうのい假月刀かりげつとうを揚あげてひかへ進すすみ今いまや此こ美婦みよめ一ひと刀たうの下した命いのちを落おすらんと見みる所ところは柳りゅう巖がん座ざを立て龍興りゆうこうをおしへたてよし忠ちゆう心しん既すでに露あれたり暫しばく赦ゆるして渠かれが請こたふまかせ敵營てきえいへ遣つかはへ王老虎わうらうこも俱ともは是こゝを然しかりとし敢あへて殺ころす事ことを免ゆるさず赤龍興せきりゆうこうを始め諸軍勢しよせんせい今いまはそへさやうなく白眼はくがんを見て退しりぞけし瓊けい燕げんの王老虎わうらうこよいとまを告つげ了しまり二人ふたりを引ひ具ぎして國姓爺こくせいやが陣せんへ趣おもひける

○國姓爺こくせいや孫ま孫ま安海城あんかいじやう

老聃らうたん曰い國家昏亂こくかこんらん有三忠臣さんちゆうしん一ひと宜ななるかな言こと也なり茲こゝに明末萬曆めいまつばんれきの皇帝治ていは居ゐて亂らんを忘わすれ玉たまひ逸樂いつらくは耽たん國政こくせいを荒すま玉たまひしより天下てんか擾亂じゆうらんして鞮鞞ていげん王わう其弊つひは乘りじ李自成りせいせい自立りつりつし忽いち萬民ばんみん塗炭とたんは陥おちる世よとなり遂つひに闖賊ちゆうざく帝城ていじやうを襲おそへ崇禎しゆうてん爺や狂死きやうしたまひ其後そののち大清たいしやう鼎ていを燕京えんけいに定さだてより中國ちゆうごく鞮鞞ていげんの有うとなり世よ其そのみな頭かしらを刺そり北狄ぺきたうの服ふくを着きけるは獨鄭どくてい芝龍しやりゆうの一ひと子こ國姓爺こくせいや鄭功成ていこうせいのみ忠義ちゆうぎの節せつを改あらためむ思明州しんめいしゆは兵へいを集つめ鞮鞞ていげんを亡はして再度ふたたび明めいの世よ復かへさんと謀略ぼうりやくを廻めぐらし威武いびを逞たくましうして度々たびたび清しやうの強敵きやうてきを敗くつ勢せいは乘まじて五十萬ごじゆばん騎きの逞兵ていへいを卒すし漳州しやうしやう安海城あんかいじやうを攻せうる事頻しきりあり然しかるは安海城中あんかいじやうちゆうは瓊燕けいげんといへる諸妓しよき女にながら明めいの國恩こくおんを忘わすれず漢王かんわう尤なほが女に貂蟬てうせんが董卓たうたくを亡はせし陳ちんはならひ色いろをもつて王老虎わうらうこが心こゝろを蕩たらし柳力士りゅうりきをして曾神兵そうしんへいを殺ころさせ猶なほも柳力士りゅうりきをも自滅じめつさせんものと雄々ゆうゆうしく計策けいさくを定さだめ刺客しやくてを名なとして安海城あんかいじやうを出いで國姓爺こくせいやが陣せんへ赴おもひけり是こゝは柳力士りゅうりきを釣つ出して國姓爺こくせいやが手てを借かつて斬きる

せんどの方便てだてはり斯かて金瓊きんけい燕げんの國姓爺こくせいやが陣前せんぜんより到まり監卒かんすつは名なを通つうして解成功かいせいこうは對面たいめんせん事を望のぞむ索もとり應こたへなき名妓めいきなれば寨中さいちゆうの將卒しやうすつ認しりたる者もの多く仔細しさいのしらざれと陣中せんちゆうへ入いりしめ國姓爺こくせいやは斯かを達たつしけるは鄭成功ていせいこう聞きて嘲笑あざわらひ察さつするは玉老虎たまらうこ糧道りやうだうを斷たり龍城りゆうじやう叶かひがたきかゆへ美婦みよめを餌えともて圍かこを解かせん料りやうなるべし對面たいめんすとも何なにの益えきかあらん速すみに退返たいへんよと令れいする所ところは忽いち一卒いつすつ走りきたり即今いま城中ちゆうじゆうより一彪いつひゆうの軍馬せんば馳出せいしゅつ甲冑けいけうを脱だして降くだを乞こひ名刺なせきを通つうして是こゝは即すなはち安海城あんかいじやうの先鋒せんぽう柳力士りゅうりきは之これいと報はす國姓爺こくせいや阿々あと笑わらひさればこそ王老虎わうらうこ先美婦せんみよめ瓊燕けいげんを吾われが陣せんへきたらしめ又また柳巖りゅうがんを降くだせたるは反間はんかんを行なせん巧たくみなるべし先柳巖せんりゅうがんを陣中せんちゆうに止とどめおき妓婦きふ瓊燕けいげんを誘よきたれよ善よ其女そのにを一ひと刀たうは斬きて捨すて其後そののち柳巖りゅうがんを誅ころすべしと命めいす士卒しよす令れいを受けて頓とんて瓊燕けいげんを伴ともひて主將しゆしやう面前めんぜんへ出いで國姓爺こくせいや兩眼りゆうがんを怒いからして瓊燕けいげんを屹きつと斬きり爾しかれ柳巖りゅうがんの身みとして膽斗たんたうも吾われが寨さいよきたるは王老虎わうらうこが謀はかりを受う降くだ將柳巖りゅうがんと反間はんかんを行なへんとおもふはあちまやと喝かつす瓊燕けいげん少しも怕おそれず色いろを正ただして曰いけるは妾命せうめいにして父母ははの爲ためは身を賭いす良妓りやうきといふなれども明朝めいちょうの曆りきは生なし明朝めいちょうの粟あはは人とおれり焉いづを鞮鞞ていげんの爲ためは一ひと毛もうを抜ぬく力ちからをも用もちひ侍はるべき抑おさ王老虎わうらうこが力ちからとる者ものは曾瓊柳巖そうけいりゅうがんの二人ふたりを除のぞきなば主老虎しゆらうこ力竭ちからて漳州しやうしやうへ自然じぜん將軍じやうじんの手ては屬しよくし侍はらんと思し惟いし王老虎わうらうこを昏迷こんまいさせ柳巖りゅうがんが手てを以もつて曾瓊そうけいを殺ころさせしひしは妾せうが國朝こくちょうへの寸忠そんちゆうにして將軍じやうじんの功こうを遂すさせ奉ほうらねたためなり今いままた大塞たいさいよきたりし

の柳巖を城中より釣出し將軍は討せ奉らんと思ふのみ如何ぞ反間の爲に待たば然れども猶疑
 ひ玉の妾を誅して後柳巖を殺し玉へと驚舌を舐し流水の如く自若として曰ければ國姓爺大い
 ん感歎し賢なるかな婦人一時の心計は敵の兩雄を除く事男子もあよふ所あらず我眼有ながら
 腫なくかゝる女丈夫を過んとせりとて深慚愧し急々柳巖を捉させて首を刎陳外よこそ其梟た
 ける柳巖の國姓爺は降り計略を献じて安海城を攻落し其功は瓊燕を賜ひ妻とせんと巧みけるは
 較計毒餅となり瓊燕が面を見る事だも能はず刑せられけるの已は出る者の已はかへるては金首
 の如く奸悪の報ひとぞ知れける是より前安海城は先鋒柳巖手勢を卒して何國ともなく落し
 と報じけるよぞ王老虎疑ひ惑ふて更は其故を悟せ赤龍興の是を聞て牙を咬さればこそ柳巖匹夫
 瓊燕とかねて密通し女を先は落し己も跡を慕ふて援落せしめ必定鄭族は降参し常城を攻拔ん奸
 對なるべしといふ事いまだ終ざるは士卒また走りきたり敵の塞外は柳力士の首を斬て梟いと報
 ま慈は於て王老虎慨然として嗟嘆し瓊燕の實は傾國の女子なり一計の裡は吾が兩先鋒を亡せり
 我愚にも渠か容色は蕩されて事茲にあよふ事今更悔れとも反らず此上の城を堅固は守りて援兵
 のあたるを待鄭族を屠盡して此恨を報せんと思へば赤龍興を右先鋒とし賈勒段を左先鋒と定め内
 城を堅く守めけるされとも兵糧の道をたられたれば城兵餓え臨み歩卒は日夜は落失漸々は無勢

となりぬ王老虎大いよ心神を苦め是を制せんとすれども糧已に盡たれば施すべき方便なく三日
 が程の馬を殺し草の根を掘て諸軍を俱は是を食し足を翹て福州海口の報を待ければ一人も
 さたる者なし赤龍興賈勒段一齊中けるの事已に窮り三軍死地は就ぬ然も城兵二萬との算れども
 病卒弱兵半よして弓を射るは腕痿砲を放は氣力なし物の用は立べき者も飢渴は困苦は日來の
 勇氣折けなん斯て空く城中は餓死せんよりの潔く敵塞は押寄おもふ程戦ひて屍を海岸は曝
 屍こそ本意なるべしと諫るよぞ王老虎大いよ歡喜し實兩先鋒の言察し然らば目覺し一戦を
 遂燭燧しく戦死せよやとて六月十五日の明方は城は火を放ち諸軍死を一途よして海岸ある敵塞
 はを押寄ける國姓爺此体を見て諸將は令し敵飢渴は堪ずして死族となり寄るなれば一旦の飢氣
 尖からめされども再度進むべき氣力なかるべし只寛か敵を繰り其兵勢の羸を待て微塵は碎よ
 と指揮しければ其意を得て林勝戴健の兩將一万騎よて右より支夢仲林順の二人は一万騎にて
 左は備へて城兵は今日を限りとかもひ定めたれば何かの少しも猶豫へは鯨波一聲發と比しく鉄砲
 を放ち箭を射かけ霧地暗は殺進其勢は決然として當かたければ國姓爺が部下の勇卒物の數は
 もせ老是と向ひ合せ追つ反しつ戦ひて小時尅を移しけり城兵心ばかりの勇めども人の三日の糧
 を斷馬の五日秣を飼されば打とも進ず泥障とも馳得ず紛然として亂れ立國姓爺敵の勞れたるを

見すまじし滔波菟れとて後陣の勢を操出し短兵急難立けるよぞ王老虎が一万五千騎残り少に討
 まされ屍壘として數堆の丘をさし鮮血混々として白砂悉く紅井は變下ぬ主將王老虎の此
 体を見て噴る眼逆に裂今のは迄を同じ死せる道あらう國姓爺を討て死やと叫び討滅された
 る兵を一隊とみし赤龍興賈勒段を左右に從へ雲霞の如き敵中へ馳入縦横に斬立て悪戦其鋒
 は觸て命を落すもの數しらすといへとも鄭兵の十五萬の多勢されば事ともせず矢を射かけ闘を
 上て操立る程は遂に王老虎の林勝が一鎗刺れて死し赤龍興の載健と戦ふ裡流箭に中り馬より
 落て歩卒のため一刀に斬る賈勒段の翁天祐が鎗下り討れて肉泥となり自余の殘卒も悉く討れ
 しか國姓爺軍を繼て凱歌を唱へ安海の燒跡に陣を張兵勢日々熾されば漳州の本府も其勇
 烈に聞怖して將兵を帥逃奔りけるよより劍は鄭をして漳州を恢復し國姓爺喜こそ限なし手
 時義婦瓊燕國姓爺別を告て曰妾已三將を謀り將軍の手を借て亡す事を得て聊國朝の恩は
 酬えり今望み足ぬ暇玉のらんとして出行を國姓爺其才色を惜み種々曰て留れとも瓊燕さらば
 承引す袖を拂て出去けり其後福州の黃壁山ある惠門禪師も就て髮を剃て尼となりぬ法名の相香
 字は霜蘭と号し専ら佛道修行しけるとぞ此金瓊燕詩文も巧みありとかや實奇特なる婦人な
 りけり

○固山中謀 戰死 思明

却説廣州は唐王少時監國し玉ひけるは清兵十萬騎雲の興る如く押寄城壘近く逼りければ蘇
 觀生顧元鏡等力を竭して是を防さけるは清將韓固山謀を定め紅巾を戴き廣州の兵の操謀は
 打掃城中へ紛れ入蘇觀生を討副將杜永和が兵の唐王および周王益王遂王等を擁り福州は凱陣し
 て諸王を市に斬是に依て顧元鏡何吾陽等鈍々と髮を剃て清へ降りぬ又君州肇慶府の間は永曆
 帝防禦の術盡城を落て小船に乗西峽に溯り玉を陪徒の留式福一人のみを從ひ來る其後丁魁
 楚王化澄追々馳参り丁亥二年の春桂林に難を避玉ひしかども同四月清兵又韶州をかそひしか
 ば王坤等聖駕を促し楚の方へ落し奉る嗚呼痛しいかな去る丙戌の二月即位ましめてより戊子
 の年まで三年が間一日も聖慮を安んし玉の時をく諸州を漂浪し虜賊の爲に戮られ玉ひ繼は留式
 程が忠義より玉體を保ち玉命運の末を悲しかりける茲は國姓爺の漳州を恢復しける所は
 梧州の急使しバ〜來り聖体危急に臨み玉よし報するよほとりき鄭鴻逵は二萬の進兵を授け
 梧州を救しめければとも早聖駕楚の方へ遷り玉ひし後なれば鄭鴻逵力を落し御跡を慕ひ清兵を導
 り聖駕を安く落し奉る此間國姓爺の福漳の海島廿余所を切隨へ十五萬の兵を分て屯させ期
 は二萬余騎もて恩明州の居城に籠り晝夜軍機を凝らしけり此時福州は貝勒王諸院部の武

官を領し國々の柄撫を日夜に計るは韓固山告て曰國姓爺武威を逞しうして鳥嶼を奪ふ事其敵を
 しらす捨置とらひ奈何なる思をか慈出さん量がたし早く制せずんべ叶べから老渠が兵十五萬
 との聞ゆれども實の十萬騎は過す臣退て考るは二萬の永王を援ひ二萬の漳州を屯し十萬の大
 星は備ふ残る五萬の廿余箇所の島嶼を分ち鎮る然らば廈門の兵二萬は過べからす臣此處は衆
 し國姓爺を退して朝廷の宸襟を安んじ奉らんと事もなげはぞやける貝勒王が曰將軍の妙算理
 の至極あり然とも鄭族尤も武備は長せり明の弱將と日を同うして論せば還て敗を取べし宜
 三思を加て後兵をさし向へしといふを韓固山押返し臣曾て安平を責一戰はして功を奏す何の
 恐かひべき只臣は任せ玉へと強て乞望ふを貝勒王も制しかね然らば敵は三倍の勢六万騎を授べ
 し將軍一途の勇は疾らす事と臨で懼れ謀を用ひて努々敵を侮るべからせと戒む韓固山大いよ
 悦び此日より試場を開き六万の軍卒は進退を訓練せしむ時は思明州より國姓爺班の終日軍馬を
 練夜の連夜天文を望み觀けるが或日何の如く松に登て天文を觀ふ妖星の芒南海の分野を犯せり
 國姓爺翁ふもへらく永曆爺の正く廣東路は巡幸し玉へば此妖星は調り玉ふ事なしとも何の凶
 兆もやと疑ひ惟て更に決せず叔父芝豹側は在て曰賢姪よく彼妖星を卜るや國姓爺曰我いま
 だ是を知事能はず願くは高論を聞ん芝豹が曰天の理なり无聲にして能言それ星の萬物の精上よ

眼る、者なり然とも天の無心なり何の吉凶をか彰さん一天億萬の星の裡卿が眼は是を認て妖星
 となす是卿が心天の妖星なり不却早く守禦の備を固せんよと説國姓爺大いに悦び叔父の言説
 得て是ことて遠く麾下の諸將を集へ軍議し頗る雉堞の裡は空濠を掘其土を以て二重屏を築き三
 日が間ふ準備十分は調ひけり然る處は金星の守將函輝三千騎を帥て馳きたり告て曰福州より韓
 固山試場を擣て六七万の兵を練近日襲きたるよし間者より報じし將軍かならず油斷し玉ふべ
 ちも國姓爺莞爾として曰我已は其準備をなせり彼固山の我が母の怨敵あれば此所は來るを待
 一戰して盛はあし仇を復まべし卿が金星の漳州の緊要なり敵もし卿が用じ虐を親ひ不時は攻
 拔は再復甚だ難るべし速に去て大星を守れよと令す函輝が曰今味方勢を諸島に分て道城は籠
 る者二万は過す敵は三倍の多勢あれば俺がたし巨も將軍の一階を扶て敵を伐いへんと望む國
 姓爺頭を左右は揮勝敗の兵の多少よらす只將の機密はあり七万の疎甘萬州萬攻寄とも無慮よ
 せんこと我が方寸はあり卿の早く大星よかへり不時の變を防よとて固く宥さるれば函輝力あぐ
 透る兵を帥てを回りける去程は韓固山の諸軍の熟練せしを見てさらば進めよとて六萬騎を數百
 艘の軍艦に乗しめ南海を横切ばかりは漕運廈門の東南を圍み喚き叫び石火炮鉄炮を放こと賊の
 飛が如し思明州より忽て期したる事なれば些も懸がす賊徒夢仲の兩將數百艘の沙船を泛へ多く

の火器を備へ楯を以て船を圍ひ力を盡して防戦す國姓爺の五千の強兵を前門後門に分ち敵返しとぞ待かけける韓固山の三方の兵を帥て海濱より城の北門を押寄賊を咄と上鉄砲毒箭を放ち事雨の降るごとくなれども城中より伴と少々箭を射かけ支かねたる体もてなすよ固山も有べしとて副將杜煥張起を下知し我が量し違はず城兵甚だ不勢なり唯速に屏を崩し塙を破り一揉は踏潰よとて前後左右を壓けバ虜兵是は機を得て人煙を簾々し雉堞の根は混々と打寄大斧を拳鉄鞭を揮石を碎き塙を毀ち我劣じと功を争ふはとよわのや這城微塵もなるらんと思ふところよ忽然として城の隈より一箭の火珠飛出其聲天地を震どひとしく忽ち石垣の盤石拔出こと將基の子の落るが如し韓固山大い異み是鄭匹夫が謀計なるべし諸卒等早く退きて敵の意計を陥る事なかれと叫ども二万余の兵雲の如く寄附たれば奈何を制し得べき只身を揉であせるうち再度一箭の火珠天を沖と見るや否さしも堅固は見へし雉堞一齊に崩れかゝり霹靂の如く鳴て落けるよぞ憐むべし二万の攻兵一時ふかしうたれ泣叫聲石確地獄の罪人の如く或の頭を碎かれ或の眼飛出鮮は押る魚の如く押重てを死したりける此時また海上より戴健夢仲等順風を得て飛天噴筒といへる火器を船々より放ちかぐる其音ながら海底を濫へそが如く敵船の布帆は火燃うつり炎々と燃上るよぞ虜兵大い周障し是を消んとそれと風の強く火勢の烈く中々防

ぐ事能はず烟は咽炎は焼れ海中に投じて死するもの數をしらす戴健夢仲得たりやとて船を漕進て混斬を斬て落す程は海上の攻兵も命を助るの希なりけり韓固山の呆感て殘兵を聚るよ儘は五百人は過むそれさへ半の兵器を失ひ手足を損じたりかゝる所は城門を八文字に押開き國姓爺鄭成功百花の盔を戴き錦の戰袍を懸し赤兎馬を跨り三千騎を左右に從へ霧地暗に斬て出ぬ韓固山是を見て大い怒り乳臭の孺子何許の事あらん我が兵を折きたる反報は道奴が首捨切て腹療んと三眼鎗を提て菟向ふ國姓爺の韓固山を見るより正しく母の仇懸さじと怒氣心頭より發し髮鬚悉く逆に立只一刀を斬んと飛て菟る双方馬上の達者なれば縦横自在に乗廻し三十余合戦ひけれとも互は勝劣なく韓固山三眼鎗を電光の如く弄して開天の勢ひをなせば國姓爺の兩刀を陽炎の如く閃かして關地の威を示し請つ流しつ又二十合余挑み合しが固山怒て撞鎗を國姓爺早く右の刀を拂ひけるよ如何しけん鎗根より二ツに折たり固山得たりと再度操出す鎗を國姓爺手をもて空さまよ刃上馬は一拍いれて疾風の如く近寄左手の刀を揚て丁と斬り過たき固山が鎗を持たる右の手を肩尖より薙かんとせされとも名立たる勇將なれば猶瘡を早く左の手も刃を抜とり眞一文字を刺んとするを國姓爺遠さす左の手をも斬ておとす固山驍勇ありといへども兩腕を薙れて何ぞよく堪へさ大地へ倒とち世上らんと盡くを國姓爺馬より飛下り母の仇おもひ

知やと寸々斬て肉沈となす此強勇を見て殘兵膽を消我先と敗走せるを國姓爺が三千余騎圍を
作て追討よし悉く討取り海上より戴徒夢仲十分は勝利を得金鼓を鳴し螺を吹船を回きたり
陸より賊の兵身方を纏め凱歌を揚げる聲天地響て夥しかりけり

○設謀國姓爺破三福建兵

國姓爺の奇謀を用て虜兵六騎を虜よし就中母の仇たる韓固山を討取ければ武威ますく熾
なり泉州の小壘の及よ討せして逃失適々殘る者も百姓みな舊恩を去たひ韃將を殺し或は捕
降るほと思明州の兵十六萬よおよびぬ貝勒王是を聞て大いよおとるさ諸將を聚て曰韓固山自
ら血氣の勇よ誇り敵を怖り兵を折き身を亡せよ至る今の等閑は捨置かたし若泉漳故よ因て國
姓爺が手よ屬せば由々しき大事なり亟よ大軍を以て征伐すべしと斷するよ衆然るべしと同意
を貝勒王さらばとて二王子を大將軍とし左先鋒魯公右先鋒冉英二陣の先鋒司馬實徐岳三陣の大
將鐵故山貞孔四陣の大將劉泰定海五陣の大將温清何亞德其他一百の部頭二百の頭目都て其勢十
五万三千余騎同國の長樂縣よ塞を稱順治戊子 日本後光明天皇 三月各々誓を立血を飲り心を
一致よして國姓爺を撃んとす時思明州より破竹の勢よ乘じ福州を恢復せんよ日夜軍議を凝
を所よ北兵十五万騎よて長樂縣へ出張せりよて諸方より急馬を以て告る事雪の飛が如し國姓爺

些も動せず然らば此方よりも出張せよとて泉漳の兵十五万騎を三隊よ分ち五府の將軍六部の副
將七十二個の頭目よ令を傳へ整々と備を立て押出し場所を見定て塞をぞ掛ける時國姓爺三軍
よ指揮して曰韃軍の騎射を善し特よ烏頭班猫等の毒箭を放つ我が軍の馬の數ぞく歩卒多し依て
絹よ絮を裏み楯を覆ひ是を肉盾と号又簾よ緩く布を張て是を簾幕と号士卒よ聞て毒箭し防く便
となせよと命じければ衆軍大いよ悦び不日よ肉盾簾幕を多く作り設け準備十分調ひしかば然ら
ば一戦を催せよとて戦書を送り四月朔日よ兩陣互よ備を押し陣勢を張時よ北陣より一員の韃
將馬を陣外よ乗出す頭よ裏金の盔を戴き身よ青錦の戰袍を穿ち手よ三叉の鉞を携へ白馬よ跨り
て自ら左先鋒魯公と呼國姓爺よ一言告んと呼りぬ當下南陣よりも陣旗を開きて先鋒戴徒馬を
出す其打扮よ獅子形の盔よ生鐵の甲を披掛け紅襖を着し腰よ撥線の上帯を繫かけ高頭の
黒馬よ跨り丈八の網鎗を提て立り魯公鉞を以て戴徒を指て曰く明帝遊樂よ耽り政を脩る民
を虐げ生靈を困むる其惡傑紂よ等く天惡み地怒りぬ因て我が清王天よ代りて義兵を揚無道を伐
て萬民の塗炭を救ひ玉ふされば天下皆其仁徳よ懷き及よ討すして降る者秋草の風よ靡が如し然
るよ國姓爺天命を知す纔よ思明を柵として邊塞を犯し清王よ寇せんと是蟪蛄が立車よ向ひ青
衛の東海を埋んとするよ比し何ぞよく敵し得べき唯天命を畏れ時務を量りて速よ降り三軍の

命を全からしめよと曰ければ戴健大い怒り不毛の虜賊我公朝の弊に乗じ豺狼の心を逞して國を奪ひながら猶自ら殷湯周武を身と比するを奇怪なれ我が主鄭成公明帝の國姓を忝ならずし國王の爲に忠義の兵を集め天下を恢復せんとす其志金石よりも仍堅し奈何を區々として夷狄の爲に膝を屈べき見よ〜今爾が輩天誅亟に環りきて首身を葬るゝ地なるべしと散々々々惡口しけるよぞ魯公も勃然として大い怒り誰かある那奴射て落せよと指揮すれば聲は應じて矢を射出すこと雨の如し南陣よりも弓鉄砲を一齊に放ちかけ北陣より魯公冉英馬を出せば南陣より戴健楊祖轡をならべて殺出し喊を發かけて挑み戦ふ程は馬蹄は蹴立る土煙りの白日を曇らせ喚き叫ぶ聲は山岳を動かし凄じなんとも疎かり斯くて酣戦數尅にして兩陣傷者戦死夥しく日已に西海に没しければ兩陣互に軍を班て引退きぬ其夜國姓帝諸將は對ひて曰く虜賊多勢よてしかも勇壯なれば尋常の合戦よては勝利を得がたし明日は一奇謀をもて敵を微塵にすべしとて其準備をなしけり程なくその夜も明わたれば戴兵雲霞の如く押寄喊を上て攻進む南陣も同じく関を合せ水牛一百疋を陣頭は追立後より續て殺出せば北兵の大將の馬を連て向ひしかば胡馬水牛を見て大い驚き散々亂れ立よぞ北軍大い騒ぎながら騎射の達者なれば各毒箭を放て水牛を射るゝ水牛の箭を負て益々狂ひ吼り北兵を踏殺し角は掛て刎飛す南軍是は氣を得て鉦を

鳴し鼓々打て攻進む北兵も斬馬刀を以て水牛を切捨々々敵は當る茲は清の二王子は金風の盔よ緑錦の戰袍を披掛馳騁は跨りて後陣は扣しが敵水牛を放ち我が兵を敗るを見て下知を傳へ水牛沼を離れてハ力弱し唯陣を開て通さば自然去へしと令を先鋒の將實もとて水牛を避通して横切よ進むよぞ二陣三陣も是よならひ水牛を避て薄地暗に撃てかゝる戴健楊祖少時は是を支しが堪かねて敗走すること五里許にして一所の原野に至る北軍の勝に乗て一齊に追行し前路は竹筒を多く拾取たり何の料もやと取て見れば其中より山蜂の飛出る事數をえらす歩卒は飛かゝりて刺事針よりも利し鞋將大い笑ひ人みな國姓帝を韓信張良の如く怖るれども只是小兒の戯れのみ陸地は水牛を放ち竹筒は山蜂を貯ふ事何を怕るゝよ足んや悉く焼捨よとて二所を聚め火を掛るゝ忽然として竹筒より火珠迸り出其音百千の雷の如く轟くよぞ馬は驚き嘶て刎上り歩軍を踏倒し峰の火勢は怕て甲の透間より肌に入刺こと益甚だしく見る〜滿地火となり空より火珠の降こと雨の如くなれば軍軍大い周圍狼狽して互に押合踏倒し或は焼れ或は傷者數をしらすかゝる所は左右の峯より天地も崩るゝ如く喊を發し延平王と大文字を緹せし旗を指上伏兵一齊に起りて石砲を直下は放つ程は虜軍黒ふすばかり成て死する者數をしらす二王子は此石砲は中りて人馬とも微塵となる其他名有頭目打殺さるゝ者枚擧するゝ追わらず鞋軍膽を

消魂を飛し嶺より放す石炮を防ぐ方便なく只我先よと敗走して主を押し倒し引退はしる所
 南軍伏兵此所彼所より越立追討し討程よまた虜軍敷しらす討れ初十五萬と聞きしも二萬騎不
 足よ討なされ二王子さへ石炮の爲よ命を損せしかば長樂縣よ屯する事能はず棄を捨て福州へ
 逃回けり南軍十分よ討勝て勇み悦び遺勢よ乘じ福州へ亂入し貝勒王を擄よせよとて舉げる國
 姓爺是を制して曰是甚だ无用なり敵一旦敗るるとも猶數萬の兵われへ却て敗を取べし只長樂
 縣の塞よ捨おきたる敵の兵糧器械を奪ひて歸陣すること利得なるべしとて長樂の寨へいたるよ
 兵糧器械山の如く築置たり國姓爺諸軍よ下知して悉く車よ積し凱歌を唱て思明州よ版陣す
 其軍威宛も旭の昇が如くなれば遠近是が爲よ戰慄苦を卷てぞ怖ける

○國姓爺深智請二倭兵一

善兵を用る者ハ計を帷幕の裡よ定め勝利を千里の外よ顯とかや偕も國姓爺ハ一時の謀略を
 以て清兵十五萬を微塵よ碎き二王子をさへ討取ければ四隣怕れ慄き招がざるよ降る者絶間あく
 廿余萬の勢となり上下悦び勇む處よ妻の林氏曾て維熊の夢を感じ胎妊しけるが今年五月陰産個
 みなく玉の如き男を産けるよぞ國姓爺大いよ悦び諸軍を宴し多く錢帛を分ち與へ民兵を撫育せ
 時み諸先鋒商議して告ぐ曰王の威武南閩よ溢れ証して利あらざる事なく戰て勝る事あり但

し開永曆爺の龍繩廣東を巡幸し北兵の爲よ窘られ玉よ是皆群臣軍旅を曉さる故なり王早く
 福建を定め聖駕を迎へて人心を定め玉へ國姓爺が曰われ義を唱へ師を出してより三年戈を枕と
 し陣よ伏して百辛を汝ハ國仇を報じ宸襟を慰め奉らん爲あり然とも時いまた熱せざるを奈何せ
 ん戴健が曰泉漳の兵凡二十五万是を會して福建を討べ北兵争が支へ得べき請急よ羽檄を廻して
 兵を聚玉へ國姓爺が曰總將貝勒ハ智勇兼備せしを以て虜王是を軍師とせり輕々しく慢りがたし
 若福建を伐んとならべ倭兵の助力を得よあらずんば貝勒を退がたし日本ハ海を隔る事數千里今
 買船よ事を托せば明春ハ必も報を得べし其上よ計策を定むべし揚祖が曰近年倭寇我土を侵
 襲海氣將よ靖れるよもし今援兵を乞ふ倭寇の巢窟を開くよあらずや國姓爺が曰く森もと日本
 の地よて産る因つて彼土の人心を豫め知り小國たりと雖國王體統連續として武勇萬國よ冠た
 り然も義を見て命を輕んじ強を凌ぎ弱を助る國風なり何ぞ夷狄の海賊のとく弊よ乘ト不義を行
 ふべきと説聞すよぞ諸先鋒衆軍も承伏し然べ左も右も討らへ玉へと同意す茲よ於て國姓爺泉漳
 の買船よ觸日本よ使してよく援兵を請べき者やあると擇み求む此中早く閩中よ流布し福州へ
 も聞えければ福州の人民大いよをとろき近年倭寇の患を久しく忘るゝと雖國家の兵革よ困ゆる
 よ今また兩寇齊く到らば福建の人民ハ噍類あらじと怕れ或ひ商賈ハ妻兒を携へ海よ入農民ハ

老幼を扶て山中に逃隠る國姓爺の漳州の買李三貫といふ者を得て若干の貨物を賣とし長崎府尹への書を齎し戊子九月に漳州の港を出船せしめ又思明州一場の試場をひらき日々日本の歩戰の法を習し載健が曰將卒よく倭兵の法を熟練すとも其刀器も乏し是を奈何し玉ふべき國姓爺が曰われ兼て此準備をなし海中の臺灣へ人を遣し鑿船より前鑿鐵を多く買しめ今日も若手を得たり麾下の田六藏の森が日本の郷里平戸田中の刀匠なり渠を師として多くの鍛冶は倭刀を削すべし法を學しめ日一鎌片は鍛ひ臘寒の水を以て淬へ日本の眞刀を得こと何を難からん載健再拜して甲王の兵道は心をを用る事茲に至る敢て尋常の者の窺ふべきにあらず早く日本刀を假しめ玉へと勸む國姓爺歎び田六藏を師として多くの鍛冶は其法を學しめて日本の刀劍を造しめ自れ日々試場に出て三軍を指揮し倭兵の進退を精練せしむ斯て其年も暮己丑の春も成田六藏の數千の倭刀を造り出し兵卒の稍日本の陣戰は熟練す然るも漳州の買船販りきたり國國姓爺は謂して曰去る戊子の十月東洋大海まで俄に惡風は遭貨物殘るも海庭は沈み舟書をも俱に失ひし李三貫はこれを探り取んと海底は飛入ひししか其儘姿をだに見いはずとて各罪を請諸軍此報を聞大いに驚き蒼然として面色を失ふも國姓爺此とも驚かず諸將は向ひ莞爾として曰諸將かならず憂る事なかれ余倭兵を請せしし福建の人民を懼さん謀計なり日本王何の好有て



鄭芝龍妻
守節為賊
韓固山殞
命

イハハハハハハハ
オハハハハハハハ
カハハハハハハハ

カハハハハハハハ
オハハハハハハハ
イハハハハハハハ

刀ノ精

か數千里を隔し我國へ換兵を借べき況や彼國王中華より貢物せざるを以て威を海東に授け國變を窺ふ前より三貫の齋せし書ハ兵を請の書よあらむ昔日より府尹の情を得たる禮謝の書よして貨物もまた然り只惜くハ李三貫が命を損せし事よ今買船の回報を深く隠し倭戦も熟せし兵一万余騎が頭を半剃り額も青く 駭して倭兵の摸様も打扮せ先も立て福建を襲へし健軍ハ寒も狂く暖も鈍を以て予此春まで伴と兵を動かさず待しが期正も到れり一日も猶豫もへからずと下知も威徳揚祖等 掌を拍て感歎し眞も將軍の神智ハ呂望臥龍も勝れりと稱して止す遂も軍壯を調へ孤旅の日を卜三月初の五日も二千余艘の戰艦を賊し福建を望で押出さ此時福州ハ貝勒王國姓爺倭兵を請得て一齊も攻來ると聞將卒を聚て軍議して曰く鄭族兵勢強き上ハ倭兵を請きなりて交戦を挑んとす其銳氣尖かるへし今彼と戦ふハ火を防ぐも薪を以つてゐるが如し縱我が軍勝利を得るとも多くの士卒を失へし少時其來銳を避て却て兵を廣東に指遣し永曆爺を滅さハ鄭兵自然離散すべし譬ハ大火家を燒よ其火を救ずして隣並の家舍を毀とるハ災ハ他も及ずして火自然滅するが如し只敵の奇さる以前も南京へはしるも不如と曰ければ其高論も伏して諸提督尤も同意す是も依て貝勒王五方の兵を福建も留め其余の兵を師て福建を立江寧の地方も趣きけり嗚呼智なるかな貝勒よく機を見て變も應ず謂へし孫吳が秘訣を得たりと大清一統の世となせし

仁徳よよるといへども一ツ、貝勒が智勇の功なりけり去程、國姓爺が二十五万の勢追ふ
よ漕着て雲霞の如く海岸に上れば府城の兵の一戦、だも及む夜に紛れて三日が内、何國ともな
く落失せり

編者云、國姓爺の援兵を我日本に請ひける、實事よて松平紀伊守の臣松崎左吉の著し、窓の
すさみ拾遺といへる書に、たしかに載せたり左に擧ぐ

國姓爺の日本へ加勢を乞ひける時、中評議ありて老臣達、各御前へ召出され、是を見のがしよ
して、本國の名おれなれば、加勢遣はされんかとの、上意有し時、老臣達も有無の請なしが
たぐ見合されし、稻葉丹後守正勝これに其儘さし置れて、然べくと再三上られしかば、はけし
さあしくて入らせ給ひけり明日、召出て、仰よ云、昨日ヤせし處、思召しに叶はざりしが、つく
く、伊思案有、中處理、也加勢の事、ゆやめ有べきとて、事濟けり、今これを考るよ、丹後守の
智計、遠大の慮とぞ、えられぬ

○永曆爺奔南寧

國姓爺、福建の貝勒一戦、も及ばず敗走、去ければ、南海正に恢復す、然ども、福泉兩州の還なる、隅
なる地、一、糧將おは小壘を守り、動もそれ、軍本を出し、百姓を殘害して、止す、因て、己丑の春、より

福建、兵を屯し、泉州の馬都督が城を責落し、福州の林萬戸が城を攻潰し、一日も早く、永曆爺の聖
駕を迎へ奉らんと、間者を以て、廣東の消息を探り、聞せ、國姓爺一度、楚に向へんと欲すれども、貝勒南
京、撫江寧より、浙江までの間、切所、一、處將を籠さながら、櫛の齒をあらべたる如く、備たれば、輕
忽、兵を動さば、貝勒引違て、再度、閩を奪はん事を、恐れ、敢て兵を進め、見合居たり、茲に、永曆王の度
々、清兵の爲に、趕れさせ、玉ひ粵楚の地を、巡り、庚寅の正月、肇慶府に、駐り、世の動靜を見合せ、玉ひし
が、同六日、南韶の守將等、城を棄て、逃奔ぬと、報せらるよ、肇慶の行、在も、保ち、難く、同八日、船を、召て、西を
さして、落玉、是に依て、百官も、取物も、とりあへず、龍駕、從ひぬ、斯難、難、危急の秋なれども、夷彭年
劉湘、客丁時魁、金堡、張正發の五人、政を、専ら、し、上を、蔑如、よし、私欲をのみ、行ひければ、諸人は、是を五
虎と呼、唾吐して、忌悪み、けり、只、翟式相一人、忠貞を守り、五年が、間、王の爲に、身命を、抛ち、諸州の道、を、拂
是に、因て、銀幣ならび、精忠、貫日、の金印一枚、を、賜ひ、其、孤忠を、旌し、玉ふ、二月朔日、聖駕、梧州に、至り
暫時、愍慰を、安んせらる、所、よまた、清將、平南王、尚可喜、靖南王、耿仲明、各、五万騎の兵を、帥ひ、海、利
王を、輔け、吉安府を、攻立、鎮將、李、進、郝、尙密等、防禦の、術盡て、韃、降り、官を受、却て、北兵を、導き、關、入
と、風説するよ、又、行宮を、築て、二月廿九日、桂林の地へ、移落し、清兵の來、銳を、避玉ふ、同三月十九日、再
び、清兵、襲きたり、龍虎關の、戰ひ、御軍、大いに、敗績し、諸將、若干、戰死し、印、選、永祥、一、青、永祚が、驍、幸し

聖駕を促し榕江の城に入奉る。清兵跡を追て全州へ。透問もなく攻立ければ又此所より防禦する事能へ。十月四日聖駕南へ落し。王と獨留式相のみ城に留り印邊を促し守禦の計議を。あす一青揚國棟等の大將の落失永祚の敵は降り其餘一卒の留る者もあければ。式相大を仰で長歎し默然として在ける所へ總兵戚良勳二將を従へて驅たり聖駕の已は遠く去り。舊閣老早く落て後の計議を爲よと諫む。式相大い。叱て曰。それ死すべき時。死せざれば死は勝る耻あり。予明朝の大臣として。焉を命を惜み逃奔して名もなき虜奴の手。耻を得べき。古へより今。到り誰か死せざる者あらん。大丈夫。但死を善道。致すべし。你去べくん。速。去予の決して去じ。曰。民勳。而を紅し。頓で落去けり。茲。總督張同廠の靈州より歸りけるが。城中早空壁とありて。人々。舊式相一人。殘し留ると。聞喘騎。て城中へ入告て。曰。事已。茲。逼れり。將奈何がせん。式相神色。少も變せず。泰然として。曰。國家の臣。國家有。ことを知。國家已。恨滅。身將何國へ。か往べき。公。素り留主の職。あらず。盡。速。去ざる。同廠。愕然として。嘆じて。曰。古人も。獨君子たるを。愧願く。同く死。る。事を許し。玉。んや。式相。是を。聞て。大い。悦び。俱。酒を酌。か。し。左右を。顧る。中軍の。除高のみ。猶。不去して。居り。式相。其。義心を。感。近。招て。酒を。勸め。曰。ける。你一人。城に。留る。予と。死を。俱みせん。心か。徐高。か。曰。願く。將軍。陪。從。九泉。趣。き。い。ん。式相。泪を。流して。曰。夥多の。兵の中。は。你

一人。猶。義を。重んじ。命を。輕んず。謂。べし。眞の。大丈夫。と。但し。予。你。は。託す。べき。事あり。派引。玉。んや。否。や。徐高。が。狗命。已。將軍。は。捧。何。事を。か。尊命。は。從。さる。べき。式相。大い。喜。び。淵。書。御。劍。寶。璽。等。を。取出。し。徐高。と。與。て。曰。予。此。城中。に。死。せん。事。の。固。り。好。む。處。な。れ。とも。國。朝。の。御。劍。寶。璽。を。ら。び。勅。書。を。狗。黨。の。手。に。汚。ん。事。深。く。予。が。傷。む。所。あり。你。死。す。べき。命。を。全。し。何。卒。是。を。持。て。城。を。落。君。か。行。在。り。尋。行。て。獻。れ。是。予。と。同。く。死。する。は。百。倍。せる。大。忠。なり。徐高。不。悅。して。曰。く。身。將。始。より。死。を。決。して。留。れ。り。何ぞ。今。更。去。る。事。を。欲。し。い。へ。き。と。て。固。く。辭。ける。を。式相。同。廠。とも。種。々。言。を。盡。し。諫。め。ける。よ。徐高。今。の。辭。する。は。道。なく。己。事。を。得。ず。寶。器。を。受。納。別。を。告。泪。を。揮。て。落。去。ける。式相。の。大い。心。を。安。ん。じ。又。燈。を。挑。げ。て。船。を。同。徹。し。勸。め。稍。其。夜。も。更。て。三。更。お。よ。び。ける。所。清。兵。數。十。騎。刀。を。腰。に。し。弓。矢。を。携。へ。て。入。來。り。二。人。を。縛。り。捉。んと。す。式相。同。廠。叱。て。曰。我。等。兩。人。夜。の。明。る。を。待。て。清。の。陣。に。行。死。を。潔。せん。と。何。ぞ。縛。し。辱。んと。する。や。と。て。奮。然。と。して。虜。騎。と。俱。城。を。出。て。靖。江。王。が。府。に。到。る。孔。有。德。靖。江。王。二。人。の。來。る。を。み。て。忙。が。り。し。く。階。を。下。り。手。を。揚。て。曰。吾。湖。南。に。在。ける。が。先。生。の。榕。江。に。留。主。た。る。を。聞。故。茲。に。到。れ。り。兩。公。義。に。依。て。死。を。怕。れ。ざる。の。感。する。は。堪。たり。吾。何。ぞ。忠。臣。を。殺。す。べき。今。已。明朝。の。氣。運。盡。て。天。運。清。に。皈。を。余。も。前。朝。に。事。て。兵。馬。を。掌。り。しか。とも。天命。を。知。て。清。に。屬。し。今。靖。江。王。の。封。を。得。たり。先。生。また。明朝。の。餓。糧。を。掌。れ。り。願。く。清。に。降。り。玉。へ。余。清。王。は。奏。して。重。職。を。

乞て先生は勸め前朝の如く相交ばまた善すやと曰式桓大い怒て曰我は是天朝の大臣城己は
 陷るが爲一死を需んとて來れり何ぞ降參不義の爾がためは職を受んや益なき舌を勞せんより
 疾斬よとを呼りける有徳が曰我は是王位に居すされと卿が忠義を賞し言を卑して好意を告る
 よ何ぞ承引ざるや式桓益怒り昔唐の安祿山不義無道にして猶自身王と稱せ卿また然り何を王
 位の賤やと劬りければ有徳心は憤り先生我を碌山は比すれども我敢て君を凌す余は是孔子
 の裔孫たり勢の逼る所今に至る先生賤むる事なかれといふ言いまた終ざるは同廠聲を厲よ
 して曰爾はこれ不義の匹夫にして碌山も猶勝れり然るは猶聖裔と稱し自先聖を辱しむるや
 と散々罵て止す孔有徳大い怒り左右を命して同廠を縛らせ其背を斷んとす式桓大い叫
 て曰是天朝の忠臣宮詹司馬張同廠たり余と俱に亟に斷べし何を辱むる事をするや有徳笑て
 曰是一時の戲のみとて索を解衣冠を還して座せしめ偕曰余實は卿等兩人が智能を惜む願くは
 清事へ玉へとて種々勸め諭せども兩人が心金石の如くなれば是非なく民家は兩人を預むる時
 々辨舌勝れたる官吏を遣し髪を薙て清は降ん事を勸れども兩人頭を揮て不肯官吏もて餘し然らば
 自ら僧とならば如何と問ふ式桓が曰僧の髪を剃の漸なる者なり髪短く命長きは我愧る所なりと
 て敢て聞かれず日夜同廠と俱に詩を賦し唱和して其志を述只管死を待こと四十余日及びぬ

然るは一日虜兵とも數十騎俄よきたり瞿園老出よと呼式桓同廠を顧て曰是かならず我徒が死
 すべき期きたれるあらめとて兩人衣冠を整て南をむかひ永曆王の行在を拜し手すから餘せる
 幽離詩兩人唱和せる諸稿と俱に案上は置寛然として北み行路上兩人相謂て曰身死す共靈鬼
 誓て虜賊を殺んとて歩で城の隅に到るは一個の盤石あり式桓顧て曰余平生山水の佳を愛す此
 石頗る佳なり此所は死せしと乞刑する者其請を從ひ遂に張同廠と一時に斬罪しぬ瞿式桓が辭
 世の詩よ

從容待死與城亡 千古忠臣自主張

二百年來恩澤久 頭絲獨帶滿頭香

同廠の刑せられければ屍敢て斃れを首地は落て躍り上ること三度眼を怒し炎の如き息を吐よ
 を虜兵大い恐れ駭く所は忽ち晴天搖擧りて暗夜の如く霹靂天は轟き電光空は閃きて降雷の掌
 の如く忽ち十四人を擊殺しければ残る者とも大い恐れ惑ひ面色土の如くあり這々よを逃か
 へりける

○永暴帝漂没

永曆王の十月四日に榕江を出させ玉ひ同十一日海州に至らせ玉よ陳邦傳忽ち謀叛し聖

駕を奪ひ敵に降んと謀るを王化澄此山を渡り夜半雨を冒し嚴起恒王化澄憑吉翔龐天壽等數人
 聖駕を守護し助け出し奉る斯火急の變事なれば御駕は後れたる諸臣は悉く邦傳がため討れ或
 の水は落て死する者枚擧するは遠あらず同月十六日聖駕幸して南寧に至り玉ふに中軍の徐高階
 々勅書御劍玉璽を持して來り謹んで獻る永曆王問て宣く朕が落し後の事の奈何徐高答て奏
 すらく三日より廣州已に破れ五日より桂林破る杜永和以下の諸將みな髪をそりて敵に降れり上
 承のりい皇爺また問て曰く榕江の奇何徐高が曰城中の將卒皆敵に降り或は落失惟羅閣郡一
 人のみ城を守り臣は命じて寶器を君に奉らしめい皇爺是を聞玉ひ苦を一聲哭して地は昏倒し玉
 人諸臣駭て急扶起し奉るは皇爺漸々蘇り王化澄は對ひ宣く朕監國してより六年一日
 片時も心を安んぜず上の祖宗の爲は恩を酬ひ下の臣庶の爲は賞を施す事能はず是みな朕が不徳
 あり式拒が如き忠臣をら國の爲は身を失へり他の諸臣はみな離れ叛き今天下廣といへども朕は
 従ふ者の卿等數人は過ず此上の卿等も朕を捨早く去て生を安んぜよ王化澄嚴起恒等謹んで奏し
 けるは皇爺何がゆへに斯り事を曰く昔漢高祖は楚項羽と戦ひ七十余度まで敗れしけれど遂は烏
 江の一戦は楚を亡し四百年の基業を開きいれり心弱くなおもひ玉ひぞと諫め借王化澄徐高は
 問て曰鄭鴻遠の奈何ありしや徐高が曰鄭兵も散々も敗績し鴻遠は流矢の中りて死し殘卒は八方

へ離散し王化澄又問て曰張同廠の奈何徐高が曰同廠は單騎にて榕江の城中へ入閉閣老と同く死
 せんことを乞ひひしが必定同時に死し玉ふらんと答諸臣是を聞て大い氣力を屈しけるが斯ては
 如何と皇爺の御手をとりて落行兩日が間識は捕飯少しを進め奉るのみなれば皇爺飢は臨て歩
 み惱ませ玉ふ馮吉翔見かねて民舎に入是は明朝萬乗の將まわたらせ玉ふ今糧賊の爲は害られ
 玉ひ南寧は落きたらせ玉ふ爾們三百年來の國恩を思ひ宜く護送し奉れよと叫百姓等が曰萬曆
 より以來朝廷の奢侈甚だしく酷吏賦税を厚くして萬民塗炭の因を受然に皇爺の窮迫も維天
 の罰をる所あり誰か是を救ふとて敢てよりあへず皇爺の民が愚言を聞玉ひ左右を顧て御膳
 を置せ玉ひ亡國の君は庶民だも棄る事斯の如し況や朝楚暮秦の諸臣をやとて深く嘆き傷玉ふ王
 化澄以下是を慰め奉り是より土州は忍ばせ奉らば南海の國姓爺が消息を得て再び恢復を圖る便
 なからむやんとて御駕を促し羅溪といふ渡口に着津吏其凡庸ならざるを見て聖駕を迎へ奉り船
 中は在合麥飯を薦め奉る王化澄が曰昔漢の光武帝軍中にて飢て臨み滹沱河の渡りて麥飯をめさ
 れしより遂に王莽を亡し後漢を中興し玉ひさされば其先例をおもふよ正しく政運を開せ玉ふ
 さ吉兆よていべしと祝し奉りければ君を始め諸臣もすこし色を整しけり江吏大い悦び賊し
 て順て土州の地へ送り奉りけるが其後皇爺および諸臣何國へ落奈何なりしや聖駕の驛る所をら

す明朝滅の程を悲しかりける

○戴健遺計破北兵

却説 國姓爺の福建を攻落してより武威を七閩に輝し猶も福泉漳三州残なく平定せんと戴健は八万騎を授て留主居とし林勝は三万騎を與へて閩南の游擊將軍となし期に残る兵を領して小壘どもを攻立ける然る所は永曆四年庚寅十一月の中旬廣東に向ひし兵追々は逃回り廣州肇慶府より桂林榕江に至るまで悉く敵のためは攻拔れ叔父鴻逵將軍の流箭は中て卒し玉ひ器式相同廠の囚れ其他の諸臣は難く死する者として一人もなく悉く敵は降り永曆爺の纒は三五の内臣と俱に何國ともなく落失玉へりと告げるよと國姓爺天を仰て長歎し嗚呼命なるかなと憤怒の泪は甲の袖を沾しけるが又おもひ返し此上の聖駕を尋て迎へ奉り中國を恢復せんと諸將と相謀り閩の兵を思明州に聚め壘を堅し堀を深し守禦の備を嚴密にして専ら軍議を凝しける于時南京より廣東の交戦は打勝永曆王逃奔有しかば貝勒早く北京へ奏し此上の國姓爺を誅罰し天下を一統し平定しけり閩南征の援兵を賜へしと求む清王大いに喜び其旨諸臣へ令を下されけるが其年程なく暮翌は辛卯正月天下を悉く清の年号順治を用ゆ然とも惟國姓爺が領下のみ尙永曆の號を用ひ晝夜寢食を忘れて恢復を圖りけるは實に忠義の士と謂つべし斯て清朝は辛卯五月

北京の援兵二十萬騎南京に着到す便ら征南王を大將軍とし右先鋒安大人左先鋒王狀元副將軍加勒王先鋒部院從經同李成泰金故山水故山木故山土故山提督馬德光廣東の降將胡一青永王祥李士澹郝尙密其外數千の頭目雲霞の如く仙霞嶺を直下し福建道へぞさしかりける福州は戴健此義を聞て大に駭き急馬を以て思明州へ注進し援兵を乞ふこと櫛の齒を挽が如し國姓爺是を聞て使者は對ひ北兵去年廣東の戦は討勝て勢ひは乘ずる其銳氣太に尖し況や新兵三十萬是等閑の敵は非き余馳向て雌雄を決するは安ければ我が閩將とても其心持がたし萬一留守中は變あらば進むは道なく退ぞくは國をかるべし惟敵の來銳を避兵を全うして我が思明へ回るべし前さよも貝勒機を見て福建を捨て南京へ回れり是れ智將の謀略なり今戴健また是れならひ回るとも何の恥辱かあらん早々立回り此旨を傳よと命じければ軍使承はり馳回て戴健は國姓爺が命を達す戴健聞て然る思明へ回りなん遮莫北兵は一驚を喫しめんとて二件の謀計を案し出し焔焔を煎じて紙を染悉を張屏障を造竈の下に土を三尺ばかり掘りて火藥を置し裝て埋めわき又鹿の鳥頭汁を浸し乾せる秣を儲へ井の砒霜の毒石を敷設謀討已は調ひければ八萬の兵を四隊に分夜に乗じて思明州へぞ起さける城民は韃軍の再び攻來ると聞て如何なる暴虐をかなすらんと安き心もなく老幼を扶け資財を運びて山林に逃隠れ或は他郷に移り騒動する事大かたならぬ斯て

同年六月、清將征南王三十萬の猛軍を帥て福州の地へ入けれども敵一人もあく無人の境に入がごとし左右の先鋒安大人王狀元、先城中へ入て點檢し士卒を令して曰、鄭族究て詐の謀計多し、城中如何たる奇謀を藏し我が兵を穿つと陥んと巧も知がたし、屏障の類ハ盡く焚棄よと下知しければ、頭目等其意を得城の隅ハ屏障を積かさねて火を掛けるよ、忽ち空中ハ飛上り火の雨を降しけるよと頭目等大いハ駭きさればこそとて立騒うち火炎八方ハ散亂し埋みおきたる窺の下の火薬ハ火移り霹靂の如くハ一聲震とひとしく大地裂て火玉空中ハ飛回り數百人の頭目等手を拵き面を損じ死する者數をしらず少時の間ハ城隅ハ屍の山を築きけり、安大人王狀元此跡を見て深く恐れ案ハ違ハぬ鄭族奇計を設たり決して城中の井水を汲取なれば毒石を沈て我軍を塵にせんも量がたし別ハ新井を穿ち川ひとと令す征南王是を聞て曰、兩先鋒の言甚だ理ハ中れり予天ハ新て新井を穿るべしとて丹誠を凝して天神地祇を拜し、自劍を抜て大地を刺けるよ、天命清ハ歸する兆ハや忽然として一脈の泉湧り出三軍大いハ悦び萬夫ハ命じて其土を穿鑿しめ頃刻の間ハ一個の新井を得たるぞ不測なりける此夏の末ハ雨降ざる事兩月ハおよびて原野の草焦枯て稊ハ乏しければ馬廐是ハ困みけるハ廐の側ハ拵たる菽の葉數千束積上たれハ大いハ喜び是を救ふ和し馬ハ餉けよ、數方の馬俄ハ悶困み漸々ハ斃死を典廐ハ其毒死なるを覺らず是炭暑の爲

は病るならめとて湯藥を與へて療せしむれと露ハかきの驗なく數萬の馬を殺して後初て秣ハ毒あるを先鞭將面を見合せ敵の謀略ハ委きを怕れ合けり、思明ハ國姓爺戴徳が回り來りしを悦び二十萬の兵を屯し敢軍を出さむ土州より雲南の地方へ哨者數十人を遣し永曆王の聖駕を迎へ奉らんと普く探り尋しめければ如何なる事ハや敢て御行方知さりけるを是非もがき

○函輝定計殺阿克商

期て征南王ハ福州ハ屯して阿克商を閩の遊擊將軍とし安大人を招撫使と定め漳泉の間を鎮

専ら思明を伐ん軍議ハ日を送りけるが茲ハ函輝ハ二萬余騎よて大星城を守る事ハ三年ハおよぶといハとも要害堅固の切所といハ函輝智勇兼備の名將なれば福州より肯て兵を進得を久しく安閑たり然れども函輝少も守禦の備ハ怠らざる器械を備へ砲聲を絶事なし于時清の遊擊將軍阿克商二萬の兵を帥て泉州の界ハ入けるが左軍術林孔ハむかひ我比泉州の地ハ入ながら大星其儘ハ拵置たハ本意ならず依て即今大星ハ押寄一舉ハ踏破らんとおもふ間其準備ハせよと命ず林孔諫めて曰く大星ハ小壘ありと雖山水を左右ハ緊要の名城ある上守將函輝ハ樊噲韓信が智勇を兼し老練の將なり今彼と戦ハ多く兵を損する計ハ勝利を得ん事覺束さし惟辨論ハ巧みなる者を説客とあし利害を説て降しめば及ハ不戦して大星を得べしと止む阿克商怒つて曰く卿